愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第32集

朝日(あさひ)遺跡 Ⅲ

1992

財団法人　愛知県埋蔵文化財センター

序

遺跡から出土する遺物の中では、その量の多さや、地域や時代を分ける指標となる多様さをもつ土器がどうしても注目されがちですが、原始・古代の生活を探る上においては、それ以外の石や木・骨で作られた遺物も重要な意味をもっています。特に湿潤なわが国の風土において、「木」は生活のあらゆる場面に用いられ、古くより独自の「木の文化」を育んできました。

五分冊にわたる朝日遺跡の報告書のうち三冊目にあたる本書『朝日遺跡Ⅲ』では、朝日遺跡で出土しました木製品・骨角製品・金属製品を取り上げて報告しております。特に、木製品では鍬・鋤などの農耕具や槽・高杯などの容器、人形・鳥形などの祭祀具、骨角製品では釣針や装身具、金属器では集落との関係がわかる貴重な資料となった銅鐸など、これらはいずれも土器だけでは知ることのできなかった弥生時代の人々の生活や考え方の一端を示す好例となると思われます。

このように、以前とは比較にならないほどの多量の木製品や骨角器などが出土し、記録の対象とすることができたのは、ウエルポイントの使用などの発掘調査技術の改良によって、谷地形や流路部分の精緻な調査が可能だったということや、保存処理技術の向上などが大きく貢献したからであると考えております。

最後に、調査を行うにあたりご理解をいただいた建設省中部地方建設局愛知国道工事事務所・道路公団名古屋建設局の方々、ご指導・ご協力いただいた愛知県教育委員会、地元教育委員会および住民の方々、その他ご協力を賜った多くの皆様方に対し、心より謝意を申しあげ、本書が朝日遺跡の理解と埋蔵文化財研究の一助となることを願う次第であります。

平成4年3月

(財)愛知県埋蔵文化財センター
理事長　高木鐘三

総目次

朝日遺跡 I

序説 1
序説 2
第 I 部　調査の概要
第 II 部　遺構

朝日遺跡 II

第 III 部　自然科学的研究

朝日遺跡 III（本書）

第 IV 部　木製品
第 V 部　骨角製品
第 VI 部　金属製品

朝日遺跡 IV

第 VII 部　石製品

朝日遺跡 V

第 VIII 部　土器（土製品）
第 IX 部　総論（研究総括）

例　言

1．朝日遺跡は、愛知県西春日井郡清洲町・春日町・新川町、名古屋市西区の1市3町にまたがって、東西約1.4km、南北約0.8kmの範囲を有する大遺跡である。

2．本書は、昭和56年、昭和60～平成1年にわたって実施した名古屋環状2号線建設に伴う事前調査（調査面積49624㎡）にかかる発掘調査報告書5分冊のうち第3巻『朝日遺跡Ⅲ』（「第Ⅳ部　木製品」・「第Ⅴ部　骨角製品」・「第Ⅵ部　金属製品」）である。

3．調査経過、調査担当者および組織は『朝日遺跡Ⅰ』（1991）に記載したとおりである。

4．調査にあたっては、本センターの理事および各専門委員、愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センターの指導を得たほか、清洲町教育委員会、建設省愛知国道工事事務所、日本道路公団名古屋建設局ほか関係諸機関のご協力を得た。

5．本書で使用する時期区分は『朝日遺跡Ⅰ』の「例言」によっている。ただし、貝層や包含層に掘削された遺構や再掘により下層のものが混入しているおそれのあるものや、貝層・包含層出土のもので詳細な帰属時期の不明なものについては、幅をもたせた時期を設定している。

6．遺構の分類呼称と記号は『朝日遺跡Ⅰ』の「例言」によっている。また、遺構番号も同書のとおりであり、旧調査区と新調査区の対照図を新たに図1に示した。

7．図版中のスクリーントーン表示は下図のとおりである。ただ、欠損部については、破損しているか確実に新しい欠損と認識できるものに関してのみ表示しており、原形を改変した痕跡や欠損との認定ができなかったものについては表示していない。また、外郭線よりも細い線で示した復元線についても同様の基準を用いている。

欠損部

表皮

8．断面図については、基本的に下方向・右方向より観察したものになっているが、鍬・鋤・斧柄の一部は刃部方向より観察している。また、見通し断面のものは→で見通し方向を示している。

9．木目の方向は確実にわかるもののみ模式的に記した。また、樹種同定は部分的におこなっており、結果は一覧表に掲載した。

10．骨角製品の種・部位同定では、西本豊弘（国立歴史民俗博物館）・佐藤治（愛知県立岡崎盲学校）、銅鐸に関しては佐原真・沢田正昭・肥塚隆保（奈良国立文化財研究所）の各氏の御教示・御協力を得た。

11．執筆分担は、下記のとおりである。

第Ⅳ部第1章1～3・第2章1	石黒立人（調査課調査研究員）
第Ⅵ部第1章3	赤塚次郎（調査課調査研究員）
上記のものを除くすべて	宮腰健司（調査課調査研究員）

なお、トレース・整理全般について伊藤慶子・伊藤千春・枝廣千代子・中垣内薫・林素子・長谷川恵子の協力を得た。

12．本書の編集は宮腰が行った。

新旧調査区名照合図

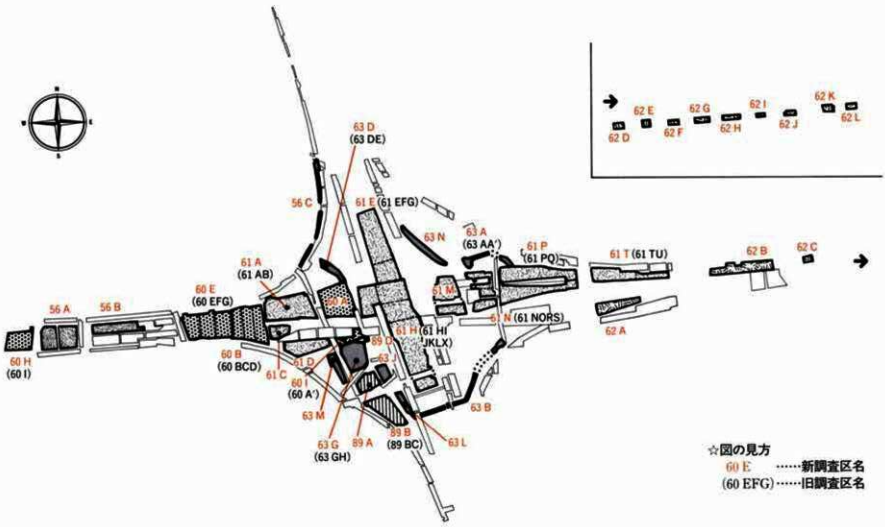


図 1

目次

第Ⅳ部　木製品

第１章　資料の分類

１．農耕土木具…２
　(1)Ⅰ類…３　(2)Ⅱ類…４
２．工具…５
　(1)石斧柄…５　(2)鉄斧柄…５　(3)その他…５
３．田下駄・大足・そり状木製品…６
　(1)田下駄…６　(2)大足…６　(3)そり状木製品…６
４．下駄…６
５．棚状木製品…７
　(1)Ⅰ類…７　(2)Ⅱ類…７　(3)その他…７
６．横槌…７
　(1)Ⅰ類…７　(2)Ⅱ類…８　(3)その他…８
７．竪杵・その他…８
　(1)竪杵…８　(2)その他…８
８．臼…８
　(1)大型臼…８　(2)小型臼…９
９．容器…９
　(1)高杯…９　(2)椀・鉢…９　(3)箱形容器…10　(4)杓子・十能形木製品…10
10．梯子・建築材…10
　(1)梯子…10　(2)建築材…10
11．火切り臼…10
12．弓…11
13．紡織具・編み具・その他…12
　(1)緯越具…12　(2)緯打具…12　(3)経巻具・布巻き具…12　(4)杵…12
　(5)目盛り板…12　(6)木錘…13
14．刺突・切断具…13
　(1)ヤス状刺突具…13
　(2)鉇形・剣形木製品…13　(3)その他…13
15．箱状木製品…14
16．櫛…14
17．祭祀具・装飾…15
　(1)祭祀具…15　(2)装飾具…16
18．板材・原材…16
　(1)板材…16　(2)原材…16
19．有頭棒…17
　(1)Ⅰ類…17　(2)Ⅱ類…17　(3)Ⅲ類…17
20．その他…17

第２章　まとめ

１．木製品の出土状況…18
２．紡織具・編み具について…27
　(1)紡織具…27　(2)編み具…29
木製品出土遺構一覧表…31
木製品一覧表…35

第１章　資料の分類

１．農耕土木具

農耕土木具の分類につきまとう不明確な問題のひとつに、鍬と鋤の区別がある。鋤は身と柄が一体となってつくり出された一木鋤は別にして、着柄部（軸）をもつ鋤身の場合に柄の付け方によっては鍬となるものがある。「膝柄鍬」と呼ばれるものがそれである。

一方、鍬（又鍬は除く）は、身に穿たれた柄孔が直交する例はよいが、身部に対して斜めに穿たれている場合は、柄と身の角度によって鍬にもなるし、鋤（踏鋤）にもなる。第１図の２は柄が身と広角をなして着柄されて出土したものであり、１は平坦な組み合せ部と緊縛部を持つ直柄と考えられる。

こうした区分の曖昧さは、身の形状によって鍬・鋤という区分をおこなっていることにあるとともに、そこに機能的要素までも含ませているからである。

したがって、分類上の混乱は身部のみによる分類と柄の装着された状態で出土した資料を同じ水準で分類しているから生じるのであって、基本的に身部のみの場合はその使用状況はわからないのだから、そのものの形態分類と使用形態を想定した分類とを区別して行う必要があろう。

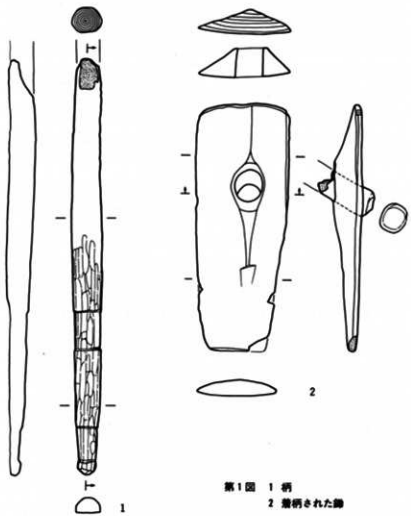
さらに伊勢湾地方の農耕土木具をながめた場合弥生時代中期後半にまったく在地の系譜からはずれた農具が出現する。これは「膝柄鍬」と呼ばれているものであるが、もっぱら加工斧の柄を大形化したような柄を装着すると考えられている着柄部の形状に特徴がある。それ以前の広鍬に相当するものはなく、狭鍬・又鍬に対応するものが知られているほか、二又の新しい形態も出現している。これら「膝柄鍬」と呼ばれているグループは、確かに柄を装着した状態での出土例があり、柄と身部の角度が鋭角をなすことから「鍬」とされているわけであるが、しかし柄と身が別つくりであることを重視するなら、一概に固定した使用法を想定することには躊躇を覚える。先に鍬のところで触れたように、柄が装着されていない状態で鍬とされてもわずかではあるが踏鋤としての柄の装着例もあるのだから、ここでも柄の装着されたものとそうでないものとを区別する必要があろう。

すなわち、形態分類は形状に基づく分類をし、柄が装着されて使用方法が推定できる資料はそうした分類をすればよいのであり、「白か黒か」的な二者択一の扱いは控えておきたい。

以下では新しく「膝柄鍬」的着柄グループをⅡ類とし、それ以外をⅠ類とする。

Ⅰ類では、身部のみでは形状に基づき「鍬形」「鋤形」とよび、着柄例については「鍬」「鋤」というように呼称する。

Ⅱ類は、「膝柄鍬」「膝柄又鍬」など、「膝柄」という名称を付してほかと区別する呼称法が普及しつつあるけれども、朝日遺跡例では両者の柄の装着方法に若干の違いがあり、果たしてどちらも膝



第1図　1 柄
　　2 着柄された鋤

柄を装着したかどうか検討の余地がある。

したがって、朝日遺跡で着柄例の出土していないⅡ類については「鍬」「鋤」および「膝柄」という名称は使用せず、アルファベットでA・B・Cというように表記する。

（1）Ⅰ類

鍬・鋤形……製品（1～26）

柄孔部分から刃部にかけて幅広くなるものをA、柄孔部分の幅と刃部幅がそれほど差がないか刃部のほうが幅狭になっているものをB、ほかに楕円形を半切したような形態をとる小形品がありこれらをCとする。

Aはいわゆる「広鍬」、Bは「狭鍬」に相当すると思われが、刃部幅は前者が14cm以上、後者が12cm以下である。出土点数はBが多い。

AはⅡ期～Ⅴ期まで各1点出土している。1・2は頭部側の側縁に刻みを施し、おそらく頭部上端は直線的である。3・4は柄孔両側を深く抉りこませて頭部を半月形につくりだしている。1・2は在来系であり、それに対し3・4の特徴はⅣ期の外来要素と考えられる。

Bは12～14のように逆台形を呈する平面形のものをb、それ以外をaとする。aのうち5・6・10・11は方形周溝墓内から出土したもので、いずれも柄を装着した状態で検出されたが、6のみ舟形隆起が柄側にある。また、1・2と同じ刻みが頭部側縁にに加えられている。最古の資料である

7は舟形隆起が木葉形を呈し、他が刃部側へ隆起が延びているのとは対象的である。その他舟形隆起を持たず柄孔部分を厚くしているものがある。bは12に舟形隆起がある。それ以外は柄孔部分を厚くして補強している。

15はBとしたけれども、頭部の形状はⅣ期のAであり、再利用されたものであろう。

Cは26の決定時期に問題があるが、他はⅣ期以降に属する資料である。21は身幅が異様に狭く特殊な形態を呈するので、この一群は区別しておいたほうがよいであろう。

Cにあたる資料は全体に磨滅しており、形状からも破損したBを再利用したものといった観もあるけれども、特定の時期（Ⅳ期）に集中することをみると独立した範疇にあると考える。

鍬・鍬形……半製品（27～43）

未製品はAに関係するものがほとんどである。平面形はⅡ期が長方形で、それ以後は柄孔部両側縁が斜めにおとされて五角形を呈するようになる。31～38はⅣ期に属す資料で、柄孔部両側のおとしかたの強い35～38、弱い31・32・34、抉り込みのある33がある。30はこれらと同形であるが、出土層位の時期はⅡ～Ⅲａ期で古い。あるいは時期比定が誤っているのかもしれない。柄孔は焼き焦がしによるもののようで、工具痕は認められない。

39・40はBの未製品で、39の柄孔は穿孔途中である。これも焼き焦がしであろう。40は柄孔は貫通しているものの刃部の形成が行われていない。

42は割材を整形しただけのものである。長さからみて2連が限界で3連は無理である。

又鍬（53～56）

53～55はⅣ期かそれ以降の資料である。歯は4本程度と推定される。柄孔は方形を呈している。

73・74　他には74のような「丸鍬」と呼べるものや、鍬に組み合わされる「泥よけ」と推定される73が出土している。

鋤・鍬形（44～52・72・75～80）

一木鋤（44～47・51・52？）と組み合せ鋤（48～50・75～80）がある。

44～50は方形周溝墓内から出土したものである。このうち44～46がＳＺ301北溝東端で溝底に置かれた状態で出土した。身部には柄の延長部に隆起が作られ補強されている。

45の握部はくりこみ部分がT字状を呈す珍しいものである。

49・50の着柄軸は下面側が平坦であり、いちおう柄の装着を助けるような形状をしているが、もともと一木鋤であったものが柄の破損などによって変形したものである可能性が高い。

72は一木鋤の半製品である。

75～80は鋤とするには躊躇する一群である。75～77には柄の緊縛用と考えられる2孔が上部にあって、先端は薄くなり刃部といった趣もあり、組み合せ鋤の一種と考えられないこともないけれども、78～80は2孔がほぼ中央部にあり特に先端が薄くなるわけでもないので、鋤というよりは櫂としたほうがよいのではないかと思われる。木目を見る限りは、2孔の位置が76・77より下にある75も櫂の可能性がある。

（2）Ⅱ類

A（60～67）　断面が偏平で、幅の広い着柄軸をもつ。使用時の「縦方向の柄のずれを防ぐ」ための段と緊縛用の溝をつくるⅣ期の例と、そうしたものを持たないⅤ期以降の例がある。66・67は形態上は小形品であるが木取りは柾目で、異なっている。農耕土木具という範疇では誤りかもしれない。

B（57～59）　又鍬に比べて多歯である。57・58の着柄軸はAとは異なり、両側をわずかに立ち上

がらせて溝状とし、使用時の「横方向の柄のずれを防ぐ」ようにしている。そして溝の先端には柄の先端部をはめ込んで固定するための抉りが設けられている。着柄軸先端には緊縛用の溝が作られている。

59は柄の先端をはめ込む抉りが認められるもの

の、他は異なる。使用によって変形したのかもしれない。56は着柄軸部分が欠損しているが同じであろう。

C（68～71）　身が二又を呈するものである。着柄軸は欠損しているのでわからない。68はやや形状は異なるものの同類と考えられる。

2．工具

ここでは石斧および鉄斧の柄を扱う。

（1）石斧柄

膝柄（81～88）　柄は斧本体を固定する部分（台部）と手で握って保持する部分（握部）からなり、形態は「レ」字状を呈するので「膝柄」とも呼ばれている。

製品……81～83は偏平片刃石斧の柄である。台部先端には緊縛固定用の突起がつくられている。84は柱状片刃石斧の柄である。石斧挿入部は欠損している。握部の中ほどの台部よりと先端には孔があけられている。肩かけ用の紐を通したものであろう。

半製品……幹と枝の二又部分である。85は台部に相当する部分に厚みがあるので柱状片刃石斧用であろう。他はやや薄いので偏平片刃用であろうか。

直柄（89～91）　膝柄に比べて出土点数は少ない。

製品……90は頭部の残欠、91は頭部から握部にかけての残欠である。

半製品……89は装着柄をあけるだけになっている。やや偏平になっているが、土圧によって変形したと考えられる。

（2）鉄斧柄

直柄（95）　95は平面形が長方形をなす挿入孔がつくられている。挿入孔の幅は約3㎝と小さいので、もしこれが鉄斧柄であれば別本に装着したものをここに挿入することになる。しかし鉄斧柄とする確証はない。

膝柄（96～98）　96～98は石斧柄のような台部基端の突出がない。96は台部が短いので袋状鉄斧を装着したと考えられる。97は握部中ほどが削り落とされて面がつくられている。

（3）その他（92～94）

92は膝柄の台部と同じ形態である。破損品を加工したものであろう。93・94は組み合せ式の柄であろうか。

3．田下駄・大足・そり状木製品

（1）田下駄（99～104）

確実なものは101・102の2例で、どちらも縦長タイプである。緒孔は3ヶ所にあり、前の1孔は片側によっている。これら足固定用緒孔とは別に前後に1つずつ孔が穿たれており、この足板に輪を固定するためのものと考えられる。101はⅣ期、102はⅣ期以降である。103は一部破損しており孔の有無がはっきりしないが、類似した資料としてあげることができる。Ⅳ期である。

その他は孔の穿たれた板という程度にとどまる。横長タイプとしても孔間がややあきすぎている。また、100の孔には樹皮が通されている。

（2）大足（105～108・112・113）

105は足板である。足を固定する緒孔が3つあり、さらに上端右隅に1孔ある。おそらく左右に2孔あって対をなしていたものであろう。破損している下端にも同様の孔が穿たれていると思われる。時期はⅣ期である。

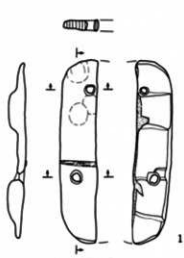
問題はこの板に輪　がつくか、枠木がつくかであるが、106～108の枠木状の木製品はいずれもⅤ期以降であり、現在のところⅣ期に属する例は出土していない。組み合せについての判断は、資料の増加を待ちたい。112・113は枠木状木製品に類似するけれども、孔の間隔が広いし、やや薄平である。

（3）そり状木製品（109～111）

109・110は断面がT字形になる突起部分のついた木製品である。平坦部の側面観には反りが認められる。111は109・111に比べて小形で、T字の立ち上がり部分には孔が穿たれており、他の部材との組み合せが考えられる。なお、立ち上がり部分の孔間はやや抉られており、波状に起伏している。

4．下駄（第2図1）

Ⅶ期以降～古代までを含む植物遺体層より出土したもので、古代の遺物をまったく含まない朝日遺跡の状況からみると、古墳時代に属する可能性がもっとも高い。遺物は約半分残存しており、前後にそれぞれ孔が穿たれている。やや左寄りの前孔付近には足指と思われるくぼみがあり、鼻緒の可能性が高い樹皮紐が後孔のすぐ上に貼り付いた状態で検出された。左足用の連歯下駄となる。



第2図　下駄

5．櫂状木製品

基本的に、下端にいくに従い身幅が広くなる板状の木製品で、組み合せの鋤（Ⅰ類・Ⅱ類）としての可能性も考えられるが、上記の鋤にみられるような明確な組み合せ部をもたず、またⅡ類のものは、鍬・鋤の半製品としては、上端の突出部が不明である。そのためここでは櫂状木製品として扱いたいと思う。

（1）Ⅰ類（114・115・119・121）

上端の突出部がなく、身幅の狭いものである。

特に114は小形の櫂の可能性の高いものであり、121も上端部がさらに上に続くかどうかは不明であり、続くとすれば櫂となろう。115・119はやや厚みがあるもので、119には上端に緊縛用の突部がみられる。

（2）Ⅱ類（116～118・120）

台形および長方形の身部を呈し上端に突出部をもつものである。

116・117・120は荒い削痕が施された厚いもので、半製品の可能性がある。特に、120は突出部も未削であるかもしれない。

（3）その他（122・123）

122は表部の中央に補強のためかと思われる、厚みを増した部分がある。また、裏部には貫通しない方形の小孔がみられる。組み合せのための穿孔であろうか。123は基本形はⅡ類であるが、身部中央に上下に2孔、穿孔されている。

6．横槌

（1）Ⅰ類

敲打部が横長になるものである。

A（124～126）　敲打部と握部の境が明瞭なもので、各々楕円形の断面の敲打部を持つ。特に、126は4方向に深い敲打痕がみられるもので、Ⅱ～Ⅲa期に属する。

B（128～131・134・135）　敲打部から握部にかけて斜めに削られ境がやや不明瞭になるものである。

128～131敲打部断面は楕円形で、129は敲打のため断面半円形になっている。129・131の握部端には、すべりどめのためと思われる肥厚がある。また130・131の敲打部と握部の境には、竪杵と同様の削り残してつくられた突帯が巡っている。134は元来断面が方形に近い形状で作られていたものと思われ、4方向の深い敲打面がみられる。135は焼け焦げて変形しているため、詳細は不明である。

時期は129～131・134がⅣ期に属している。

C（127・132・133）　敲打部と握部の長さの比が小さいものである。

132は一定の面ごとに敲打痕があるというわけではなく、全面にわたって敲打部の中央付近が凹んでいる状態となっている。127はBにはいるかもしれない、小形のものである。133の時期はⅢb～Ⅳ期となる。

D（136～138）　敲打部と握部の境界がはっきりしないものである。

136・137はやや偏平な断面を呈する。138は敲打部と握部の両端面をはじめ、ほぼ器面全体に削痕

が明瞭に残っていて、使用痕がはっきりせず、横槌ではない可能性も考えられる。時期は138がⅢb期、137がⅣ期になる。

（2）Ⅱ類

(140)　敲打部が握部に比べて短く、しかも著しく太くなるものである。

140は一木より削り出された横槌で、芯の部分が握部および先端に突出しているもので、非常に重量がある。先端部はやや割れで広がっているが、ほぼ端部だと考えられる。

（3）その他（139・141・142）

139は小形のもので、敲打部と握部が明瞭に分かれる。全体は細い削痕によって丁寧に作られており、握部端部は両端に抉りをもった偏平な形にされている。やや軽いものではあるが、敲打部の中央部に凹部があり、敲打具であることにはまちがいがない。

141・142は大形の敲打具である。141は原木の形をたくみに利用してつくられており、握部と考えられる側の端部は肥厚し、すべりどめとなっている。142は両側部および頭部が敲打面となっているほか、表裏面にやや大きめの凹部があり、敲打の用途以外に凹石的な使い方をされていた可能性がある。時期は、141がⅢb期にあたる。

7．竪杵・その他

（1）竪杵（143～147）

143はⅡ期に属するもので、一端が欠損しているが長さ161.8cmを測り、中央部で反転した推定値では約176cmにもおよぶ大きなものである。中央部をそのまま残したかたちで上下が削られ、握部がつくられている。残存している端面は、敲打のためか凹んだ状態となっている。

144～147は同種類と思われるもので、握部と掲部の境を削り残した突帯状のものが巡る。端面がある144・145とも先尖り状になっている。144はⅢb期になる。

（2）その他（148～151）

148・149は片方が太くなるように削られた棒状の木製品で、横槌Ⅰ類Dに似るが側面には敲打部はなく、広いほうの端面に磨滅がみられることから、‘スリコギ’のように、掲く・擦るといった作業に使われていた可能性が考えられる。

150・151は円形で大形の頭部と、孔が穿たれた中空の基部からなる木製品で、150は頭部端面に紫縛用と思われる十字の凹みがみられた。両者とも頭部端面には磨滅したような痕跡があり、これらも何らかの掲く・擦るといった使用方法が考えられる。

8．臼

（1）大形臼（160～166）

160～162・163・165はⅣ期に属するもので、井戸枠に転用されていた。特に160～162は、下より161→162→160の順に3段に積み重ねられていた。これらの井戸枠転用臼は上下に半裁されて、中心

部が抜かれており、160～161などは切断部に再加工がなされている。160～163の山形になっている側面には明瞭な加工痕はなく、磨滅した状態となっている。そのためもとの形状を復元することは難しいが、おそらく円形および楕円形の透かしがはいっていたものと思われる。161と162は同一個体の可能性があるが、接合面が再加工されているため確実ではない。また、上下どちらかということもはっきりしない。

164・166は包含層と谷埋土から出土したものであるが、これも中心部が抜かれており、転用井戸枠の可能性もある。上下については、端面が広く、現状で座りのよい形になるかと思われるが、164は上部が狭いものになる。

（2）小形臼（152～159）

円柱形の心材で、上端面の中央部分が磨滅して凹んでいるものを小形の臼とした。

タイプとしては、横長の152・153、縦長の157・158、7～8cm程度のさらに小形の一群154～156がある。また、159はこれら小形臼の未製品になるであろう。

時期は、156・159がⅡ期～Ⅲa期、154がⅢb期～Ⅳ期になる。

9．容器

（1）高杯（167～179）

Ⅱ期に属する167は杯部がラッパ状に広がり、やや肥厚した水平の口縁をもつもので、168は167に比べて杯部が深くなり、口縁部の肥厚も厚くなる。169になるとさらに杯部が深く・丸くなり、口縁部の厚さも厚く、口縁端部が内面で上へ、外面で下にやや延びている。167→169の変化が考えられる。

170は杯部とも考えられるが、内面の整形がやや粗雑であり、脚部になる可能性もある。

Ⅲb期～Ⅳ期のものとなる171は、断面三角形の柱状の脚と偏平な円形の脚裾からなる脚部で、脚裾外面には水平に溝状の抉りがみられる。また、脚上部外面にはわずかに削り込まれてつくられた段がある。この杯部については、九州地方にみられる皿状のものが乗るのか、現状の脚欠損部の内傾角度を使うならば、下半に透かしのはいる台付鉢になると考えられる。

172はⅥ期に属するもので、外面に赤彩がなされている。皿状の浅い杯部とやや下方に延びる肥厚した口縁部、柱状の脚部をもつ。

174・175はほぼ同形で、Ⅴ期初頭の高杯形土器と同様の脚下端の透し状の抉りが施され、突帯が巡る。176は中空の円柱状の脚で、外面に横線が巡らされている。

（2）椀・鉢

椀（180～183）

180は薄手の椀で、底部外面が高台状につくられている。181は厚手の浅いものになる。

182・183は深いものであるが、上半が不明であるため、確実に椀になるとはいえない。特に183は底部外面が欠損しているため高杯の杯部の可能性もある。

鉢（184・185・197）

197はⅡ期に属するもので、楕円形を呈する皿状の杯部と長方形の短い脚部からなる。杯部の長径方向の上端に近いところに、対称に小孔が穿たれている。

Ⅱ期の184は皿状の杯部であり、脚付鉢や、長脚が付いて高杯になる可能性もある。185は杯部やその口縁の形状からみて高杯かとも考えられるが、

残存部のカーブで推定すると、口縁径が50cmを超えるような大きなものになる。

（3）箱形容器（187～192・194～196）

円形になる196を除いて、その他は方形を呈する。方形のものの中には大形（187・191・194）のものと、それをそのまま小さくしたような小形（188～190）のもの、小形品でも逆台形の器形をとる192がある。一般には「槽」と呼称されているものである。

円形を呈する196の底部外面にはやや不定形な脚が2足みられ、位置からみると4足になると思われる。

（4）杓子・十能形木製品

杓子（186・200・201）　186は谷Aの縄文時代にあたる植物遺体層より出土したもので、縄文時代後期に属する。形態は椀状を呈し、一部分を双耳形に高く残して把手にしている。双耳部の1ヶ所のみ穿孔されている。

200・201は横杓子になるもので、201はⅢb期に属する。

十能形木製品（193・198・199）　198はⅤ期以降に属する。先端部はしだいに薄くなって終わっており、この部分は開口していたのであろう。199はおそらくはその半製品になるものと思われる。

193は方形の箱形容器に把手部がついたものであるが、箱形容器の突起部である可能性も考えられる。時期はⅡ～Ⅲa期である。

Ⅱ～Ⅲa期に属する202は、把手付の椀とも考えられるが、先端部がやや窄まっており、掬うという作業に使用された可能性が高い。

10．梯子・建築材

（1）梯子（203～208）

203～207のような通常の大きさをもつものと、208のような幅4.5cmという小形のものがある。208についてはミニチュアである可能性が高い。

204は1段のみで、下端が二又に分かれている。竪穴住居の出入りに使用したのであろうか。この下端が二又に分かれるという形態は、前述した小形の208にもみられ、205も同様であると考えられるところから、一群が設定できよう。

時期は204・208がⅡ期～Ⅲa期、203がⅡ期～Ⅲb期、206がⅢb期となる。

（2）建築材（209）

建築材として可能性のあるものは、いくつかあるが、柱以外に確実に建物に使われていたと考えられるものは209しかない。209はイチイの幹と枝からなり、枝を曲げて輪状にして柱などに緊縛したと考えられるもので、Ⅲb期～Ⅳ期の逆茂木の木群中より出土した。

11．火切り臼（210～213）

211は61H区で谷Aの肩で検出された3段重ねの井戸枠転用臼の間に、崩落を防止するような状況で挟まれて出土したものである。中央部に隅丸方形の孔と段差がみられ、転用して火切り臼にされたようである。時期はⅣ期で、使用痕は2ヶ所のみである。312も同じく転用材であろうと考えられ、12ヶ所もの多数に焦げた孔がみられる。

12．弓

弦を張った状態で湾曲する程度の太さと、弦を緊縛するための溝や削り込み以外に弭部に余分な加工がみられないものを弓として取り上げた。

弓の形態により９タイプに分けることができる。

Ⅰ類（214～220）　弭部分１～２cmを残し、溝状の切込みや抉りがなされているもので、弭部分の平面形が正方形に近いもの。

217は下部に削痕がなされ、細くされている。下端の欠損はあまりないものと思われ、先尖りの棒（杭）として再加工されたものか。218には紐状の樹皮が巻き付けてある。220は中央部に両側より抉りがいれられている。216・220の下端ははっきりとした欠損痕とは確認できない。破損後に再加工されたかもしれない。

Ⅱ類（221～223）　弭部分の平面形が長方形をなすもので、弓幹はやや細く、緊縛部分が長く広い。３点とも丁寧な作りとなっている。

Ⅲ類（224・225）　弓幹が細く、弭が丸く球形をなすものである。

224は末枝部分が多く残っており、弭部分以外はあまり加工されていない。時期は、Ⅱ期～Ⅲａ期にあたる。225は、弭の弓背部のみが加工されており、弓幹はやや平たい。

Ⅳ類（226～229）　弭の緊縛部分が、両方向からの簡単な抉り込みだけで作られているものである。

Ⅲｂ期に属する226は、部分的に紐状の樹皮が弭かれている。227はⅡ期、228はⅡ期～Ⅲａ期のものである。229は完形品で、長さ148.4cmを測る長大なものである。弭の緊縛部はわずかに抉られているだけで、先端がやや細くなっている。

Ⅴ類（230・231）　先端部がわずかに削られて尖り、弭を作るものである。

Ⅵ類（232・233）　先端部に近いところにわずかに溝が作られ、弭となっているもの。端部はやや丸みを帯びている。

232の時期は、Ⅱ期～Ⅲａ期にあたる。

Ⅶ類（234・235）　先端部の両側から抉られ、凸状の形状を呈しているもの。

235には約10cmの幅の黒漆状のものが、３ケ所に交互に塗られていた。時期は、Ⅱ期に属している。

Ⅷ類（236～238）　先端を杭のように尖らすだけのものである。

238は欠損部側の端に削痕があり、破損後再加工されたか、弭に近い部分かもしれない。237は、Ⅴ期に属する。

Ⅸ類（239）　先端を尖らせるという形態は、Ⅴ類と同じものであるが、弓幹と弭の境に明瞭な段がみられる。

Ⅹ類（241～242）　先端部の弓背また弓背・弓腹側を削り、偏平な弭を作り出すもの。

Ⅺ類（243・244）　先端部と弓背側を削り、半円状の弭を作るもの。

243の弓腹は平坦に削られている。

Ⅻ類（247）　先端部が241のように弓背・弓腹より削られて偏平にされ、その下に緊縛部と考えられる溝が巡っているもの。

その他240は先端がわずかに削られて、緊縛部状になっているもので、抉り込まれた凹部が２ケ所あり、削り残された部分が握部にあたるのかもしれない。弓腹になる側は平坦にされている。弓幹も太く弓腹の平坦部の幅も広いことから、弓でなく柄である可能性もある。

245・246は端部が欠損しているが、紐状の樹皮が巻かれているものである。

13．紡織具・編み具・その他

組み合せて用いられる紡織具や編み具がセットとして出土した事例は未だなく、出土した部品から、どの用具のどの部分であるかということを決定するのは困難である。現状では、民俗例などを参照して推定せざるをえなく、まだ不明な部分が多い。そのため、この章では可能性のあるものを全て取り上げることとした。

（1）緯越具（248～252）

菱形および長径側が尖る楕円形をなし、穿孔されている。

248～251は中央部に穿孔があるもので、249・251は長径端に切込みがみられる。248はⅡ期、251はⅡ期～Ⅲａ期に属する。Ⅱ期～Ⅲａ期の252は長径の片側のみが尖っており、端部付近に穿孔がある。やや不定形で段をもつ反対側の端部は、もうすこし延びるかもしれない。

（2）緯打具（253～254）

253は長方形をなす板で、上端が肥厚し下端が鋭く細くなっている。Ⅲｂ期に属する253も同様な形態をなすが、上端が弧を描くように延び、全体としては半月形をなすと思われる。

（3）経巻具・布巻具（257・258・264～268・273～287）

257・258は、Ⅲｂ期～Ⅳ期の61Ｅ区ＳＸ03で出土した断面が三角形をなす長方形の板で、257は上側面に沿って溝が作られ、258はこれとは逆に、上側面に凸部分がみられる。凸部と溝に布を巻き込んで使用した布巻具と考えられる。また、258の左右側面に半円状の突出部がある。緊縛して、布巻具を固定するものであろうか。Ⅱ期～Ⅲａ期に属する259は断面が台形の板で、下端の一隅が段をなしている。この段部分に棒状の布巻具を固定して、両者で挟むようにして布を巻いたのであろうか。

264～268・273～287はいわゆる両頭棒にあたるものである。264～268は長さが短いもので、264は断面がほぼ方形で、上面の両端1/3程度が削られて端部が有頭状にされている。側面には４ケ所孔があり、火切り臼に転用されている。265～268は断面が長方形の偏平な板で、両短辺の中央部から両端にかけて削られて、両端が有頭状になっている。273～281は前述のものに比べて長さが長いもので、断面が方形の273～276、円形の277～281にわかれる。有頭部は、それぞれ明瞭な削痕によって作り出されている。特に、280・281は幅の広い溝状になっている。282～285の形状は前述の円形のタイプと同様であるが、１面が削られて平坦部となっているものである。282・283・285は、両端約1/4を残して中央部分が削られたもので、284は１面全てが平坦面となっている。286・287は端部が削られ突起状にされるもので、286は前述の282・283・285と同様、中央部に平坦面をもつ。

（4）杵（259～263）

方形および円形の断面をもつ棒の中央部に、大きめの孔が穿たれているものである。260・262・263は穿孔がある中央部が補強のためか、太くなっている。また、262・263の端部には緊縛部になると思われる溝が巡り、火切り弓の可能性も考えられる。

（5）目盛り板（255～256）

断面が長方形および蒲鉾形をなす板で、Ⅱ期～Ⅲａ期にあたる255は、両短辺に切込みや★り込みがあるのが特徴で、端部も上下側面よりの削痕に

よって有頭状を呈し、二又状の台に乗せたり、緊縛できるようになっている。256は上辺にのみ切込みがあるもので、左端のものは筋状の削痕のみがみられる。
幅が広い272がある。

（6）木錘（269～272）

円柱状の中央に細い溝が巡る269・271と、中央部にむかって抉り込まれる270、断面が半円状で溝

14．刺突・切断具

刺す・突く・切るといった機能をはたしていたと思われるものである。ただ、形態上からは刺突具・切断具として分類できるが、木製品という材質や大きさにより、非実用品として扱うのが適当であるというものもある。

（1）ヤス状刺突具

Ⅰ類（288～290）　刺突部が7～9cmとやや短く、全体に削痕が明瞭なもので、軸部も短い。断面は、円および楕円形をなす。Ⅱ期～Ⅲ期に属する288の軸部は、細くてやや長い。

Ⅱ類（292～294・296）　刺突部は長く、断面は円形をなす。表面は比較的滑らかに仕上げられている。293が基本的な形で、291・292・294・296も同様な形状をなすと思われる。296は軸部近くに紐状の樹皮が巻かれている。下端はさらに延びるかもしれない。

（2）鏃形・剣形木製品

鏃形（297・298・304）　297は大陸系の青銅器である三稜鏃と同じ形状をなす。298には丁寧な細い削痕がなされており、下部に削痕により緊縛用と思われる溝と有頭部分が作られ、下端の端面には切込みがみられる。時期はⅢb期に属するが、刺突具でない可能性もある。304は上部の三角形をなす部分が鏃状をなすが、下部の円柱状の部分が不明である。鏃が装着された「矢」の擬製であろうか。

剣形（300～302）　300・301は薄い板で作られており、その形からみて剣の擬製でよいように思われる。302は円柱状の棒の先端を偏平に尖らしたもので、剣形というにはやや疑問が残るものである。

（3）その他（295・299・303・305）

295は上部1/3が細く削られ尖らされており、下部も斜めに削り落とされている。あるいは上下が逆かもしれない。Ⅱ期～Ⅲa期にあたる299は、槍状の形を呈している。先端部にはわずかに削痕がなされるが、利器として有効性にはやや疑問がもたれるものである。303は石剣の柄と思われるもので、ちょうど茎の入る中空の部分だけ側面がない状態で出土している。茎を挿入する側からの掘削がかなり困難であると考えられるので、装着した後に何かで覆ったか、剝き出しのまま緊縛されていたのかもしれない。305は握部と先の尖る身部からなり、形態的には刺突具と考えられるが、身部には先端部と握部に近い部分を除き紐状の樹皮が巻かれている。先端部がわずかでも露出しているため、刺突具として使用できないこともないが、頻繁な使用に有効であるかは疑問である。剣形等の擬器かもしれない。

15．鞘状木製品 (306～312)

鞘ということで、本来ならば前述の14．刺突・切断具にはいるものであろうが、現段階では不明な点が多く、今回は別項をもうけた。

306～312の７点とも谷Ａの埋土上部から出土しており、所属時期としてはⅣ期以降になるものと思われる。特に、309～312は近接した地点より発見されている。

形態的には、断面が厚さ１～２cmの蒲鉾形で、幅４～６cmの長細い板に、やや幅の広い溝が横方向に幾ヶ所か作られているものである。溝は、板の弧をなす側に彫刻されており、反対側は平滑に削られている。溝には側面まで削られる308のようなものと、上面だけの306のようなものに分かれる。

307はやや変わっていて、溝横に突帯状のものがみられる。端部であるからとも考えられるが、同じく端部の306・308にはみられないものである。312には、ちょうど溝幅の間隔がある条痕がみられる。鞘として使用する時には、２つの鞘状木製品の平坦面どうしを合わせて、溝部分で緊縛するのであろうが、その場合平坦部には剣・刀の刃部に合わせた彫刻が必要であろう。そのように考えると全てが半製品かとも思えるが、平坦面と平坦面の間に薄い木片などを挟み込めば隙間を作ることは可能である。

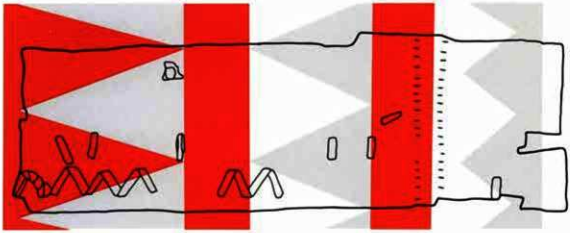
16．楯 (313～321)

有孔の板で、赤彩が施されていたり、樹皮で縦じてあったりするものを楯として取り上げた。

313はわずかに弧状をなす端部で、端辺に沿って穿孔がみられる。片面のみ赤彩される。314・319・320は、樹皮紐を通すための孔と思われる非常に細い横長の孔のみがみられるもので、部分的に樹皮が残存している。314・319の片面側には、赤彩が施されている。318は、前述の孔よりは大きな円形の孔が、縦位に列をなして穿たれているものである。

315は山形に縦じられた樹皮紐と、塗り分けられた赤彩と黒彩（黒漆か）が特徴である。樹皮の山形は６つ（上下、表裏によって数え方が違うが）あり、２つと４つに分かれる。その他、縦位・斜位の樹皮紐がいくつかみられる。また、右側に縦位に並ぶ細い横長の孔も、樹皮紐が通されていたものであろう。赤彩と黒彩の塗り分けは、幾分か剥離があるためはっきりとはしないが、基本的に帯状部分と横位の山形部分からなり、現状ではそれが３対確認できる。左２つは赤彩の帯に黒彩の山形であり、右の１つが黒彩のみとなっている。また、左のものの山形の間には、赤彩がなされている。復元すると第３図のようになるものと思われる。所属時期はⅢｂ期にあたる。

316・317はＳＤＩの近接した地点より出土しており、形状も似ていることから同一個体かと考えられる。両方とも弧状をなす端部で、それに沿った２列の孔と、ほぼ縦位に並ぶ孔がみられる。縦位に並ぶ孔間にははっきりとした赤彩痕が残っているが、これは、紐状のもので縦じられていたために、その下部に付着したものが、比較的後まで空気に触れなかったため剥離を免れたものと思われる。また、紐状のもの自体にも赤彩されていた可能性もある。時期はⅤ期になる。



第3図　彩色楯想定復元図

321は樹皮で作られているもので、縦77.7cm・横28.2cm・厚さ0.24cmを測る非常に薄いものである。右下端が大きく欠損している以外は、ほぼ完全に残っている。左右両端には短辺に沿うように2列の穿孔がみられるが、横の孔どうしは隣あわず、丁度お互いの孔間のまん中にあたるようにジグザグに孔が開けられている。所属時期はⅣ期以降になろう。

用途としては、奈良県唐古遺跡出土の楯[1]の裏面にわずかであるが樹皮が付着している例があり、穿孔があるということからみても、楯に張りつけたものであると考えたい。

(1)　藤田三郎氏（田原本町教育委員会）の御教示による

17．祭祀具・装飾具

（1）祭祀具（322～325・327・328）

実用的でなく、形代としての要素が強いものを取り上げたが、当然のことながら玩具としての可能性も否定できない。

鳥形　322・323は、鳥の飛ぶ姿を横方向から見たものをモチーフにしたものかと思われる。両者とも薄い板を部分的に加工しただけのものであり、頭部や胸部の仕上げはやや荒いものがある。また、323に開けられた孔も丁寧な穿孔ではない。

326は、羽をたたんだ鳥をほぼ上および横方向からみた姿をモチーフにしている。腹部には、　孔かと思われる貫通していない方形の孔が穿たれている。頭部には横位の切込み状のものがみられるが、始めからつけられていたものかどうかは不明である。

人形（325）　頭部と方柱状の体部、下端に削りだされた突起部からなる。頭部は顔面にあたる前面が円形で、後頭部がやや方形をなしている。顔面には、鋭利な原体によってつけられた両目と口が描かれている。首にあたるところには溝が巡っており、頭部と体部を区分している。下端の突起部分は　にあたるものかと思われる。

舟形（327～328）　328は、舷側にほぼ等間隔で3つ、孔が穿たれている。また、舟底にあたる部分にも1つの孔がある。

325・328は、61E区SD22より出土しており、時期はⅤ期以降のものになる。326も同じ調査区の

30m程度北西の、包含層上層より出土しており、これもV期以降である可能性が高い。その他、322・323・327は谷Aの埋土上層より出土しており、これらのものもⅣ期以降に属するものと考えられる。

このように、祭祀具に分類したものは、全て弥生時代の中期末～後期に属している。また、出土地点も該当時期には水流があったと考えられる谷や溝からであり、偶然に低地に廃棄されたとも思えるが、水に関した「まつり」に使われた道具である可能性も考えられる。

（2）装飾具

324は最屈曲部は欠損しているが、ほぼ完全な形の竪櫛である。U字形の形状は10本の細い竹板を折り曲げ、屈曲部と両端を樹皮紐で縛ってつくられている。全体に赤彩がなされていた痕跡が残っている。時期は、Ⅱ期～Ⅲａ期になる。

18．板材・原材

（1）板材（329～340）

長径が20cm～40cm、短径が10cm～20cm程度の方形および長方形の板である。

329・330・333のように断面が三角形を呈するものや、331・332のように断面が弧状をなすものは原材に近いものであろう。一方、334～339のような比較的丁寧に方形に整えられた、断面が長方形をなす一群はより製品に近いものであって、鍬や鋤の未製品としてもおかしくないものもみられる。また、V期に属する334は柱穴の礎板として出土したが、当初よりその目的で作られていたかどうかは不明である。

340は長方形の板の端部に近いところに孔が穿たれたもので、孔部分はやや肥厚する。一見して鋤に見えるのであるが、孔は板に垂直に開いており、用途は不明である。

（2）原材（341～346）

341・342は円柱状の丸太の底部を丸く削ったもので、平たくされた上面には削り残された突起部がつく。全体に粗い削りがなされている。時期は両方とも、Ⅱ期～Ⅲａ期に属する。

また、同じく円柱状の丸太の上下を斜めに削ったものとして、343と344がある。これらも整形は粗いい削痕で、344には樹皮が残存していた。

345は二等辺三角形のような形状をなし、断面は横に長い六角形を呈している。全体に粗く削られているだけで、横槌の未製品かとも思われる。

346は、61区のＳＸ02の逆茂木の木群の中の一本である。逆茂木は、基本的には枝持ちの木材を絡み合わせて作られるもので、346も逆茂木を構成する木群の１本とも考えられるが、膝柄の原材としても十分利用できるものである。膝柄の未製品として断定できるものではないが、この種の枝持ち材は逆茂木の中にいくつかみることができた。

19．有頭棒

棒状の軸部と削り出された頭部からなるもので、紡織具と弓以外のものを取り上げる。

（1）Ⅰ類（347～351）

円柱状の棒の端部を削りだして、明瞭な頭部をつくりだすもの。347・348・351の頭部と反対側の端部は粗く削られている。これらのものは両頭ではなく、軸部に平坦面もみられないが、頭部の形状は紡織具の経巻具・糸巻具の可能性があるとした一群のものと酷似する。二次的に変形されたものかもしれない。

（2）Ⅱ類（357～367）

断面が円形もしくは方形の偏平な頭部に、穿孔された方形の断面をもつ軸部をもつもの。

形態よりさらに細分が可能で、長軸な357～360、軸部の長径が頭部と同じ長さの361・364、頭部がかなり偏平な362・363・365・366、頭部の中央に横位の溝がつくられる367にわかれる。また、大きさにもかなり差がある。

（3）Ⅲ類（368～371）

軸部がやや細く、孔がないもの。ただ、これも形状にばらつきがあり、確実に同類になるかは不明である。

その他、端面が斜めに切り落とされる352、黒色の有機物が付着する353、三角形様の頭部をなす354・355がある。また、356は断面が円形で偏平な頭部をもち、軸部が中心からはずれて端につく。頭部の厚みがなさすぎるが、頭を下にすると縦杓子の未製品になる可能性もある。

20．その他

373～376は非常に類似した一群で、わずかに削り出された頭部と先尖りの軸部からなる。378もかなり偏平であるが同様なものかと思われる。これらのものは、先尖りの形状からみて刺突具的な役割をするものかと想定される。382は枝の部分をわずかに削り先端部を尖らしたもので、鹿角の刺突具に類似し、これも刺突具になるかと思われる。

377は縦斧の柄になる可能性もあるが、握部になる部分が1㎝程度の厚みしかなく、柄としては細すぎると考えられる。

380・381は、「ヘラ」になるかと思われる。

393の形状は土錘に酷似する。

394は槍のような形状を呈し、彩代の可能性もある。379は剣形か。

397は　孔状になっている部分に石器を装着すると、柄になる可能性もある。

398は、横杓子の未製品か。

403は、2本の斜め上方に延びる突起部とその間に開けられた孔、それと反対側の端面に開けられた孔がある。

406～408は同様の一群で、先端部を丸くした長方形の板の両端に孔が穿たれている。

412は板の先端部を斜めに切り落として、楔状にされているものである。

414～417は、穿孔された大形の板である。特に、孔に対して斜めの縁辺をもつ415・416・418は、舟の部材である可能性もある。

第２章　まとめ

１．木製品の出土状況

朝日遺跡において、木製品の出土状況が有意であると認められた例は少ない。谷Ａ・Ｂ内の河道や溝内でのあり方は、例え半製品が含まれていようとも、出土レベルが地下水位の状態に関係することから、偶然性が排除しきれないからである。

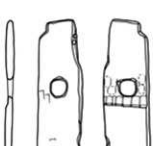
一つの場所から多量の木製品（半製品・未成品を含む）が出土した例には、61Ａ区のＳＸ02やＳＸ03がある。ＳＸ02はⅢｂ期後半の防御施設である柵の基礎部分をなす溝状遺構であるが、柵が倒壊した跡の窪地状のところにⅣ期の土器とともに各種木製品等が遺存していたのであって、この場所と木製品を特に関連づける理由はない。ＳＸ02は県教育委員会の調査時にも、連続する部分で多量の木製品が出土し、その時には「谷Ａ北岸に漂着したもの」という認識が与えられていたのである。同じ谷Ａの延長部である60Ａ区の場合をみても、谷Ａ内では特に場所が限定して出土したわけではなく、腐植した貝を伴っていたことからみて、貝殻廃棄と関連していた可能性がある。61Ａ区での出土がＳＸ02に集中するということも、実状はⅣ期の包含層の主要部分がその後の河道の活動によって流失し、ＳＸ02付近が影響を免れていたからに他ならない。

ＳＸ03は谷Ａの南岸付近にある大きな土坑で、中からⅣ期の土器とともに多量の木製品が出土したが、ここでも木製品以外に流木や砂層が伴っており、けっして限定された状況ではなかった。多少河道の影響があることから、外からの流入や逆に流出があったかもしれず、本来の状態にはないようだが、それでも半製品が出土したからといって特別視する材料には乏しい

朝日遺跡における木製品の出土は、次に述べる一部を除いては通常の廃棄という性格が強いものである。

木製品の有意な状態での出土は、方形周溝墓からの出土例である。『朝日遺跡Ⅰ』1991でも紹介したように、東墓域の方形周溝墓（ＳＺ208・301・303）からは溝底から柄を装着したままの鍬や一木鋤が据え置かれた状態で出土した。ＳＺ208では当センター調査以外に、県教育委員会調査時にも棒状木製品が北溝から出土した。これなどは着柄鋤の柄か天秤棒であったかもしれない。西墓域の弥生時代後期（Ⅴ期）の方形周溝墓（ＳＸ105）からも棒状木製品が出土しており、これなども天秤棒であったかもしれない。

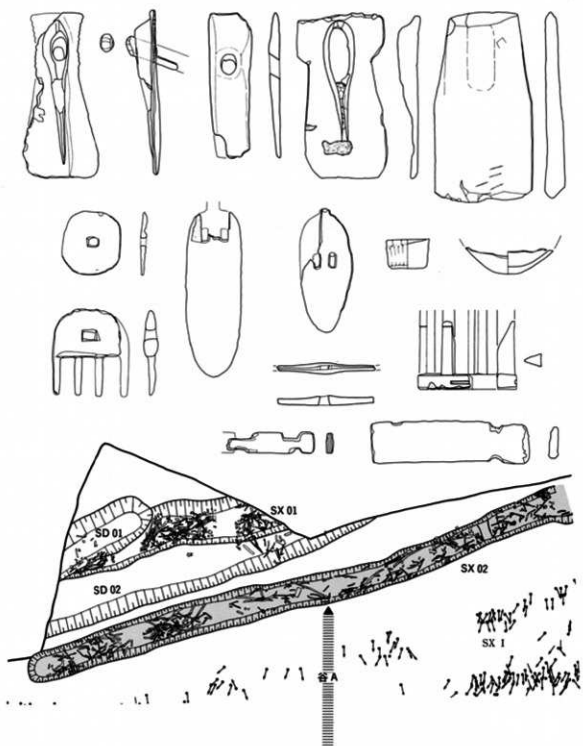
このように、方形周溝墓に関してはその造営に使用された道具（鍬・鋤・天秤棒）の一部が溝内に置かれる（出土状態に乱れは認められない）ということが、おそらくは造墓に関わる儀礼の一部として執行されていたことが想像できるのである。そしてこうした事例は伊勢湾東岸部の伊勢地方でも中期前半には存在しており、四隅切断型というプラン・土器の共通性からみて同一起源の現象であることを強く示している。

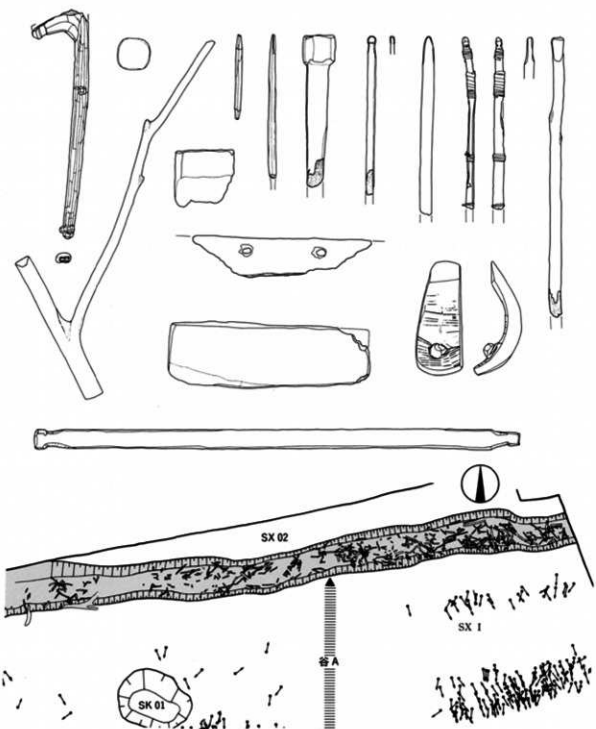


第4図　61H区　SE01出土木製品

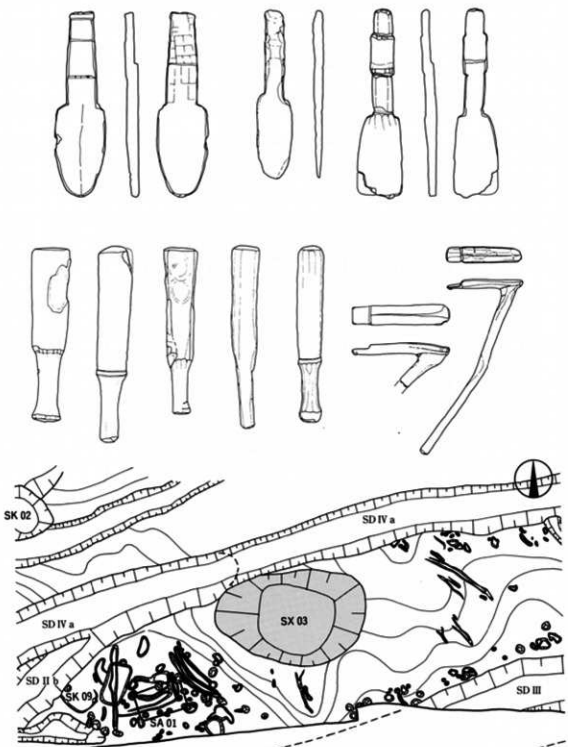
朝日遺跡の木製品は、遺存している場所が竪穴住居内部（炭化しなければ遺存しない場所）ではなく河・溝に限定されていることからも明らかなように、基本的に地下水位との関連に規定されている。その中で出土状態に特殊性が窺われるのは生活関連廃棄がほとんど行われない方形周溝墓の周溝出土例に限定されている。集落内部や近辺の土坑など廃棄の行われやすい場所での出土例について、「木製品製作に関連する水漬け保存」という特殊性を見出すことは難しいのである。そもそも木製品という、どこでも遺存するわけではない有機物であれば、遺存条件自体を十分検討しなければならない。

61 A SX 02

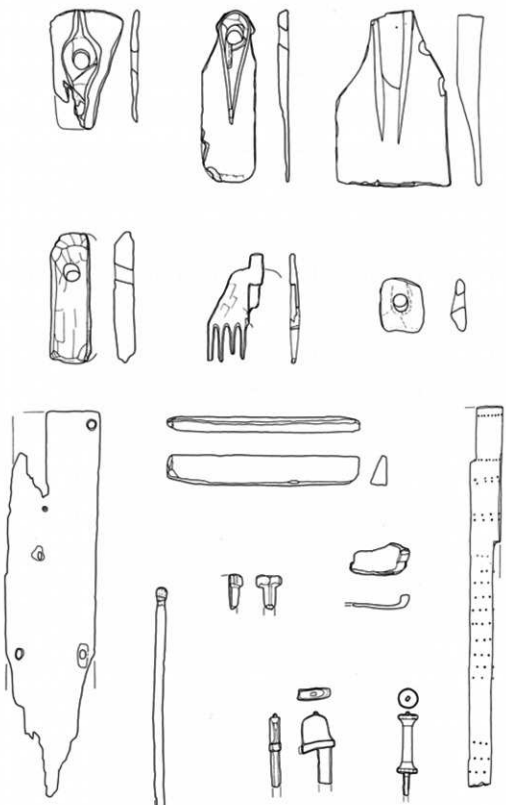




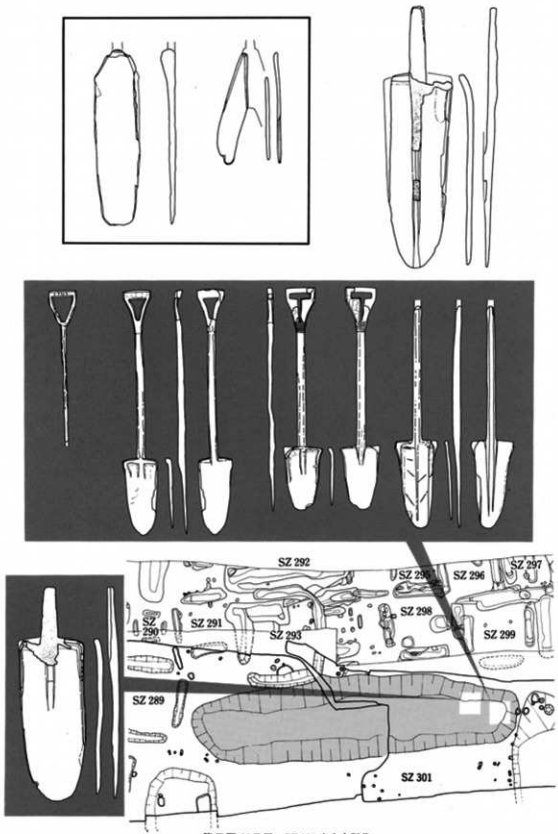
第５図 81Ａ区　SX 02 出土木製品



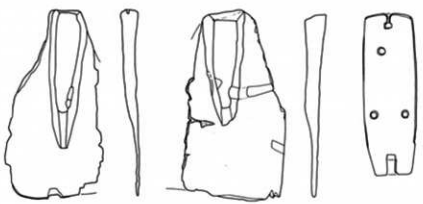
第６図 61 A区 SX 03 出土木製品



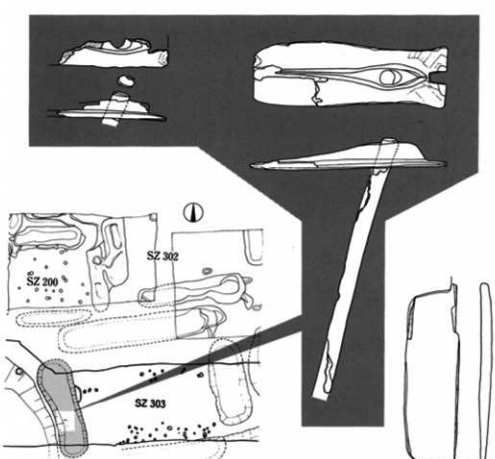
61 T　SZ 301 北溝



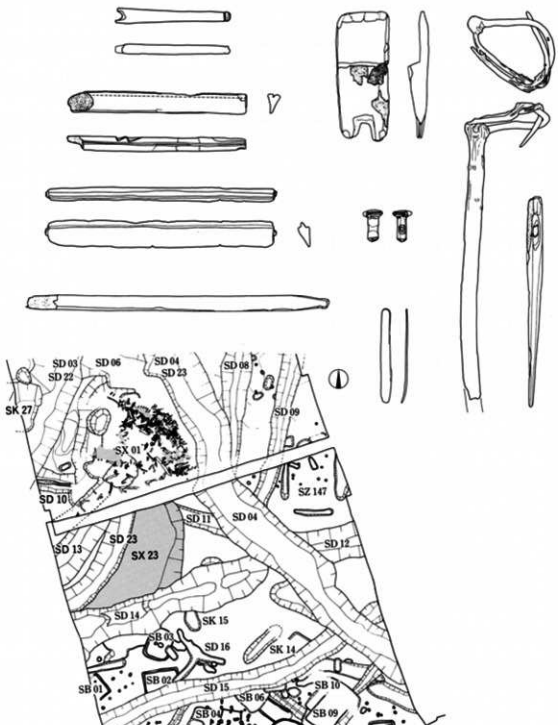
第７図 61 T区　SZ 301 出土木製品



61 T　SZ 303 西溝



第８図 61 T区　SZ 303 出土木製品



第９図 61 E 区　SX 03 出土木製品

2．紡織具・編み具について

（1）紡織具

布を作る作業として初めに行われるのは、糸を紡ぐということである。朝日遺跡では、糸を巻き取る「紡錘」のはずみ車の役割をなす紡錘車のみが出土している。その材質としては、土製と骨角製（55・56）がある。

次に紡いだ糸を保管するため、工字状の道具「枠」に巻きとる。朝日遺跡で確実な例としてあげることができるものは、現段階ではない。第1章13－（4）で取り上げた一群も、組み合わせて出土しないかぎり枠という確証はない。ただ、端部に緊縛のためかと思われる溝がつくられたものについては火切り弓の可能性もあるとしたが、孔が方形をなし、運動用としてはやや不適切と考えられる。

最後に布を織るわけであるが、弥生時代にはいわゆる「原始機」が用いられていたと考えられている。この織機の構造は、織り手の方より「腰当て」・「布巻具」・「経巻具」となり、経糸を上下させるための「開口具（綜絖・中筒）」、緯糸を通す「緯越具」、打ち込む「緯打具」を使用して作業が行われる。

朝日遺跡の出土遺物の中で上記の分類に該当する蓋然性の高いものを順番にあげると、まず253・254の「緯打具」があげられる。次に「緯越具」であるが、楕円形の長径の端部に切込みのある249・251などは糸を巻いたと考えられるが、それらの痕跡のない248・250については疑問符が付く。248・249の孔の短径側にわずかな切込みがみられることから、短径方向に糸が巻かれた可能性もある。形態の異なる252については、「針」のような役割を果たす刺突具または編み具とも考えられる。

さらに「布巻具」にあたると考えた257～259については、257・258が同じ61E区SX03より出土しており、樹種や加工の状況が似ていることから、同一の目的で製作されたものと思われる。基本的な形状は断面が二等辺三角形をなす板で、短辺にあたるところに257は縦方向の断面三角形の溝が穿たれ、258は断面三角形の縦方向突出部がつくられる。溝部分に突出部をはめ込むと、現状ではやや突出部が大きくて1/2程度しか入りきらないが、これは保存・保存処理の段階でわずかではあるが収縮してしまったためであり、出土時点ではもう少し溝部の幅は広いものであった。このことからみて、完全に両者が密着するとは限らないが、組み合わせて使われたことは明かである。257のような側面に溝を穿つ例は奈良県唐古遺跡や大阪府亀井遺跡・静岡県登呂遺跡で出土しており、経糸を巻いた細棒を溝に固定するものとされてきたが、今回の出土例により、突出部をもつ板を使って経糸および織り上がった布を固定していたのではないかという新たな可能性が指摘できよう。また、上記の2点と同じ断面が二等辺三角形を呈する259であるが、これは短辺がやや突出して鈍角なL字状をなす。L字の屈曲部にあたる部分に、経糸を巻いた棒や板をはめ込んでやれば十分布巻具として使用できよう。

県教育委員会の調査では「腰当て」とされており、今回は弓に分類した243・244のような弧を画く両頭棒で、頭部と反対側の面が平坦面を呈するものについては、やはり現段階では確定することはできない。ただ腰当てとするには、やや細く脆弱であると思われる。

最後に「布巻具」「経巻具」としてとりあげた'両頭棒'であるが、これらには確実に糸を巻いた

番号	A	B	C	D	E	巻面
264		42.1				21.6
265	27.2					22.0
266	28.8					22.8
267	27.7					22.0
268	20.5					16.0
273					102.8	90.8
274				93.4		84.8
275				79.3		70.4
276		52.8				44.4
277				87.8		80.8
278			67.1			60.8
279			62.6			53.2
280		59.5	59.5			46.0
282		56.8				36.0
I	20.5	41.0	61.5	82.0	102.5	
II	27.9	55.8		83.7	111.6	
III	31.0		62.0	93.0	124.0	

第1表　両頭棒計測表（単位はcm）

という痕跡は見あたらない。また、側面に平坦面でもあればその可能性が言えるが、一部のものを除きそういった加工はなされていない。平坦面をもつ282～286のみを布巻具・経巻具に分類できるかというと、その確たる根拠は乏しい。そのため、平坦面や頭部の形状・断面形に関わらず両頭になるものを集めたものが第1表である。

この中で巻面としたのは経糸を巻くことができる最大面であり、264・282のような平坦面をもつものは平坦面の長さである(ただ282の場合は平坦面の片方の端部がどこかはっきりしないため、可能性のある最大幅で計測している)。また、小形の267・268には中央部にわずかに平坦に削られている部分があり、約6cm～7cm程となる。この巻面の長さは、一見すると最低長20～22を基準につくられているように思えるが、よくみると実はこの計測値の多くを規定しているのは、頭部を含めた全長であることがわかる。つまり、布幅を決めるのは経糸の本数とその間隔であって、長い布巻具・経巻具の中央部分を使って幅の短い布を織ることは可能であり、確実に経糸を巻いたと確認できる部分を計測しないかぎり不安定な数値となることを避けられないのである。

それでは全長についてはどうであろうか。布幅は経糸によって決まると上記したが、1mを超えるような布巻具・経巻具で20cm前後の布を作るというのも不便であろうと思われるのと、両頭棒のような比較的簡単に作ることができる木製品であるならば、一種類の道具で各種のものをカバーするよりも、布幅に合わせて作り変えたほうが効率的であると考えられる。これらのことは、布巻具・経巻具を製作する場合には布幅の細かい調整は考えずに、広幅・中幅・狭幅用といった程度のおおまかな基準で作られていたことを想定させる。ただ、全くまちまちな布幅で織られていたとは思われず、最小単位の等倍といったかたちで寸法が

決定していたのではないかと考えられる。このことは両頭棒の長さからみて推定できる。第1表をみると、最少のものを基準にほぼ等倍に長くなっていくⅠ・Ⅱの2グループできるようであり、31.0cmの最少値を仮定するとⅢというグループも設定可能である。つまり、最少単位の布を織ることができて、且つ作業をする時に使いやすい長さの布巻具・経巻具を作り、幅の広い布を織る場合には、その2倍・3倍の長さにしていったのではないかと考えられるのである。

ただこれらのことも両頭棒が紡織具であるという仮定の上に成り立っており、弓や本章（1）で述べられたような天秤棒のような使われ方をする運搬具（60cmを超えるものは可能性がある）であったことも否定できない。

（2）編み具

編み具とした255と256のうち、片方の短辺側に刻み目がなされている256は、錘を使った「もじり編み」用の目盛り板の端部であろう。刻み目間の長さは（左のものはわずかに凹むが、条痕のみがみられる）6cmを測る。

255については、266と違って両方の短辺に刻み目がみられる。刻み目の総数は第9図にあるとおり約46ケ所を数える。そのうち1と22、21と46は支柱に緊縛するか、あるいは一方を固定した紐に縛るための凹みであり、経糸の目盛りからは除外される。刻み目には幅が広くて浅いものと、狭くて深いものがあるが、その2種の横方向の関係はよくわからなかった。ただよくみると、多くの刻み目の位置が上下辺で一致しており、且つ4と26、8と31、18と41などの上辺と下辺どうしがよく似た形状を示しており、上辺と下辺が別々の目盛りではなく、同時に使用されたのではないかと考えられた。このように上下辺を同じとして等分の目盛りとってみると、第10図の○（5.5cm～5.8cm）と△（8.5cm）、その2倍である◎と▲が見いだせる。また、9と32を中心に両側に同じ長さだけ延びる第11図のようなものも一つのモデルとしてあげられ、中央と端の経糸の幅がやや広く、その間が狭くなる編物が想定される。

次にこの目盛り板の使用方法を考えてみると、上記したとおり上辺と下辺が同時に使用された痕跡があるということは、長辺側（やや丸みを帯びている方が上か）を上下にして経糸がセットされていたということになる。このことは、錘を使ってのもじり編みも行われたかもしれないが、長辺側を使用するため両側と手前側の経糸の間に幅ができるという点を考慮すると、両側の経糸を交互に前後にし、その間を緯糸を通すといった編みものがなされていた（第12図）可能性も考えられるのである。

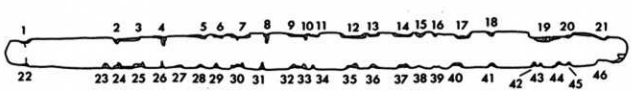
参考文献

竹内晶子「考古学選書〔9〕弥生の布を織る」東京大学出版会1989

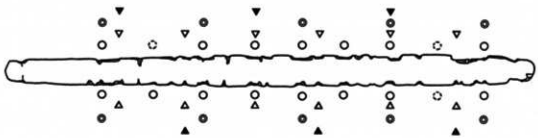
竹内晶子「織機・衣服」「弥生文化の研究5　道具と技術Ⅰ」雄山閣出版1984

角山幸洋「日本染織発達史」田畑書店1968

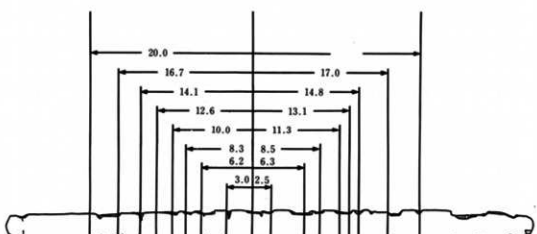
宮崎清「ものと人間の文化史55-1　藁Ⅰ」法政大学出版局1985



第10図　目盛り板刻み目数



第 11 図　目盛り幅(1)



第 12 図　目盛り幅(2)

第 13 図　現在使用されている竿綱機（宮崎 1985 より改変引用）

木製品出土遺構一覧表

図版	遺構新番
1	60B SDⅡb
2	61A SX02
3	61H SE02
4	61A SDⅠ
5	61N SZ208西溝
6	61N SZ208西溝
7	61A SDⅣa
8	61A SX02
9	60A 谷A
10	61T SZ303西溝
11	61T SZ303西溝
12	61A SX03
13	60E 谷A
14	61E SD02
15	61A SX03
16	61H 谷A
17	60A 谷A
18	60A 谷A
19	60A 谷A
20	60A 谷A
21	60A 谷A
22	61A 貝層
23	61A SX03
24	61A 谷A
25	61A 谷A
26	60B 谷A
27	61H SDX
28	60B SDⅣa
29	61E SD15
30	60E 貝層
31	61A SX01
32	61A SX02
33	61A SX02
34	61A 谷A
35	61T SZ301北溝
36	61T SZ301北溝
37	61A SX03
38	60E 谷A
39	60A 谷A
40	61A SX03
41	60B 検出
42	61A 谷A
43	61E 検出
44	61T SZ301北溝
45	61T SZ301北溝
46	61T SZ301北溝
47	61T SZ301北溝
48	61T SZ303西溝
49	61T SZ301北溝
50	61T SZ301北溝
51	61N SDXⅢ・XⅣ
52	60A 谷A
53	61A SX02
54	61A 貝層
55	61E SD03
56	60A 谷A
57	61A 谷A
58	61E 検出

図版	遺構新番
59	61A SX03
60	61A SX03
61	61A SX03
62	61A SX03
63	61A SDⅠ
64	61E 検出
65	61T SZ301北溝
66	60A 谷A
67	61H 谷A
68	63D SD03
69	61T SZ301北溝
70	60E 谷A
71	61H 谷A
72	61A SDⅠ
73	60E 検出
74	61A SX02
75	60B SDⅢ
76	61A SX02
77	61H 谷A
78	61A 検出
79	61A SX02
80	61A 貝層
81	63D SD06
82	61A SX03
83	61A SX03
84	61A SX02
85	61A SDⅣa
86	61E SD20
87	61E SD20
88	60E 貝層
89	61A SX01
90	60A 谷A
91	61M 谷A
92	60A 谷A
93	61A 検出
94	60A 谷A
95	60A 谷A
96	60E 谷A
97	60E 谷A
98	61A 谷A
99	60B SDⅢ
100	63D SD05
101	61T SZ301東溝
102	61E SD02・21
103	61A 谷A
104	63D SD01
105	61A SX03
106	60B 谷A
107	60B 谷A
108	61H 谷A
109	60A 谷A
110	61A 谷A
111	61A SX02
112	60E 谷A
113	61N SDXⅢ・XⅣ
114	60B 谷A
115	61E SD03・22
116	60B 谷A

図版	遺構新番
117	61H 谷A
118	61H SK12
119	61A 貝層
120	61H 谷A
121	61H 谷A
122	63D SD05
123	60B 検出
124	61A 谷A
125	61A 谷A
126	60B SDⅡa
127	60B SDⅢ
128	61H 谷A
129	61A SX03
130	61A SX03
131	61A SX03
132	60A 谷A
133	63D SD07
134	61A SX03
135	61H 谷A
136	61A 谷A
137	61A SX03
138	61A SK02
139	60B 谷A
140	61H 谷A
141	61A SK02
142	60A 谷A
143	63D SD06
144	61A SK02
145	60A 谷A
146	60A 谷A
147	61A 谷A
148	61A 谷A
149	60A 谷A
150	60B 谷A
151	60A 谷A
152	61A 谷A
153	60A 谷A
154	61A SX02
155	61A 谷A
156	61A 貝層
157	61A 谷A
158	60B 谷A
159	60A SDⅣb
160	61H SE02
161	61H SE02
162	61H SE02
163	61H SE01
164	61E 検出
165	61H SE04
166	61H 谷A
167	63D SD06
168	60B 谷A
169	60E 谷A
170	60E 谷A
171	61A SX02
172	63D SD02
173	61E 検出
174	60B 谷A
175	61A 谷A
176	61H SDX

図版	遺構新番
177	61E 検出
178	61E SD12
179	61A SDⅣa
180	61A 検出
181	60E 谷A
182	61A SX02
183	61E 検出
184	60B SDⅡa
185	61M 谷B
186	61A 谷A
187	61E SD03・22
188	61A SX03
189	61H 谷A
190	60E 谷A
191	60A 谷A
192	60B SDⅢ
193	61A SDⅣa
194	61E 検出
195	61H 谷A
196	61H 検出
197	61E SD20
198	60B SDⅠ
199	61H 谷A
200	60B 谷A
201	61E SX01
202	61A SDⅣa
203	60B SK04
204	61E SX03
205	61A 谷A
206	61E SD02
207	60B 谷A
208	61E SD01
209	61E SX03
210	61H 谷A
211	61H SE02
212	61E 検出
213	61A SD02
214	61M 谷A
215	60A 谷A
216	61H 谷A
217	60B 検出
218	60B 谷A
219	61H 谷A
220	60A 谷A
221	61H 検出
222	60B 谷A
223	61A 貝層
224	61A 貝層
225	61H 検出
226	61A SX02
227	61E SD20
228	61A SDⅣa
229	60E 谷A
230	61A 谷A
231	60A 谷A
232	61A SDⅣa
233	61A 谷A
234	61H 谷A
235	63N SD02
236	61H 検出

図版	遺構新番
237	61A SDI
238	60A 谷A
239	61A 谷A
240	61A 谷A
241	61A SX02
242	61H 検出
243	60E 検出
244	60B SDI
245	61E SD02・21
246	61H 谷A
247	60B SDIIb
248	60B SDIVa
249	61H 谷A
250	61E 検出
251	60B SDIII
252	61A SDIVa
253	61E SD03
254	61H 谷A
255	60B SDIIa
256	60B 谷A
257	61E SX03
258	61E SX03
259	60B SDIII
260	61A SX02
261	60B 谷A
262	61E SX03
263	60B 谷A
264	61A 谷A
265	61A SDIVa
266	61H 谷A
267	61E SD04
268	60B 谷A
269	61H 谷A
270	61E 検出
271	61H 谷A
272	60B 検出
273	61A SX02
274	61E 検出
275	61A SDIII
276	61A SDIVa
277	61A SD02
278	60A 検出
279	61A 谷A
280	60E 谷A
281	60E 谷A
282	60A 谷A
283	60E 谷A
284	61A 谷A
285	60B 谷A
286	61H 検出
287	61A 貝層
288	61A 貝層
289	61A SX02
290	61A 検出
291	61A 谷A
292	61A SX02
293	61A 谷A
294	63D SD07
295	61H 谷A
296	61A 谷A

図版	遺構新番
297	61E SD04・23
298	61E SD04
299	61A 検出
300	60E 谷A
301	60A 谷A
302	60A 谷A
303	60B 谷A
304	60E 谷A
305	61H 谷A
306	61A 谷A
307	61E 検出
308	61H 谷A
309	60B 谷A
310	60B 谷A
311	60B 谷A
312	60B 谷A
313	60B SDI
314	61H 谷A
315	61A SD02
316	60B SDI
317	60B SDI
318	61A SX03
319	61A SDIIb
320	61H 谷A
321	60E 谷A
322	60B 谷A
323	61H 谷A
324	61A SDIVa
325	61E SD22
326	61E 検出
327	61H 谷A
328	61E SD03・22
329	61A SX02
330	61A SX03
331	60A SDIVb
332	61M 谷B
333	61E 検出
334	63G P05
335	61H 谷A
336	60E 谷A
337	60A 谷A
338	61E SD01
339	61H SDX
340	60E 谷A
341	61A SDIVa
342	61A SDIVa
343	61H 谷A
344	61H 谷A
345	60A 谷A
346	61A SX02
347	61M 検出
348	61H 谷A
349	61A 谷A
350	61H 谷A
351	60E 貝層
352	61H 検出
353	61A 検出
354	60A 谷A
355	61H 検出
356	61H 谷A

図版	遺　構　新　番
357	61E　SD01
358	61A　SD02
359	61A　谷A
360	61H　谷A
361	60A　SDⅣb
362	60E　貝層
363	61A　検出
364	61E　SD04
365	61E　SX03
366	61A　谷A
367	60B　谷A
368	61H　谷A
369	60A　谷A
370	61H　検出
371	60A　谷A
372	61A　SX03
373	61E　SD20
374	61E　SD03
375	60A　谷A
376	61H　谷A
377	61E　SX03
378	63D　SD01
379	61A　SX02
380	60B　谷A
381	61E　SX03
382	61A　谷A
383	61A　SDI
384	61A　SX02
385	63D　SD07
386	61A　SD02
387	61E　SD02
388	61A　SX02
389	61E　SD03
390	61A　SX02
391	61A　SD02
392	61H　谷A
393	61H　谷A
394	60A　谷A
395	60A　谷A
396	61A　SX03
397	61A　SDⅣa
398	61H　谷A
399	61A　SX03
400	60B　谷A
401	60E　貝層
402	61A　SX02
403	63D　SD05
403	60A　谷A
404	61A　SK02
405	61M　谷A
406	63D　SD05
407	61H　谷A
408	61A　谷A
409	61A　谷A
410	63D　SD07
411	60B　SDⅢ
412	61A　SX02
413	60A　谷A
414	60E　谷A
415	60E　谷A

図版	遺　構　新　番
416	61H　谷A
417	61A　SX04
418	61H　SX01b
419	61E　検出
420	61H　谷A
421	61E　検出
422	60E　谷A埋土
423	60A　谷A埋土
第1図1	60D　検出
第1図2	61E　SD02
第2図	63D　検出

木製品一覧

（単位はcm、g）

図版	登録番号	種別		A（幅）	B（幅）	C（幅）	D（厚さ）	E（厚さ）	樹種鑑定	時期
1	60D－038	Ⅰ類	敲・磨製 A	(14.3)	(6.6)		(2.8)	0.8	コナラ属アカガシ亜属の一種	Ⅱ～Ⅲａ
2	61AB－335	Ⅰ類	敲・磨製 A	34.9	(5.2)	16.1	4.4	0.8	コナラ属アカガシ亜属の一種	Ⅲｂ末～Ⅳ
			柄	(6.2)	3.1		2.63			
3	61I－006	Ⅰ類	敲・磨製 A	30.3	8.0	16.1	4.5	0.3	カシ類	Ⅳ
4	61AB－259	Ⅰ類	敲・磨製 A	(29.5)	11.2	(3.3)	3.0	0.8	カシ類	Ⅴａ
5	610－003	Ⅰ類	敲・磨製 B	29.2	(6.8)	9.2	1.9	0.8	コナラ属アカガシ亜属の一種	Ⅱ
			柄	59.1	3.0	2.9	1.8	1.5		
6	610－004	Ⅰ類	敲・磨製 B	33.5	(10.3)	(5.5)	4.5	0.8	コナラ属アカガシ亜属の一種	Ⅱ
			柄	(88.9)	3.2		2.0			
7	61AB－238	Ⅰ類	敲・磨製 B	26.8	11.5	9.1	2.6	0.9	カシ類	Ⅱ
8	61AB－262	Ⅰ類	敲・磨製 B	30.6	(6.4)	(5.0)	2.1	0.9	ナラ類	Ⅲｂ末
9	60A－101	Ⅰ類	敲・磨製 B	26.1	(7.4)	(2.9)	2.3	0.5	コナラ属アカガシ亜属の一種	Ⅳ
10	61U－001	Ⅰ類	敲・磨製 B	40.8	13.0	13.5	4.2	0.8		Ⅲｂ
			柄	52.6	3.6		2.2			
11	61U－003	Ⅰ類	敲・磨製 B	(23.1)	(3.8)	(3.2)	3.4	0.9	コナラ属アカガシ亜属の一種	Ⅲｂ
			柄	(6.0)	3.7		(81.8)			
12	61AB－082	Ⅰ類	敲・磨製 B	(25.2)	15.2	(3.0)	1.6	0.8	コナラ属アカガシ亜属の一種	Ⅳ
13	60F－008	Ⅰ類	敲・磨製 B	23.8	(3.6)	(3.2)	1.6	0.7		Ⅳ～
14	61EF－051	Ⅰ類	敲・磨製 B	23.4	11.9	6.9	2.2	0.6	カシ類	Ⅲｂ末～
15	61AB－086	Ⅰ類	敲・磨製 B	36.1	7.8	11.0	1.8	0.7	コナラ属アカガシ亜属の一種	Ⅳ
16	611－135	Ⅰ類	敲・磨製 B	(23.0)	(7.6)	(6.9)	2.2	0.7	カシ類	Ⅴ～
17	60A－177	Ⅰ類	敲・磨製 C	(10.7)		8.7	2.6	1.1	コナラ属アカガシ亜属の一種	Ⅳ
18	60A－176	Ⅰ類	敲・磨製 C	12.5	5.8	9.7	1.8	1.0	カシ	Ⅳ
19	60A－175	Ⅰ類	敲・磨製 C	12.8	(3.0)	(5.4)	1.8	1.0	コナラ属アカガシ亜属の一種	Ⅳ
20	60A－174	Ⅰ類	敲・磨製 C	(10.6)		9.7	2.4	1.3	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	
21	60A－058	Ⅰ類	敲・磨製 C	14.3	1.6	3.1	1.6	0.9		Ⅳ
22	61AB－205	Ⅰ類	敲・磨製 C	10.0	7.0	6.4	2.1	0.8	カシ類	Ⅳ
23	61AB－083	Ⅰ類	敲・磨製 C	10.9	7.8	7.8	3.2	1.8	コナラ属アカガシ亜属の一種	Ⅳ
24	61AB－294	Ⅰ類	敲・磨製 C	11.0	8.8		1.7		ナラ類ヤカキ	Ⅳ
			柄	54.5	2.2		2.0			
25	61AB－177	Ⅰ類	敲・磨製 C	(11.8)	(2.4)	(6.2)	1.5	0.8		Ⅳ
26	60D－006	Ⅰ類	敲・磨製 C	(11.6)		10.8	2.7	1.2		Ⅲ～
27	61KL－001	Ⅰ類	敲・磨製 未製品	43.7	16.5	17.8	5.6	1.8		
28	60B－007	Ⅰ類	敲・磨製 未製品	41.0		23.6	5.4	2.8		Ⅱ
29	61G－016	Ⅰ類	敲・磨製 未製品	49.2	19.5	26.5	4.3	2.3		
30	60E－013	Ⅰ類	敲・磨製 未製品	(31.6)	7.2	(13.8)	3.2	0.7		Ⅱ～Ⅲａ
31	61AB－219	Ⅰ類	敲・磨製 未製品	36.1	12.7	16.8	4.0	2.3	ナラ類	Ⅲｂ末
32	61AB－203	Ⅰ類	敲・磨製 未製品	39.9	15.0	20.2	2.6	4.3	ナラ類	Ⅲｂ末～Ⅳ
33	61AB－239	Ⅰ類	敲・磨製 未製品	34.8	18.1	16.8	4.2	1.3	カシ類	Ⅲｂ末～Ⅳ
34	61AB－256	Ⅰ類	敲・磨製 未製品	(33.2)		12.8	3.8	1.1	カシ類	Ⅳ
35	61T－003	Ⅰ類	敲・磨製 未製品	39.9	5.8	(20.8)	4.5	1.0	コナラ属アカガシ亜属の一種	Ⅳ
36	61T－001	Ⅰ類	敲・磨製 未製品	38.8	7.5	(18.4)	3.7	0.8	コナラ属アカガシ亜属の一種	Ⅳ
37	61AB－282	Ⅰ類	敲・磨製 未製品	36.2		23.8	5.7	1.3	コナラ属アカガシ亜属の一種	Ⅳ
38	60F－002	Ⅰ類	敲・磨製 未製品	40.2	8.4	23.2	4.2	2.0		Ⅳ～
39	60A－076	Ⅰ類	敲・磨製 未製品	28.6	13.5	11.7	2.4	1.7		Ⅳ
40	61AB－084	Ⅰ類	敲・磨製 未製品	27.3	(6.0)	(8.8)	4.0	3.7	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	Ⅳ
41	60B－006	Ⅰ類	敲・磨製 未製品	19.5	11.2		4.3			Ⅳ
42	61AB－328	Ⅰ類	敲・磨製 未製品	62.0	24.4		6.3		ナラ類	Ⅴ～
43	61EF－057	Ⅰ類	敲・磨製 未製品	24.1	23.5		3.8		カシ類	
44	61U－011	Ⅰ類	敲・磨製 一本勘	(94.6)	37.4	17.8	0.9		コナラ属アカガシ亜属の一種	Ⅲｂ
			柄		(57.1)	3.2	3.2			
45	61U－013	Ⅰ類	敲・磨製 一本勘	95.0	27.1	(13.9)	1.0		コナラ属アカガシ亜属の一種	Ⅲｂ
			柄		67.9	3.3	3.2			
46	61U－012	Ⅰ類	敲・磨製 一本勘	104.8	32.6	14.1	1.4		コナラ属アカガシ亜属の一種	Ⅲｂ
			柄		72.2	3.2	3.0			
47	61U－010	Ⅰ類	敲・磨製 一本勘	(34.1)	2.1		2.2		カシ	Ⅲｂ
48	61U－007	Ⅰ類	敲・磨製 組合せ勘	(38.7)	(8.6)	(9.4)	2.0	1.0		Ⅲｂ
49	61U－005	Ⅰ類	敲・磨製 組合せ勘	44.3	13.4	10.0	1.2	0.8	コナラ属アカガシ亜属の一種	Ⅲｂ
50	61U－014	Ⅰ類	敲・磨製 組合せ勘	(55.1)	(12.3)	6.8	1.4	1.0	コナラ属アカガシ亜属の一種	Ⅲｂ
51	61N－011	Ⅰ類	敲・磨製 一本勘	(9.5)	(5.7)		2.7		カシ類	Ⅴ～

図版	登録番号	種別	A(縦)	B(横)	C(横)	D(厚さ)	E(厚さ)	樹種鑑定	時期
52	60A－044	Ⅰ類　敲・磨形　一本敲	27.6	(10.8)	6.0	0.8	0.5	クヌギ	Ⅳ
53	61AB－280	Ⅰ類　又敲	18.0	15.2		2.7		コナラ属アカガシ亜属の一種	Ⅲｂ未～Ⅳ
54	61AB－049	Ⅰ類　又敲	(9.7)	(8.6)		1.1			Ⅲｂ～Ⅳ
55	61EF－019	Ⅰ類　又敲	(10.8)	(7.7)		1.6		カシ類	Ⅲｂ未～
56	60A－179	Ⅰ類　又敲	22.3	(16.9)		1.4		カシ	Ⅳ
57	61AB－279	Ⅱ類　B	27.9	14.2		1.6		コナラ属アカガシ亜属の一種	Ⅳ
58	61EF－064	Ⅱ類　B	28.8	14.1		2.0			Ⅲｂ～
59	61AB－281	Ⅱ類　B	22.1	(8.5)		1.8		コナラ属アカガシ亜属の一種	Ⅳ
60	61AB－163	Ⅱ類　A	39.2	5.8	9.6	1.4	1.7	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	Ⅳ
61	61AB－164	Ⅱ類　A	35.0	3.9	7.1	1.7	1.2	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種	Ⅳ
62	61AB－276	Ⅱ類　A	(39.0)	4.8	9.0	1.9	1.6	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	Ⅳ
63	61AB－214	Ⅱ類　A	28.6	5.1	7.4	(2.8)		ナラ類	Ⅴ
64	61EF－010	Ⅱ類　A	(20.9)	(3.0)	8.2	(1.1)	1.0		
65	61U－002	Ⅱ類　A	36.9	8.5		1.2			
66	60A－047	Ⅱ類　A	(19.1)	2.0	3.8	0.5	0.7	スギ	Ⅳ
67	61H－009	Ⅱ類　A	(14.0)	3.9		1.1		ヒノキ科	Ⅴ～
68	63DE－018	Ⅱ類　C	(22.7)	3.5		1.5			Ⅳ
69	61T－002	Ⅱ類　C	(23.9)	4.7		0.6			Ⅵ～
70	60F－005	Ⅱ類　C	(22.0)	6.8		0.6			Ⅳ～
71	61H－005	Ⅱ類　C	(41.7)	6.2		1.1		コナラ属アカガシ亜属の一種	Ⅴ～
72	61AB－288	Ⅰ類　敲・磨形　一本敲未製品	126.1	19.5	2.8	3.0	1.7	カシ類	Ⅴ
73	60F－081	況上19	(28.0)	12.3		0.4			
74	61AB－040	Ⅰ類　丸敲	12.9	11.9		1.3			
75	60C－009	Ⅰ類　敲・磨形　組合せ敲	32.4	(6.37)		1.3			Ⅱ
76	61AB－235	Ⅰ類　敲・磨形　組合せ敲	(34.6)	10.7		1.4		スギ	Ⅲｂ未～Ⅳ
77	61I－065	Ⅰ類　敲・磨形　組合せ敲	28.1	(5.7)		1.0			Ⅳ？
78	61AB－042	Ⅰ類　敲・磨形　組合せ敲	(25.1)	(8.5)		1.3			Ⅲｂ
79	61AB－237	Ⅰ類　敲・磨形　組合せ敲	26.1	9.7		1.9		スギ	Ⅲｂ未
80	61AB－050	Ⅰ類　敲・磨形　組合せ敲	31.3	9.2		1.4			Ⅲｂ～Ⅳ
81	63DE－020	石斧柄　膨柄	35.9	1.7		1.1			Ⅲ
		装着部	16.7	2.3		2.2			
82	61AB－269	石斧柄　膨柄	42.8	2.2		2.0			Ⅳ
		装着部	16.2	3.0		1.9			
83	61AB－273	石斧柄　膨柄	(11.0)	2.4		2.5		コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	Ⅳ
		装着部	20.4	4.0		2.2			
84	61AB－075	石斧柄　膨柄	(46.3)	2.7		2.4		広葉樹(環孔材)	Ⅲｂ未～Ⅳ
		装着部	(11.2)			(3.3)			
85	61AB－260	石斧柄　膨柄	(20.8)	2.0		2.3		サカキ	Ⅱ
		装着部	20.0	5.2		3.3			
86	61I－002	石斧柄　膨柄	(6.4)	2.3		1.6		サカキ	Ⅱ～Ⅲａ
		装着部	19.1	0.7		3.1			
87	61I－010	石斧柄　膨柄	(13.6)	3.2		1.6		サカキ	Ⅱ～Ⅲａ
		装着部	21.6	3.3		2.7			
88	60E－125	石斧柄　膨柄	(7.6)	2.1		1.7		サカキ	Ⅳ～
		装着部	13.4	5.2		3.0			
89	61AB－244	石斧柄　直柄　未製品	(74.6)	10.5	5.5	4.9	3.2	カシ類	Ⅲｂ未～Ⅳ
90	61A－108	石斧柄　直柄	(25.5)	(5.2)	(1.7)	(7.0)	5.3	クヌギ	Ⅳ
91	61M－020	石斧柄　直柄	(17.0)	4.4	2.6	5.1	3.0	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	Ⅳ～
92	60A－021	不明	12.1	4.3		1.5			Ⅳ
93	61AB－248	不明	(15.8)	2.8		2.0		サカキ	Ⅲ
			(13.1)	4.5		3.1			
94	60A－066	不明	13.3	(3.5)		2.2			
95	60A－111	鉄斧柄　直柄	49.9	7.1	3.1	2.8	2.5	スギ	Ⅳ
96	60E－020	鉄斧柄　膨柄	(10.5)	3.6		3.0			Ⅴ～
		装着部	(9.2)	2.4		1.9			
97	60E－017	鉄斧柄　膨柄	(44.3)	3.5	2.9	3.0	3.2	ヒノキ	Ⅴ～

図版	登録番号	種別	A(縦)	B(横)	C(横)	D(厚さ)	E(厚さ)	樹種鑑定	時期
98	61AB－298	鉄斧柄　膝柄	52.7	2.9		2.5		イヌマキ	Ⅴ・Ⅵ
99	60C－012	有孔板	21.8	(8.3)		1.1			
100	63DE－006	有孔板	22.4	6.7		1.1			
101	61U－004	田下駄	34.2	11.2		1.0			
102	61EF－073	田下駄	27.4	(5.8)		1.1			
103	61AB－149	有孔板	28.1	9.7		1.2			
104	63DE－038	有孔板	23.2	9.9		0.7			
105	61AB－297	大足	(81.5)	18.1		1.9		スギ	
106	60D－020A	大足	(40.5)	4.2		1.8		スギ	
107	60D－020B	大足	(56.2)	4.7		1.9		スギ	
108	61H－031	大足	(65.4)	4.9		2.8		ヒノキ科	
109	60A－112	そり状木製品	51.7	15.4	13.8	1.9	3.9	クリ	
110	61AB－331	そり状木製品	77.4	9.3	13.5	3.7	10.0	ヤナギ属	
111	61AB－261	そり状木製品	29.2	4.9		4.7	0.7	クリ	
112	60F－070	大足	(43.1)	3.8		1.6			
113	61N－010	大足	(36.9)	4.0		1.1			
114	60C－021	棒状木製品　Ⅰ類	44.9	4.6		0.9			
115	61EF－033	棒状木製品　Ⅰ類	43.6	7.3		1.7		カシ類	
116	60B－011	棒状木製品　Ⅱ類	39.0	13.5	17.9	2.2	1.8	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	
117	61I－101	棒状木製品　Ⅱ類	79.8	21.7		5.5		カシ類	
118	61I－060	棒状木製品　Ⅱ類	(40.4)	(14.1)		1.5			
119	61AB－043	棒状木製品　Ⅰ類	(14.6)	4.5		0.8			
120	61I－134	棒状木製品　Ⅱ類	60.6	24.8		3.7		ナラ類	
121	61H－032	棒状木製品　Ⅰ類	41.1	7.5		0.7		ヒノキ科	
122	63DE－035	棒状木製品	17.0	(8.2)		0.4			
123	60D－028	棒状木製品	32.3	11.2		1.3			
124	61AB－285	横槌　Ⅰ類A	44.0	7.0	4.6	5.3	3.2		
125	61AB－252	横槌　Ⅰ類A	35.6	5.5	3.6	4.3	3.9	ナラ類	
126	60D－002	横槌　Ⅰ類A	24.2	5.3	2.8	(3.2)	(0.4)		Ⅱ～Ⅲa
127	60C－011	横槌　Ⅰ類C	25.0	5.5	3.1	5.0	3.1	マツ(二葉松)	Ⅱ～Ⅲa
128	61I－067	横槌　Ⅰ類B	(27.8)	6.2	3.8	4.8	3.4	ナラ類	
129	61AB－165	横槌　Ⅰ類B	36.2	8.1	4.1	4.1	3.2	コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種	Ⅳ
130	61AB－278	横槌　Ⅰ類B	41.2	6.5	3.6	4.8	2.8	コナラ属アカガシ亜属一種	Ⅳ
131	61AB－277	横槌　Ⅰ類B	37.0	5.4	3.3	3.8	2.5		Ⅳ
132	60A－110	横槌　Ⅰ類C	32.4	7.0	3.6	6.1	3.7	ヒノキ	
133	63DE－016	横槌　Ⅰ類C	31.7	8.7	4.0	5.6	3.5		Ⅲb～Ⅳ
134	61AB－078	横槌　Ⅰ類B	38.5	5.4	3.2	4.1	3.4	広葉樹(散孔材)	Ⅳ
135	61I－071	横槌　Ⅰ類B	(35.6)	5.9	3.8	(5.5)	3.9		
136	61AB－254	横槌　Ⅰ類D	35.2	6.2	3.6	3.8	2.4	ミズキ属	
137	61AB－076	横槌　Ⅰ類D	35.4	6.2	2.8	5.7	2.0	広葉樹(散孔材)	Ⅳ
138	61AB－245	横槌　Ⅰ類D	40.5	6.6	4.7	6.3	4.2	ナラ類	Ⅲb
139	60D－050	横槌	22.9	4.8	2.2	4.3	2.2	針葉樹(崩壊著しい)	
140	61I－131	横槌　Ⅱ類	41.6	13.9	4.4	13.1	3.4	スギ類似種	
141	61AB－246	横槌	51.3	9.4	5.5	7.4	4.5	ヒノキ科	Ⅲb
142	60A－178	横槌	43.5	16.8	(2.0)	9.3	3.5	コナラ属アカガシ亜属の一種	
143	63DE－037	竪杵	(161.8)	7.3		5.8		ヤブツバキ	Ⅱ
144	61AB－327	竪杵	(62.2)	7.6		5.8		ナラ類	Ⅲb
145	60A－113	竪杵	(55.0)	6.2		5.9		ヤブツバキ	
146	60A－107	竪杵	(44.9)	5.9		5.3			
147	61AB－068	竪杵	(18.8)	6.1		6.4			
148	61AB－249	不明	19.9	3.1		2.6		コクサギ	
149	60A－003	不明	(23.1)	2.5		2.1			
150	60D－035	不明	(17.8)	10.7	7.6	10.3	0.6		
151	60A－115	不明	(13.3)	9.2	6.2	8.6	0.8	マツ属複維管束亜属の一種	
152	61AB－207	臼　小形臼	8.4H	14.6R					
153	60A－172	臼　小形臼	(9.9H)	(17.3R)				エノキ属の一種	
154	61AB－267	臼　小形臼	6.0H	8.6R					Ⅲb～Ⅳ
155	61AB－096	臼　小形臼	7.3H	(7.2R)					
156	61AB－023	臼　小形臼	6.8H	7.3R					Ⅱ～Ⅲa
157	61AB－333	臼　小形臼	13.0H	(16.0R)					
158	60C－010	臼　小形臼	18.5H	(15.6R)					
159	60A－062	臼　小形臼　未製品		15.1	8.5	16.2			Ⅱ～Ⅲa
160	61I－136A	臼　大形臼　井戸枠	(26.6H)	48.8R		2.8	5.6		Ⅳ

図版	登録番号	種別	A(縦)	B(横)	C(横)	D(厚さ)	E(厚さ)	樹種鑑定	時期
161	61I－136B	井 大形井 井戸枠	(33.2H)	76.8R		2.8	8.8		Ⅳ
162	61I－136C	井 大形井 井戸枠	(28.8H)	75.6R		3.2	8.0		Ⅳ
163	61I－102	井 大形井 井戸枠	(24.8H)	(34.0)		3.2	8.4	クスノキ属の一種	Ⅳ
164	61EF－107	井 大形井	(30.2H)		43.2R	7.2			
165	61J－005	井 大形井	(24.4H)	48.9R		1.6	3.4	クスノキ属の一種	Ⅳ？
166	61I－133	井 大形井	(40.0H)	(44.8R)	(48.8R)	1.9	13.8		
167	63DE－034	高杯	(6.3H)	27.3R		0.5		ヤマキ類似種	Ⅱ
168	60D－047	高杯	(5.6H)	27.2R		0.9		ヤマキ	
169	60F－034	高杯	(7.8H)	20.8R		1.6		ヤマキ	
170	60E－004	高杯	(6.3H)	34.2R		1.6		トチノキ	
171	61AB－002	高杯	(14.4H)		(21.0R)	3.5			Ⅲb～Ⅳ
172	63DE－039	高杯		28.6R		0.8		ヤマキ	Ⅵ
173	61EF－026	高杯	8.6H	19.2R	11.2R	0.6	1.0		
174	60D－005	高杯	(5.2H)		11.6R	1.3			
175	61AB－263	高杯	(6.0H)		16.2R	2.2		ヤマキ	
176	61KL－004	高杯	(5.2H)		(6.2R)	1.6			
177	61EF－047	高杯	(2.4H)		14.4R	1.2		ヤマキ	
178	61G－007	高杯	(3.2H)		10.1R	0.8			
179	61AB－146	高杯	(4.5H)		30.6R	1.0			Ⅱ～Ⅲa
180	61AB－060	椀	(3.2H)		6.2R	0.4			
181	60E－001	椀	(3.7H)	15.8R		1.6		ヤマキ	
182	61AB－204	椀	(4.8H)	(18.4R)		0.8		ヤマキ　ヒノキ	Ⅲb～Ⅳ
183	61EF－028	椀	(6.8H)	(17.6R)		1.2		ヤマキ	
184	60D－032	鉢	(27.8)	(9.7)		0.8			Ⅱ～Ⅲa
185	61M－014	鉢	(36.8)	(9.2)		0.8		ヤマキ	
186	61AB－271	杓子	(15.9)	(14.7)		1.35		広葉樹(環孔材)	
187	61EF－040	翁形容器	(60.9)	(19.5)		1.8		スギ	
188	61AB－111	翁形容器	(11.6)	(6.8)		0.9			Ⅳ
189	61I－061	翁形容器	25.1	(7.5)		0.9		クスノキ	
190	60F－002	翁形容器	28.4	5.8		1.1			
191	60A－063	翁形容器	(45.0)	(23.3)		2.2			
192	60C－035	翁形容器	(17.2)	12.6		1.6		エノキ	
193	61AB－204	十能形木製品	34.0	(10.6)		0.9			Ⅱ～Ⅲa
194	61EF－056	翁形容器	(31.1)	(15.2)		2.6			
195	61I－124	翁形容器	(23.6)	(21.7)		2.0		スギ	
196	61I－123	翁形容器	18.1	(6.2)		0.7		ヤマキ	
197	61I－125	鉢	34.4	(15.1)		3.2	1.0	ヤマキ	Ⅱ
198	60B－012	十能形木製品	31.2	5.9	3.2	0.6	2.1	コウヤマキ	Ⅴ～
199	61I－023	十能形木製品　未製品	28.3	7.0	2.9	2.3	2.8		
200	60D－048	杓子	26.2	(7.4)	2.0	0.6	1.9	ヤマキ	
201	61EF－044	杓子	(31.8)	16.8	1.6	1.6	1.6	ヤマキ	Ⅲb
202	61AB－272	杓子or椀	(20.2)	(10.2)	2.6	1.0	1.2	広葉樹(環孔材)	Ⅱ～Ⅲa
203	60D－046	柱子	(88.6)	11.2		9.8	4.1	ヒノキ属の一種	Ⅱ～Ⅲb
204	61G－015	柱子	(27.1)	10.5		4.3	1.7	ヤマハゼ	Ⅱ～Ⅲa
205	61AB－028	柱子	(30.5)	12.3		5.3	2.7		
206	61EF－078	柱子	(140.4)	24.4	19.9	11.6	4.2		Ⅲb
207	60D－053	柱子	(37.7)	14.9		10.4	4.0	針葉樹(崩壊著しい)	
208	61EF－017	柱子	(20.1)	4.5		2.3	0.8	ネズコ？	Ⅱ～Ⅲa
209	61G－020	建築部材	(117.4)	6.4		6.7		イチイ	Ⅲb～Ⅳ
		転用杭部	21.6	14.2					
210	61H－003	丸頭杭	34.4	9.4		1.2			
211	61I－062	丸頭杭	29.8	9.3		1.5		スギ	Ⅳ
212	61EF－069	丸頭杭	21.7	(12.9)		2.6	0.9		
213	61AB－232	丸頭杭	45.4	(7.1)		1.5			Ⅱ～Ⅲa
214	61M－018	弓 I類	(88.3)	2.3		2.2			
215	60A－186	弓 I類	(64.6)	1.7		1.6		モミ	
216	61I－107	弓 I類	58.1	2.2		1.9			
217	60D－040	弓 I類	(60.8)	1.7		1.6		ヒノキ属類似種	
218	60D－013	弓 I類	(22.4)	2.8		2.0			
219	61I－086	弓 I類	(37.7)	1.8		1.8		イヌマキ	
220	60A－185	弓 I類	96.8	2.6		2.3		イヌマキ	
221	61I－024	弓 II類	(22.3)	1.7		1.5			
222	60D－016	弓 II類	(23.8)	1.5		1.7			

図版	登録番号	種別	A(縦)	B(横)	C(厚)	D(厚さ)	E(厚さ)	樹種鑑定	時期
223	61AB－044	弓 Ⅱ類	(6.7)	1.5		1.3			
224	61AB－121	弓 Ⅱ類	(45.2)	1.2		1.2			Ⅱ～Ⅲa
225	61J－004	弓 Ⅱ類	(30.4)	1.8		1.5		イヌマキ	
226	61AB－253	弓 Ⅳ類	(36.0)	2.2		1.5		ヤマハゼ	Ⅲb
227	61I－091	弓 Ⅳ類	(41.7)	2.3		1.7			Ⅱ
228	61AB－323	弓 Ⅳ類	(85.6)	1.5		1.7		イヌガヤ	Ⅱ～Ⅲa
229	60F－082	弓 Ⅳ類	144.8	2.0		1.9		マキ属の一種	
230	61AB－155	弓 Ⅴ類	(40.1)	2.4		2.3			
231	60A－190	弓 Ⅴ類	(74.6)	3.4		3.2		イヌマキ	
232	61AB－325	弓 Ⅵ類	(114.3)	1.8		1.7		イヌマキ	Ⅱ～Ⅲa
233	61AB－296	弓 Ⅵ類	(73.9)	2.7		3.0		イヌガヤ	
234	61I－119	弓 Ⅵ類	(73.7)	2.2		1.6			
235	63N－003	弓 Ⅵ類	(36.8)	(2.4)		(1.4)			Ⅱ
236	61I－113	弓 Ⅵ類	(61.6)	1.4		1.5			
237	61AB－324	弓 Ⅵ類	(136.8)	3.1		2.9		イヌマキ	Ⅴ
238	60A－184	弓 Ⅵ類	106.5	2.0		1.9		イヌマキ	
239	61AB－319	弓 Ⅵ類	(96.5)	2.1		1.9		イヌマキ	
240	61AB－255	弓	(45.0)	3.2		2.9			
241	61AB－310	弓 Ⅹ類	(59.4)	2.4		2.2			Ⅲb
242	61I－099	弓 Ⅹ類	(53.2)	1.4		1.5			
243	60F－006	弓 ⅩⅠ類	56.4	1.4		1.6		ヒノキ	
244	60D－031	弓 ⅩⅠ類	(29.3)	2.1		1.3			
245	61EF－059	弓 ⅩⅠⅠ類	(14.2)	2.6		2.6		イヌマキ？	
246	61I－005	弓	(24.8)	1.8		1.7		ヤマハゼ	
247	60D－023	弓	(38.9)	1.0		0.9			
248	60B－001	綿越具	17.6	6.4		1.2		スギ	Ⅱ
249	61I－066	綿越具	19.6	6.3		1.3		スギ	
250	61EF－066	綿越具	17.6	4.2		0.9		スギ	
251	60C－014	綿越具	14.2	4.7		0.7			Ⅱ～Ⅲa
252	61AB－001	綿越具	12.7	2.7		0.7			Ⅱ～Ⅲa
253	61EF－018	綿打具	(12.2)	(4.5)		0.5		ヤマグワ	Ⅲb
254	61I－001	綿打具	(10.1)	3.8		0.2		サカキ	
255	60D－051	目盛り板	65.8	3.8		1.7		ヒノキ	Ⅱ～Ⅲa
256	60C－002	目盛り板	(31.7)	5.1		2.3			
257	61G－013	経巻具・巻巻具？	(37.7)	4.4		1.8			Ⅲb～Ⅳ
258	61G－014	経巻具・巻巻具？	48.2	5.5		1.9			Ⅲb～Ⅳ
259	60C－013	経巻具・巻巻具？	(19.1)	3.4		2.2			Ⅱ～Ⅲa
260	61AB－179	経巻具・巻巻具？	(20.7)	2.3	1.2	2.1	1.5		Ⅲb～Ⅳ
261	60D－033	杵？	(24.2)	2.6		2.2			
262	61G－005	杵？	(24.0)	2.9		1.9			Ⅲb～Ⅳ
263	60C－020	杵？	50.1	2.9	1.7	1.8	1.7		
264	61AB－118	経巻具・巻巻具？	42.1	2.7		2.5			
265	61AB－035	経巻具・巻巻具？	27.2	2.9		1.8			Ⅱ～Ⅲa
266	61I－004	経巻具・巻巻具？	28.8	3.9		1.3		スギ	
267	61EF－020	経巻具・巻巻具？	(27.7)	3.5		1.2			Ⅲb
268	60C－034	経巻具・巻巻具？	20.5	3.3		1.1			
269	61I－041	木錘	15.7	8.5		7.1		マキ属類似種	
270	61EF－027	木錘	14.7	8.8		7.2		ヒノキ	
271	61I－043	木錘	(14.0)	8.7		6.3		ヤブツバキ	
272	60D－039	木錘	(13.7)	(6.6)		(2.3)		イヌガヤ	
273	61AB－316	経巻具・巻巻具？	102.8	4.0		2.6		ヒノキ科	Ⅲb～Ⅳ
274	61EF－042	経巻具・巻巻具？	93.4	3.2		1.3		スギ	
275	61AB－320	経巻具・巻巻具？	79.3	2.8		2.2		スギ	Ⅱ～Ⅲa
276	61AB－313	経巻具・巻巻具？	52.8	2.0		1.5			Ⅱ～Ⅲa
277	61AB－318	経巻具・巻巻具？	87.8	2.3		2.2		イヌマキ	Ⅱ～Ⅲa
278	60A－124	経巻具・巻巻具？	67.1	2.2		2.4			
279	61AB－308	経巻具・巻巻具？	62.6	1.9		1.9			
280	60E－056	経巻具・巻巻具？	59.5	2.7		2.5			
281	60E－019	経巻具・巻巻具？	(59.3)	3.2		3.0		マキ属の一種	
282	60A－126	経巻具・巻巻具？	56.8	2.5		2.5			
283	60E－057	経巻具・巻巻具？	(53.8)	3.5		3.1			
284	61AB－312	経巻具・巻巻具？	(56.1)	3.3		2.6			
285	60C－006	経巻具・巻巻具？	(19.7)	3.4		2.7			

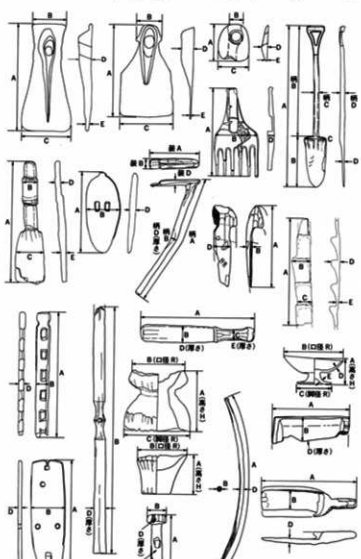
図版	登録番号	種別	A(幅)	B(幅)	C(幅)	D(厚さ)	E(厚さ)	樹種鑑定	時期
286	61I－008	経巻具・布巻具？	(32.2)	2.4		1.8			
287	61AB－119	経巻具・布巻具？	(44.2)	2.5		2.6			II～III a
288	61AB－063	ヤス状刺突具　I類	10.2	0.6		0.6			II～III a
289	61AB－067	ヤス状刺突具　I類	8.9	0.7		0.6			III b～IV
290	61AB－197	ヤス状刺突具　I類	11.1	1.1		1.0			
291	61AB－242	ヤス状木製品　II類	(9.5)	0.8		0.8			
292	61AB－178	ヤス状木製品　II類	(15.1)	0.8		0.7			III b～IV
293	61AB－088	ヤス状木製品　II類	15.8	0.9		0.8			
294	63DE－030	ヤス状木製品　II類	(13.3)	0.6		0.6			III b～IV
295	61I－015	刺突具	12.4	0.7		0.5			
296	61AB－274	ヤス状木製品　II類	12.1	0.5		0.4			
297	61EF－105	擬形木製品	7.4	1.1		1.0			
298	61G－011	擬形木製品	6.8	1.4		1.1		ヒノキ科	III b
299	61AB－052	刺突具	22.3	3.1		3.0			II～III a
300	60E－075	擬形木製品	22.9	2.9		0.7		ヒノキ	
301	60A－180	擬形木製品	(32.1)	4.1	1.9	0.6	0.5	ヒノキ	
302	60A－109	擬形木製品	(45.8)	3.5		2.3		ヒノキ属の一種	
303	60D－049	柄	13.6	3.0		1.5	0.6	イヌガヤ	
304	60E－126	擬形木製品	(14.9)	2.0	1.1	1.1	1.1	スギ	
305	61II－011	刺突Hor擬形木製品	29.1	0.7	2.0	0.5	1.2		
306	61AB－315	糖状木製品	(98.9)	5.9		1.1		ヒノキ属の一種	
307	61EF－072	糖状木製品	(20.0)	5.0		1.2			
308	61II－035	糖状木製品	(57.0)	5.8		1.6			
309	60C－032	糖状木製品	(53.1)	4.2		1.7			
310	60C－031A	糖状木製品	(35.3)	4.1		1.6			
311	60C－031B	糖状木製品	(34.8)	2.4		0.8			
312	60C－019	糖状木製品	(40.2)	4.2		0.8			
313	60D－009	櫛	(4.3)	(2.3)		0.7			
314	61II－012	櫛	(37.1)	(8.7)		0.9		スギ	
315	61AB－270	櫛	(40.1)	12.8		0.5		スギ類似種	II～III b
316	60B－005A	櫛	(17.2)	(3.8)		0.5		モミ	V
317	60B－005B	櫛	(25.1)	(3.9)		0.6		モミ	V
318	61AB－283	櫛	(81.6)	(5.9)		1.1		モミ属の一種	IV
319	61AB－236	櫛	(34.9)	(6.2)		0.9		スギ	II～III a
320	61I－087	櫛	(40.9)	29.5		1.1		スギ	
321	60F－063	繊維	77.7	28.2		0.2		ヒノキの樹皮？	
322	60D－052	鳥形	(40.2)	4.1		0.7		ヒノキ	
323	61I－090	鳥形	(34.6)	5.3		10.2			
324	61AB－275	紡錘	(9.6)	4.9		0.4			II～III a
325	61EF－068	人形	12.5	2.8	1.7	2.3	1.5		V～
326	61EF－023	鳥形	11.4	2.3		1.5			
327	61I－042	舟形	(31.5)	8.2		0.7		スギ類似種	
328	61EF－063	舟形	(22.7)	5.8		0.5		スギ類似種	
329	61AB－158	板材	42.8	13.8		5.6			III b
330	61AB－135	板材	40.8	6.4		3.0	0.9		IV
331	60A－051	板材	(34.1)	(17.4)		3.6			II～III a
332	61M－006	板材	25.1	18.2		4.5			
333	61EF－108	板材	34.0	16.4		3.2		クヌギ	II～III a
334	63GH－001	板材	34.6	20.2		3.8		ヒノキ属の一種	V.
335	61I－001	板材	23.7	16.0		2.6		ナラ類	
336	60F－007	板材	(23.3)	15.3		2.2			
337	60A－029	板材	36.0	20.8		2.4			
338	61EF－021	板材	19.6	19.8		3.8		クヌギ	II～III a
339	61KL－003	板材	28.4	16.6		2.0			III
340	60E－068	板材	48.1	9.4		2.3		クヌギ	
341	61AB－334	原材	22.8	16.8		14.6		ハコヤナギ属	II～III a
342	61AB－330	原材	18.6	17.2		18.7		クスノキ	II～III a
343	61I－100	原材	18.8	13.3		11.4		クスノキ	
344	61I－132	原材	20.2	18.1		15.3		クスノキ	
345	60A－050	原材	31.1	12.9	8.5	8.1	5.6		
346	61AB－247	原材	(33.2)	7.4		6.4			III b
		枝部	83.6	3.7		4.0			
347	61M－021	有頭棒　I類	97.3	4.0		4.0			

図版	登録番号	種別	A(幅)	B(厚)	C(厚)	D(厚さ)	E(厚さ)	樹種鑑定	時期
348	61I－112	有頭弾　I類	49.9	2.7		2.5			
349	61AB－286	有頭弾　I類	(67.2)	4.2		4.2		イヌマキ	
350	61I－003	有頭弾　I類	(23.2)	4.1		3.5		サカキ	
351	60E－108	有頭弾　I類	14.3	2.1		2.1			II～III
352	61I－097	有頭弾	(12.7)	3.4		3.1			
353	61AB－006	有頭弾	7.1	5.5	3.0	5.4	2.4		II～III a
354	60A－057	有頭弾	9.5	6.5	2.5	5.3	3.3	サカキ	
355	61J－003	有頭弾	(22.8)	7.4	2.3	4.5	(0.9)	イヌマキ	
356	61I－030	有頭弾	17.3	3.4	2.3	3.3	1.3		
357	61EF－029	有頭弾　II類	41.8	5.2	3.9	(4.1)	2.6	イヌマキ	II～III a
358	61AB－034	有頭弾　II類	(26.2)	5.8	3.2	5.8	3.1		II～III a
359	61AB－200	有頭弾　II類	30.3	(3.2)	2.7	2.5	2.1		
360	61I－084	有頭弾　II類	20.3	5.2	2.9	4.2	2.4		
361	60A－072	有頭弾　II類	22.2	(7.5)	6.1	(4.8)	1.9		II～III a
362	60E－015	有頭弾　II類	16.0	7.6	3.9	3.9	2.1		
363	61AB－109	有頭弾　II類	18.5	6.0	3.3	5.7	2.0		
364	61G－010	有頭弾　II類	15.0	5.1	4.5	5.3	2.0	イヌマキ	III b
365	61G－003	有頭弾　II類	6.5	3.2	2.1	0.9	2.2		III b～IV
366	61AB－251	有頭弾　II類	14.5	7.0	4.4	4.8	3.3	イヌマキ	
367	60D－018	有頭弾　II類	11.9	4.7	2.8	4.7	2.4	ヒノキ？(分野壁孔崩壊)	
368	61I－034	有頭弾　III類	12.5	3.2	2.2	2.0	1.1		
369	60A－173	有頭弾　III類	16.3	3.3	1.8	3.6	1.7	ヒノキ	
370	61I－096	有頭弾　III類	10.3	3.3	1.8	3.2	1.4		
371	60A－046	有頭弾　III類	17.3	4.2	2.1	4.0	1.9	ヒノキ	
372	61AB－011	有頭弾	(6.8)	(5.1)	2.2	(2.5)	(1.7)		IV
373	61I－009	刺突具？	35.9	2.4		1.9			II
374	61EF－055	刺突具？	32.1	2.9		1.9			III b
375	60A－098	刺突具？	41.2	4.1		2.7			
376	61I－089	刺突具？	37.4	5.8	2.9	2.1	1.2		
377	61G－009	柄？	(45.0)	3.4	0.8	2.4	1.0		III b～IV
378	63DE－002	刺突具？	33.0	4.7	1.7	1.4	1.6		V
379	61AB－080	刺形木製品？	38.0	2.4		0.6			III b
380	60C－001	ヘラ？	34.6	2.1	1.4	0.7	1.2		
381	61G－006	ヘラ？	19.9	1.9		0.4			III b～IV
382	61AB－229	刺突具？	20.1	3.0		2.6			
383	61AB－015	不明	37.9	5.3	6.2	2.4	2.3		V
384	61AB－016	不明	33.6	8.4		1.7			III b～IV
385	63DE－025	不明	14.2	10.2		3.1			III b～IV
386	61AB－046	不明	(26.0)	1.8		0.6			II～III a
387	61EF－065	不明	20.4	3.3		1.8			III b
388	61AB－071	円板	6.5	6.8		0.8			III b
389	61EF－052	円板	17.3	16.6		1.9		スギ	III b
390	61AB－018	不明	(18.4)	4.0		1.4			III b～IV
391	61AB－064	不明	(13.9)	3.0	5.4	1.6	1.1		II～III a
392	61I－026	不明	(22.5)	5.0	2.4	1.8	1.8		
393	61H－008	不明	4.9	2.0		1.9		針葉樹(スギ？)	
394	60A－181	不明	28.0	2.9		2.7		ヒノキ属の一種	
395	60A－049	不明	10.0	2.0		1.8		ヤブツバキ	
396	61AB－087	不明	(17.8)	2.0	4.1	2.0	4.0		IV
397	61AB－206	不明ｏｒ柄	28.0	7.2		4.7		ヌルデ	II～III a
398	61H－010	不明ｏｒ柱子未製品	23.6	7.2	7.0	4.7	5.3	イヌガヤ	
399	61AB－085	不明	14.4	2.7	5.6	1.8	1.9		IV
400	60C－004	不明	18.1	6.4	2.6	2.4	2.4		
401	60E－025	不明	24.7	2.8		2.1			II～III
402	61AB－215	不明	11.9	4.6		1.6		サカキ	III b
403	63DE－032	不明	(16.2)	9.6		0.6			
404	60A－100	不明	31.5	5.7		2.5		イヌガヤ類似種	
405	61AB－172	不明	(30.4)	5.0		4.4			III b
406	61M－015	不明	28.7	9.1		3.5	1.1	コナラ類	
407	63DE－009	両孔板	53.5	3.3		1.2			III b～IV
408	61I－121	両孔板	(61.2)	4.6		1.9		ヒノキ科	
409	61AB－326	両孔板	94.7	5.6		2.8		スギ	IV？
410	61AB－332	不明	(14.2)	(11.6)		10.4		ハリギリ	

図版	登録番号	種別	A(縦)	B(横)	C(横)	D(厚さ)	E(厚さ)	樹種鑑定	時期
410	63DE－010	不明	(36.0)	3.2	2.4	3.3	2.3		Ⅲb～Ⅳ
411	60C－022	不明	26.2	12.5		2.8			Ⅱ～Ⅲa
412	61AB－055	板	11.9	11.9		4.8			
413	60A－100	不明	(51.5)	5.7		2.5		イヌガヤ類似種	
414	60F－044	有孔板	(120.7)	21.2		3.2			
415	60F－079	有孔板	50.6	8.3		4.3			
416	61I－104	有孔板	81.4	16.7		2.5			
417	61AB－032	有孔板	(37.6)	(8.0)		(2.3)			Ⅱ～Ⅲ
418	61I－120	有孔板	(70.2)	(8.3)		2.5		スギ	
419	61EF－077	先丸杭	56.9	5.6		4.3		イヌマキ	
420	61H－018	先丸杭	38.6	3.9		2.8			
421	61EF－074	有孔板	72.1	16.0		1.4			
422	60E－076	有孔板	(77.0)	16.0		1.2			
423	60A－060	板	44.5	14.4	7.6	1.3			
第424	60D－042	柄	(44.1)	3.2		2.8			
第425	61EF－060		25.8	9.6	7.1	3.1	0.8		
第426	63DE－005		19.7	(3.8)		0.8			

※計測位置図

その他の遺物については基本的にA：縦、B・C：横、D・E：厚さとした。



目次

第Ⅴ部 骨角製品

第1章 資料の分類

1．生活用具…44

(1)漁猟刺突具…44 (2)刺突具…45 (3)ヘラ…45 (4)釣り針…45

(5)刃形骨角製品…45 (6)紡錘車…45 (7)その他…46

2．装飾・祭祀用具…46

(1)垂飾…46 (2)加工品…46

3．貝製品…47

貝製品一覧表…47

貝製品出土遺構一覧表…47

骨角製品出土遺構一覧表…48

骨角製品一覧表…50

第1章　資料の分類

1．生活用具

（1）漁猟刺突具

漁労、狩猟、戦闘用に用いられたと考えられる骨角器群である。

Ⅰ類（1～21）　いわゆるヤス状刺突具である。シカ中手骨・中足骨・角を使用している。

断面形が丸く、基部・先端部とも棒状を呈しているもの（1～3・5・14・17・18）、断面形が丸く、基部がやや削り込まれているもの（4・6・10・13・15・16）断面形が平らか中手骨・中足骨の凹みがみられ、基部が太くなるもの（7～9）、断面が偏平で方形をなすもの（11・12）、というように分けることができる。

また、長径によって分けると、長い方から順に、17～19cm（1・2・6・8・12）、14～16cm（3～5・9・11・13）、11cm（14・15）、8cm以下（16～18）の4グループに分けられる。

このように一定のグルーピングが行えるということは、獲物や漁法に明確な意図ががあったことが考えられ、そのための漁具の定型的な製作方法が存在していたと思われる。

19～21に関しては、単独で柄に装着する方法、同様のものを数本組み合わせて柄に装着する方法、銛頭の先端に挟み込み式の逆刺として装着する方法が想定される。

Ⅱ類（22～31・40）　銛頭として分類されるものである。ほぼすべてシカ角を使用している。大きくは、長径のものと短径のものの2種類に分けられる。長径のもののうち、27・28は直線的で逆刺が左右対称に作られているのに対し、29～31はそれぞれ湾曲し、逆刺が非対称に作られている。また、後者の方が逆刺の数が少なくなっている。29～31については、2本（もしくは数本）を基部で組んで使用する、組み合せ式銛の可能性も考えられる。さらに、27については柄部との装着法が判る数少ない例であり、中空の柄に銛が差し込まれ、樹皮で固定されている。なお、柄はヤブツバキである。

短径のもの（22・24）は、Ⅲ類の鏃形のものと径が近似している。これらも、長径をなすものと同じく、逆刺が対称なもの（22）と非対称なもの（24）がみられる。26については逆刺とは異なった突起が4ケ所作られるが、その用途については不明である。25については、先端部の側面に平坦面があり、先述したⅠ類の19～21の逆刺状のものが装着されるかとも考えられるが、大きさ・厚みともに挟み込み式銛のそれよりは、いくぶんか華奢である。

Ⅲ類（32～44）　鏃形の骨角器である。32～34のように石鏃を忠実に模倣したものと、35～40・43・44のような断面が丸い器体部と短い茎部をもつものに分かれるが、それぞれに完全に定形化されていない。特に、前者については生産用具でなく擬器である可能性も考えなければならないであろ

う。また、35～37についてはⅠ類のヤス状刺突具として分類すべきものかもしれない。41に関しては銅鏃の模倣であるかもしれない。

（2）刺突具

Ⅰ類（45～59）　シカやイノシシの尺骨を利用した手持ちの刺突具で、定形化された一定の製作方があったことが窺われる。握部である近位部はそのままで、刃部にあたる遠位部を簡単に削っている。45のように遠位部が長いものから59のように短いものまで様々な長さのものが認められ、使用によって破損したり磨滅したものを再利用していた可能性もある。ただ、51のように先端部を尖らしたものや55のようにヘラ状のものもあり、使用目的別に作り分けられることがあったことを窺わせる。

Ⅱ類（60～81）　Ⅰ類類でみられた尺骨以外の部位を用いた刺突具で、大形のもの（60～68・80～81）と小形のもの（69～79）に分かれる。

大形のもののうち、60は螺旋状に割れたイノシシの左脛骨を利用して刺突部にしており、61も破損したものを利用している可能性が高い。63は鹿角で作られたもので、基部に穿孔がありぶらさげることができるようになっている。62も63とほぼ同様のものあるが、握部に当たる部分に方形の凹部がみられる。また、66～68も、その穿孔の仕方から63に類似するものと考えられる。65は装飾品の"髪針"と類似するが、通常のそれらの径よりもかなり太くなっており、刺突具とした。64・65とも握部に溝が彫られている。80はイノシシの犬歯の先端部を尖らしただけのものであり、81はシカの下顎骨の右半前方部を尖らしている。下顎骨全体に解体痕や磨痕が残っている。

小形のものは、上述した60のように螺旋状に割れ、鋭利に破損したものの先端部をさらに研磨して刺突具として使用している。特に、72については鏃の可能性も考えられる。また、75についてはヘラ状のものとして分類すべきかもしれない。

Ⅲ類（99～105）　縫い針である。長さは長短2種類みられるが、太さと孔径に関してはほぼ同じである。短いものの中には片側だけを削って尖らしたものがあり、先端部が折れた後再使用した可能性がある。

（3）ヘラ（82～85）

先端部が刺突具にみられるほど鋭利でなく、断面が偏平なものである。4点ともシカ角で作られている。

（4）釣り針（86～91）

6点出土しているが、軸頭から鉤先まであるものがないため詳細は不明である。86・87単式釣り針で、86はイノシシ犬歯、87はシカ角製である。90・91はチモトが外に付くものであり、他の出土例比べて華奢にできている。88・89は結合式釣り針の鉤の部分にあたるものと考えられる。

（5）頭形骨角製品（92～95）

短径と長径のものがある。短径のもの（93・94）は円筒状をなし、体部に凹部をもつ。94の孔部には有機物が付着している。92の長径のものは非常に精巧に作られたもので、体部側面の横方向の孔に、両端が傘状に開いて可動する装飾部が挿入されており、その間を幾状もの横位の沈線が刻みこまれている。95も92と同様のものであるが、装飾部が挿入される側面側に抉り込みがある。

（6）紡錘車（96～98）

シカ角およびシカ角角座を利用したものが3点出土しており、各々磨痕が明瞭に残っている。

（7）その他（106～110）

明瞭な磨痕が認められるもので、石器でいう磨石のような使用がなされたかと考えられる。

106～109はシカ角製で、枝部が切り落とされている。106・107・109は、枝部切断面を磨面として使用しており、106は側面も使用している。108はさらに各面が加工されているもので、側面が磨面になっている。また、楕円形の孔もみられる。110はシカ下顎骨を使用した例である。

2．装飾・祭祀用具

（1）垂飾

穿孔されているか、管状になっているもので、紐等を通してつり下げて使用されたと思われるものを“垂飾”としてとりあげた。

Ⅰ類（111～116・119・120）　歯牙垂飾である。69はツキノワグマの犬歯に穿孔されているものである。111～116・119はイノシシの犬歯で、111・112は同じ地点から重なって、113・114もほぼ同一地点で出土しており、腕飾又は首飾と考えられる。111には未穿孔の孔が2つみられる。119はおそらく上述のイノシシの犬歯垂飾の部分と思われるが、破面は丁寧に磨かれており、別種の垂飾として再利用されたものであろう。

Ⅱ類（121～130）　管状垂飾である。鳥類の管状骨を利用している。

Ⅲ類（131～138）　輪鼓状耳飾と呼ばれているものであり、耳飾および一般的な垂飾品として使用されたと考えられる。魚（サメか）の椎骨の中央部に穿孔がなされている。

Ⅳ類（117・118）　穿孔のある加工品である。117は非常に丁寧に研磨されており、118は精巧な線刻がなされている。

（2）加工品

非常に丁寧な装飾や加工が施されていたり、何かを模倣したりしているもので、生産用具とは認められないものを“加工品”として取り上げた。

Ⅰ類（144～151）　いわゆる髪飾類に属するものである。152～154も丁寧に研磨されており、髪飾りになるかもしれない。

Ⅱ類（139～142）　骨に刻みや沈線を施したもので、142は刻骨となろう。139～141については垂飾の可能性も考えられる。

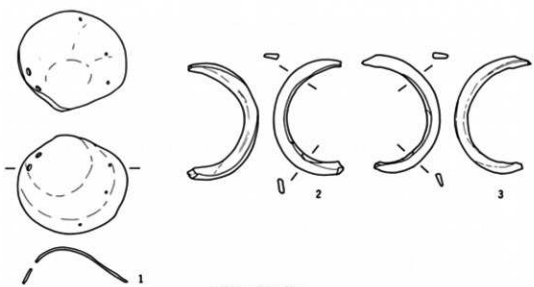
Ⅲ類（143・167）　何かを模したと考えられる骨角器である。143は鹿角を使用したもので、有頭棒及び男根を模したものであろう。167は海洋性ほ乳類（クジラか）の肋骨で、丁寧に作られている。剣形かともと思われるが、アワビ起こしと呼ばれる一群とも形態上の類似がみられる。ただ、いずれにしても実用的なものではないと考えられる。

Ⅳ類（168～171）　儀式的な場で使用されたと思われる骨角器で、骨の一部分のみを加工している。168～170はシカ肩甲骨を使用した卜骨、171はイノシシ下顎に穿孔を施したものである。

その他、用途不明なものには、157の腰飾の部分か思われるものや、弭形角製品の部分か弓飾の部分かと考えられる155がある。158～166については端部が鋭利であり、刺突具になる可能性のあるものである。

3．貝製品

第15図1はナミマガシワガイの右殻で、径2㎜の大きめの孔が2つ、1㎜以下の小孔が3つ開けられている。2・3は同一地点で出土している貝輪である。端部は磨滅していてはっきりしないが、両端は破損していると思われる。



第14図　出土貝製品

貝製品一覧表

（単位はcm、g）

図　版	登録番号	種別	A(縦)	B(横)	C(横)	D(厚)	E(厚)	重量	時期	備考
第14図1	60E-XS-1	不明	5.8	5.3		0.1		9.2	II～III	ナミマガシワガイ
第14図2	61AB-XS-1	貝輪	6.1	3.7		0.2		5.6		
第14図3	61AB-XS-1	貝輪	6.2	3.9		0.3		5.0		

貝製品出土遺構一覧表

図版	出　土　遺　構
第14図1	60E　貝層
第14図2	61A　検出
第14図3	61A　検出

骨角製品出土遺構一覧表

図	出土遺構
1	60B 検出
2	60E 検出
3	60E 貝層
4	60B SD01
5	60A 貝層
6	61A 貝層
7	61A 検出
8	60A 検出
9	60E 検出
10	60A 検出
11	61A 貝層
12	60B 検出
13	61A 検出
14	60B SB04
15	60A 検出
16	61A 検出
17	60E 貝層
18	60A 検出
19	61A 検出
20	60B 検出
21	61A 貝層
22	61A SK02
23	60E 検出
24	60B 検出
25	60E 谷A
26	61H 検出
27	60E 検出
28	61A 検出
29	60B 検出
30	61A 貝層
31	60A SDⅣb上層
32	61A SDI貝層
33	60E SD06a
34	60A 貝層
35	60A 貝層
36	61A 検出
37	63D 検出
38	60B 検出
39	60E 貝層
40	60A 貝層
41	60A SDⅢ
42	61E SD01
43	61E 検出

図	出土遺構
44	63D SK16
45	60A SDⅣb上層
46	61A SX01
47	60E 貝層
48	60A 検出
49	60B 検出
50	61A 検出
51	60E 貝層
52	61A 検出
53	61A SX02
54	63D 検出
55	61C SDⅣa
56	60B 検出
57	60E 貝層
58	61A 検出
59	60B SDⅡa
60	60B SD01
61	60B SD01
62	60B 検出
63	60B SD01
64	61A 検出
65	61A 検出
66	60E 貝層
67	61E 検出
68	61A 検出
69	61H SDXI
70	60A 検出
71	61H 谷A
72	60A 貝層
73	60A 貝層
74	61A SDI
75	63D SD01上層
76	61A 検出
77	60E 検出
78	60E 貝層
79	60E 貝層
80	61E SD01下層
81	61A SDⅢ
82	60B 検出
83	60B 検出
84	60E 貝層
85	61E SD01貝層
86	60E 検出

図	出 土 遺 構
87	61E 検出
88	61A 検出
89	61A 検出
90	60A 貝層
91	60E 貝層
92	60E 貝層
93	61E 検出
94	60B 検出
95	61A 検出
96	60A 谷A
97	60E 検出
98	61A 検出
99	60A 貝層
100	60A 貝層
101	60A 検出
102	61H 検出
103	60A 貝層
104	60A 貝層
105	60E 貝層
106	60A 検出
107	60B SDⅢ下層
108	61A 検出
109	60B 検出
110	60B SB04
111	61A SX02
112	61A SX02
113	60E 貝層
114	60E 貝層
115	60B SDⅢ貝層
116	60B 検出
117	61H 谷A
118	60E 検出
119	60A 貝層
120	60E 検出
121	60E 検出
122	60E 検出
123	60E 貝層
124	60B SDⅢ
125	60E 貝層
126	60B SDⅢ
127	60E 検出
128	60E 貝層
129	60E 谷A
130	60E 貝層
131	63G 検出

図	出 土 遺 構
132	61C SZ115東溝
133	60A 検出
134	60B SDⅡb
135	60B SDⅡa
136	60E 貝層
137	60E 検出
138	60A 検出
139	60A SDⅣb上層
140	60E 貝層
141	60A 貝層
142	61H 谷A
143	61E 検出
144	61A 検出
145	60A 貝層
146	60A 貝層
147	60A 貝層
148	60A 貝層
149	60A 貝層
150	61E 検出
151	60A 貝層
152	60A 貝層
153	60A 検出
154	60E 貝層
155	60A 検出
156	61A 検出
157	60E 谷A
158	60A SDⅥ
159	60A 貝層
160	60B 検出
161	61H 検出
162	60B 検出
163	61C 検出
164	60E 谷A
165	60E 検出
166	61H SE03
167	61A 検出
168	61H SDXI
169	60E 検出
170	61A 貝層
171	61A SDⅣa

骨角製品一覧表

（単位はcm・g）

図	登録番号	種　別	A(縦)	B(横)	C(横)	D(厚さ)	E(厚さ)	重量	種	部位	時期
1	60B－Xb－146	漁撈刺突具　I類	18.0	0.3		0.2		2.7	不明		
2	60E－Xb－606	漁撈刺突具　I類	17.9	0.5		0.5		4.9	シカ	角	
3	60E－Xb－607	漁撈刺突具　I類	16.0	0.4		0.4		3.5	シカ	中手骨or中足骨	II－III
4	60D－Xb－263	漁撈刺突具　I類	14.4	0.6		0.4		3.2	シカ	角	II－III
5	60A－Xb－765	漁撈刺突具　I類	15.1	0.6		0.5		4.9	不明		III－IV
6	61AB－Xb－1199	漁撈刺突具　I類	19.2	0.8		0.7		11.3	シカ	中手骨or中足骨	II－III a
7	61AB－Xb－1201	漁撈刺突具　I類	17.9	0.8		0.5		7.8	シカ	中手骨or中足骨	
8	60A－Xb－681	漁撈刺突具　I類	17.5	1.9	0.6	0.9	0.5	16.2	シカ	角	
9	60E－Xb－645	漁撈刺突具　I類	17.0	1.0		0.5		9.3	シカ	角	〃
10	60A－Xb－683	漁撈刺突具　I類	15.9	0.7		0.7		8.8	シカ	中手骨or中足骨	
11	60A－Xb－677	漁撈刺突具　I類	15.3	0.9		0.3		4.5	シカ	中手骨or中足骨	II－III
12	60C－Xb－296	漁撈刺突具　I類	16.8	0.8		0.4		8.0	シカ	中手骨or中足骨	
13	61AB－Xb－1205	漁撈刺突具　I類	13.8	0.5		0.6		5.3	シカ	中手骨or中足骨	
14	60C－Xb－301	漁撈刺突具　I類	11.1	0.6		0.5		3.9	シカ	角	II
15	60A－Xb－767	漁撈刺突具　I類	11.0	0.6		0.6		5.1	シカ	角	II－III
16	61AB－Xb－1188	漁撈刺突具　I類	7.6	0.6		0.5		2.8	シカ	中手骨or中足骨	II－III a
17	60E－Xb－649	漁撈刺突具　I類	7.8	0.6		0.4		2.5	不明		II－III
18	60A－Xb－688	漁撈刺突具　I類	5.2	0.4		0.4		1.4	不明		
19	61AB－Xb－88	漁撈刺突具　I類	3.5	0.6		0.5		0.9	不明		
20	60B－Xb－147	漁撈刺突具　I類	4.3	0.4		0.4		0.8	不明		
21	61AB－Xb－1203	漁撈刺突具　II類	6.8	0.6		0.6		2.6	不明		II－III a
22	61AB－Xb－1180	漁撈刺突具　II類	8.4	1.5		0.8		7.9	シカ	角	III b
23	60F－Xb－97	漁撈刺突具　II類	(6.8)	1.7		0.7		(6.3) 不明	シカ	角	
24	60D－Xb－281	漁撈刺突具　II類	6.7	1.2		0.5		3.5	不明		
25	60E－Xb－610	漁撈刺突具　II類	(3.9)	1.0		0.6		(2.4)	シカ	角	II
26	61KL－Xb－365	漁撈刺突具　II類	(6.4)	1.2		0.8		(4.2)	シカ	角	
27	60E－Xb－658	漁撈刺突具　II類	15.1	1.8		0.8		(22.3)	シカ	角	
27	60E－Xb－658	漁撈刺突具　II類	14.4	1.4		1.1			ノウサギ		
28	61AB－Xb－1175	漁撈刺突具　II類	14.8	1.3		0.7		12.6	シカ	角	
29	60C－Xb－293	漁撈刺突具　II類	12.3	1.3		0.7		7.7	シカ	角	
30	61AB－Xb－1184	漁撈刺突具　II類	15.0	1.2		0.6		12.1	シカ	角	II－III a
31	60A－Xb－766	漁撈刺突具　II類	15.8	1.4		0.8		14.8	シカ	角	II－III a
32	61AB－Xb－1183	漁撈刺突具　III類	7.6	1.1		0.4		2.4	不明		V－VI
33	60G－Xb－018	漁撈刺突具　III類	7.2	1.3	0.5	0.4	0.5	1.7	不明		II
34	60A－Xb－700	漁撈刺突具　III類	(2.8)	1.0		0.5		1.2	シカ	角	II－III
35	60A－Xb－769	漁撈刺突具　III類	8.1	0.9		0.7		4.7	シカ	角	III－IV
36	61AB－Xb－1188	漁撈刺突具　III類	9.3	0.8		0.6		5.7	シカ	中手骨or足骨	II－III a
37	63DE－Xb－1	漁撈刺突具　III類	7.2	0.8		0.6		3.0	シカ	中手骨or足骨	IV
38	60C－Xb－294	漁撈刺突具　III類	5.0	0.6		0.3		0.7	不明		
39	60E－Xb－603	漁撈刺突具　III類	7.7	0.8		0.8		3.5	シカ	角	II－III
40	60A－Xb－701	漁撈刺突具　III類	(5.9)	1.0	0.5	0.8	0.5	(3.9)	シカ	角	II－III
41	60A－Xb－678	漁撈刺突具　III類	(5.4)	1.2	0.7	0.6	0.4	(2.8)	不明		II－III a
42	61E－Xb－394	漁撈刺突具　III類	(4.3)	1.0	0.6	1.1	0.7	(4.0)	シカ	角	II－IV
43	61E－Xb－384	漁撈刺突具　III類	4.4	0.9	0.3	0.6	0.4	1.9	シカ	角	II－III a
44	63DE－XB－7	漁撈刺突具　III類	3.7	0.6	0.2	3.0	0.2	0.9	シカ	角	III－VI
45	60A－Xb－733	刺突具　I類	15.6	4.2	1.6	1.2	0.5	38.5	イノシシ	尺骨	II－III a
46	61AB－Xb－208	刺突具　I類	13.4	3.6	1.1	0.7	0.4	24.8	シカ	尺骨	III b－IV
47	60E－Xb－620	刺突具　I類	12.1	3.3	0.8	0.7	0.2	16.8	シカ	尺骨	II
48	60A－Xb－732	刺突具　I類	11.5	4.0	0.6	1.1	0.7	25.5	イノシシ	尺骨	
49	60D－Xb－282	刺突具　I類	11.5	3.9	1.0	0.9	0.4	18.8	シカ	尺骨	
50	61AB－Xb－1147	刺突具　I類	11.4	3.3	1.5	1.1	0.9	29.6	イノシシ	尺骨	II－III a
51	60E－Xb－604	刺突具　I類	10.5	3.1	0.8	0.8	0.2	11.9	イノシシ	尺骨	II－III
52	61AB－Xb－1082	刺突具　I類	9.6	3.2	1.1	1.1	0.8	23.0	イノシシ	尺骨	II－III a
53	61AB－Xb－346	刺突具　I類	8.8	3.2	1.2	0.9	0.5	13.6	シカ	尺骨	III b－IV
54	63DE－XB－14	刺突具　I類	9.0	3.4	1.5	1.1	0.5	19.7	イノシシ	尺骨	
55	61C－Xb－11	刺突具　I類	9.1	3.4	1.2	0.8	0.3	19.5	シカ	尺骨	II－III a
56	60D－Xb－267	刺突具　I類	7.6	3.2	1.0	0.8	0.4	15.3	イノシシ	尺骨	
57	60E－Xb－664	刺突具　I類	7.3	3.6	0.7	0.8	0.3	15.3	シカ	尺骨	II－III
58	61AB－Xb－537	刺突具　I類	7.7	2.9	0.7	0.7	0.5	13.6	イノシシ	尺骨	

図	登録番号	種　別	A(縦)	B(横)	C(厚)	D(穴3)	E(穴2)	重量	種	部位	時期
59	60 B－X b－2	剝製具　I 類	6.8	4.3	0.8	1.1	0.5	22.8	イノシシ	尺骨	II～III a
60	60 D－X b－262	剝製具　II 類	14.8	2.9	0.4	0.3	0.4	15.3	イノシシ	腓骨	II～III
61	60 D－X b－265	剝製具　II 類	14.8	2.9	0.7	0.2	0.5	8.9	不明		II～III
62	60 D－X b－277	剝製具　II 類	(17.4)	2.5	1.2	1.4	1.2	(49.6)	シカ	角　角座	
63	60 D－X b－266	剝製具　II 類	20.5	1.7	0.6	1.5	0.5	46.8	シカ	角	II～III
64	61 A B－X b－1195	剝製具　II 類	(17.0)	2.0	1.2	2.1	1.4	48.9	シカ	角　角座	
65	61 A B－X b－1192	剝製具　II 類	16.8	1.5	0.9	1.0	0.7	24.1	シカ	角	II～III a
66	60 E－X b－605	剝製具　II 類	(9.9)	2.0	1.2	1.1	1.1	(13.0)	シカ	角	II～III
67	61 E－X b－412	剝製具　II 類	14.4	2.1	0.8	0.6	0.6	20.5	イノシシ	腓骨	
68	61 A B－X b－1196	剝製具　II 類	11.8	1.2		0.8		(16.6)	シカ	角	
69	61 K L－X b－339	剝製具　II 類	6.7	1.1		0.4		3.3	不明		IV
70	60 A－X b－715	剝製具　II 類	7.5	1.4		0.7		4.1	不明		
71	61 I－X b－130	剝製具　II 類	8.3	1.7		0.2		6.2	不明		
72	60 A－X b－716	剝製具　II 類	9.0	1.1		0.9		8.9	不明		III～IV
73	60 A－X b－707	剝製具　II 類	9.8	1.1		0.9		7.2	シカ	角	III～IV
74	61 A B－X b－241	剝製具　II 類	(3.5)	1.5		0.5		(1.4)	不明		V～VI
75	63 D E－X B－280	剝製具　II 類	4.1	2.2		0.7		5.5	シカ	中手骨	V
76	61 A B－X b－133	剝製具　II 類	6.1	1.2		0.4		4.3	不明		
77	60 E－X b－629	剝製具　II 類	5.5	1.9		0.7		4.1	不明		
78	60 E－X b－630	剝製具　II 類	11.5	1.8		0.5		12.7	不明		II～III
79	60 E－X b－595	剝製具　II 類	9.5	2.1		0.4		13.7	不明		II～III
80	61 E－X b－398	剝製具　II 類	11.0	3.4		1.2		15.0	イノシシ	歯	II～III a
81	61 A B－X b－434	剝製具　II 類	13.7	6.2		1.5		56.6	シカ	下顎骨	II～III a
82	60 C－X b－292	ヘラ	13.2	1.5		0.8		11.3	シカ	角	
83	60 D－X b－268	ヘラ	11.2	1.8		0.8		14.6	シカ	角	
84	60 E－X b－586	ヘラ	16.2	2.0		0.4		30.7	不明		II～III
85	61 E－X b－404	ヘラ	16.3	1.7		0.6		29.8	シカ	角	II～IV
86	60 E－X b－621	釣り針	(5.5)	1.2		0.5		(4.3)	イノシシ	歯	
87	61 E－X b－391	釣り針	(4.7)	1.3		0.7		(3.2)	シカ	角	II～III a
88	61 A B－X b－517	釣り針	(6.4)	0.9		0.8		(5.0)	イノシシ	歯	
89	61 A B－X b－732	釣り針	(6.2)	0.8		0.6		(3.9)	イノシシ	歯	
90	60 A－X b－709	釣り針	(1.5)	0.9		0.2		(0.3)	不明		
91	60 E－X b－614	釣り針	(3.6)	0.6		0.2		(0.4)	不明		II～III
92	60 E－X b－667	領形骨角製品	10.1	1.4		1.6		12.1	シカ	角	II～III
93	61 E－X b－405	領形骨角製品	2.8	1.6		1.5		8.2	不明		II～III a
94	60 D－X b－270	領形骨角製品	2.6	1.6		1.6		6.4	不明		
95	61 A B－X b－1191	領形骨角製品	(6.3)	(1.6)		1.4		(8.7)	シカ	角	II～III a
96	60 A－X b－703	結錘車	4.2	4.1		0.5		10.3	シカ	角座	
97	60 E－X b－631	結錘車	4.2	4.1		1.2		13.2	シカ	角座	
98	61 A B－X b－1182	結錘車	5.3	4.8		0.9		18.7	不明		
99	60 A－X b－721	縫い針	3.8	0.1		0.1		0.1	不明		II～III
100	60 A－X b－729	縫い針	3.9	0.1		0.1		0.1	ウニ	棘	II～III
101	60 A－X b－723	縫い針	2.6	0.1		0.1		0.1	不明		
102	61 K L－X b－364	縫い針	2.1	0.1		0.1		0.1以下	不明		
103	60 A－X b－724	縫い針	1.4	0.1		0.1		0.1	不明		II～III
104	60 A－X b－725	縫い針	1.5	0.1		0.1		0.1以下	ウニ	棘	II～III
105	60 E－X b－375	縫い針	1.5	0.1		0.1		0.1以下	不明		II～III
106	60 A－X b－735	磨石状骨角器	6.9	4.1		1.9		71.4	シカ	角座	
107	60 B－X b－1	磨石状骨角器	4.9	4.6		2.3		40.5	シカ	角座＋角＋S k	II
108	61 A B－X b－78	磨石状骨角器	5.8	5.8		2.2		71.7	シカ	角片	
109	60 D－X b－280	磨石状骨角器	6.6	6.6		2.5		91.1	シカ	角座	
110	60 C－X b－305	磨石状骨角器	11.8	3.4		1.4		27.5	シカ	歯	II
111	61 A B－X b－1193	垂飾　I 類	13.2	2.4		0.6		32.2	イノシシ	歯	III b～IV
112	61 A B－X b－1193	垂飾　I 類	13.0	2.1		0.7		25.1	イノシシ	歯	III b～IV
113	60 E－X b－637	垂飾　I 類	6.4	1.3		1.4		9.6	イノシシ	歯	II～III
114	60 E－X b－636	垂飾　I 類	6.1	1.7		1.0		9.1	イノシシ	歯	II～III
115	60 B－X b－150	垂飾　I 類	6.6	2.1		1.6		22.1	イノシシ	歯	II
116	60 B－X b－149	垂飾　I 類	9.2	2.2		1.2		20.0	イノシシ	歯	
117	61 I－X b－206	垂飾　IV 類	12.0	1.3		0.3		5.1	不明		
118	60 E－X b－622	垂飾　IV 類	5.3	1.3		0.2		5.3	不明		
119	60 A－X b－692	垂飾　I 類	2.7	2.1		0.2		1.9	不明		II～IV
120	60 E－X b－657	垂飾　I 類	5.5	1.8		0.9		11.9	不明	歯	
121	60 E－X b－617	垂飾　II 類	2.8	0.8		0.7		0.9	トリ	不明	
122	60 E－X b－618	垂飾　II 類	2.1	0.8		0.8		0.8	トリ	不明	
123	60 E－X b－616	垂飾　II 類	1.9	0.5		0.4		0.5	不明		II～III
124	60 C－X b－121	垂飾　II 類	2.5	1.1		1.0		1.5	トリ	不明	II
125	60 E－X b－615	垂飾　II 類	1.9	0.5		0.5		0.5	不明		II～III
126	60 C－X b－121	垂飾　II 類	2.8	1.1		0.9		1.6	トリ	不明	II
127	60 E－X b－619	垂飾　II 類	2.9	1.1		0.8		1.7	トリ	不明	

図	登録番号	種　別	A(幅)	B(横)	C(横)	D(厚さ)	E(厚さ)	重量	種	部位	時期
128	60E－Xb－623	垂飾　II類	1.1	1.0		1.0		0.6	トリ	不明	II～III
129	60E－Xb－646	垂飾　II類	1.5	1.3		1.0		0.9	トリ	不明	II
130	60E－Xb－648	垂飾　II類	1.8	1.0		0.9		0.9	トリ	不明	II～III
131	60GH－Xb－10	垂飾　III類	1.0	1.0		1.0		0.3	サカナ サメ	椎骨	
132	61C－Xb－109	垂飾　III類	2.7	1.1		2.6		4.3	サカナ	椎骨	IV
133	60A－Xb－734	垂飾　III類	2.3	0.9		2.3		3.4	サカナ	椎骨	
134	60D－Xb－279	垂飾　III類	2.9	1.6		2.9		11.8	サカナ	椎骨	II～III
135	60C－Xb－304	垂飾　III類	2.9	1.5		3.1		8.2	サカナ	椎骨	II～III
136	60E－Xb－640	垂飾　III類	3.2	1.5		3.1		9.9	サカナ	椎骨	II～III
137	60E－Xb－639	垂飾　III類	3.9	2.5		3.9		16.0	サカナ	椎骨	
138	60A－Xb－350	垂飾　III類	2.1	2.0		2.2		0.6	サカナ サメ	椎骨片	
139	60A－Xb－693	加工品　II類	(6.8)	1.7		0.4		(6.0)	不明		II～III a
140	60E－Xb－641	加工品　II類	(3.1)	1.6		0.2		(0.8)	不明		II～III
141	60A－Xb－702	加工品　II類	(3.8)	0.5		0.4		(0.7)	不明		III～IV
142	61I－Xb－212	加工品　II類	(6.4)	0.8		0.7		(2.9)	不明	肋骨	
143	61E－Xb－402	加工品　III類	8.2	3.3	3.3	3.5	2.9	84.1	シカ	角	
144	61AB－Xb－1181	加工品　I類	20.3	1.0		0.6		15.3	シカ	中手骨or中足骨	II～III a
145	60A－Xb－728	加工品　I類	(7.3)	0.7		0.7		(4.1)	シカ	角	II～III
146	60A－Xb－727	加工品　I類	(2.7)	0.6		0.5		(1.4)	シカ	角	II～III
147	60A－Xb－720	加工品　I類	(1.9)	0.5		0.3		(0.5)	不明		III～IV
148	60A－Xb－343	加工品　I類	(2.6)	0.5		0.4		(0.6)	不明		II～III
149	60A－Xb－719	加工品　I類	(6.8)	0.5		0.3		(1.3)	不明		II～III
150	61E－Xb－411	加工品　I類	(10.2)	0.6		0.6		(2.9)	不明		II～III a
151	60A－Xb－718	加工品　I類	(10.0)	0.5		0.4		(2.2)	不明		III～IV
152	60A－Xb－694	加工品　I類？		1.0		0.3			不明		II～IV
153	60A－Xb－689	加工品　I類？	(6.2)	1.0		0.3		(2.7)	不明		
154	60E－Xb－609	加工品　I類？	(10.0)	0.9		0.6		(5.3)	シカ	角	II～III
155	60A－Xb－691	不明	3.9	0.7	0.4	0.6	0.4	1.5	不明		
156	61AB－Xb－1202	不明	4.6	2.1		0.5		5.1	不明		
157	60E－Xb－647	不明	(5.2)	1.3		0.9		(2.2)	シカ	角	II
158	60A－Xb－731	不明	4.7	0.9		1.1		2.8	イノシシ	歯	V～VI
159	60A－Xb－347	不明	5.5	1.4		1.5		6.2	シカ	角	III～IV
160	60D－Xb－264	不明	6.1	2.0		1.3		6.2	シカ	角	
161	61KL－Xb－366	不明	(6.8)	0.2		0.1		(0.1)	不明		
162	60D－Xb－272	不明	3.8	0.9		0.4		1.2	シカ	角	
163	61C－Xb－108	不明	4.0	0.9		0.9		2.5	不明		
164	60E－Xb－632	不明	7.0	0.6		0.6		2.7	イノシシ	歯片	
165	60E－Xb－624	不明	2.6	0.7		0.4		0.7	イノシシ	歯	
166	61I－Xb－208	不明	8.9	2.3		1.2		14.7	シカ	角	IV
167	61AB－Xb－1208	加工品　III類	(31.2)	(4.1)	(3.1)	(1.7)		(167.4)	不明		II～III a
168	61KL－Xb－367	加工品　IV類	(17.7)	(6.2)		(2.7)		(55.0)	シカ	尺甲骨	IV
169	60E－Xb－345	加工品　IV類	(5.8)	(3.0)		(1.7)		(12.5)	シカ	尺甲骨	
170	61AB－Xb－885	加工品　IV類	(9.7)	(3.4)		(0.9)		(9.3)	シカ	尺甲骨	II～III a
171	61AB－Xb－1174	加工品　IV類	(24.5)	(11.5)		(9.2)		(353.1)	イノシシ	下顎骨	II

目次

第Ⅵ部　金属製品

第１章　資料の分類

１．銅鐸…54

（1)出土状況…54　(2)各部の特徴…54

２．小形仿製鏡…55

３．銅鏃・その他…57

（1)銅鏃…57　(2)その他…57

金属製品出土遺構一覧表…57

金属製品一覧表…58

第１章　資料の分類

１．銅鐸

（１）出土状態

１の銅鐸は『朝日遺跡Ⅰ』1991で記載されたとおり、Ⅴ期に掘削された二重の環濠と同じくⅤ期の方形周溝墓ＳＺ245の間より出土した。銅鐸は土坑内に横位の状態で埋納されていたため、上位側にあたる鰭、Ａ面の身の一部、Ｂ面の身の1/4が欠損し、Ｂ面の右半分が内側に湾曲して数片に割れていた。これらの欠損や湾曲は、埋納後の攪乱による打撃によって起こったものであるが、破面の観察によると、ごく最近のものではないと考えられる。また、器面全体には薄くではあるが埋土や植物根が強固に付着していた。そのため、器壁が剥離する恐れがあるためクリーニングが細部まで行えない部分が何ヶ所かあり、文様などが不明瞭な部分がみられる。

（２）各部の特徴

銅鐸の大きさは、鐸高46.3cm、身高33.2cm・身幅（現状26.3cm）、底部直径（現状23.4cm）・底部短径16.2cm、鈕高13.1cm・鈕孔高3.5cm・鈕孔幅3.8cm、舞長径（現状15.0cm）・舞短径11.6cm、鰭最下部幅2.9cmを測る。

鈕　鈕はＡ面・Ｂ面とも、外縁２区・菱環・内縁の４区に分かれる。

Ａ面の外縁には外区・内区があって、相対する鋸歯文が配されており、それぞれの鋸歯文内には平行斜線が交互方向につけられている。

Ｂ面の外縁にも外区・内区があり、鋸歯文が配されるが、Ａ面と違って両区のものとも内側を向く。鋸歯文内には交互方向の平行斜線がつけられる。

鋸歯文につけられた平行斜線のうち、Ａ面の外区の右から１番目と２番目、内区の右から４番目と５番目、Ｂ面の外区の右から７番目と８番目、内区の２番目と３番目、左から７番目と８番目が同方向に走っている。また、Ａ・Ｂ面とも最下端の鋸歯文は、通常の半単位になっている。

菱環はＡ・Ｂ面とも、外縁と内縁と内縁の境にやや幅のある突線を配することによって、上下に区切られ、さらにそれが３本１単位の突線５組によって４分割されている。各区内には、それぞれ異方向の綾杉文が施されている。

内縁には４単位の重弧文がある。Ａ面の重弧文はそれぞれ開放することなく菱環側で閉じるが、Ｂ面の弧文のうち外側の幾本かは、そのまま菱環につながっている。

舞　舞には２個の円形の舞孔があり、中央部に鈕脚壁がみられる。

鰭　Ａ・Ｂ面とも、上端４本、下端３本の突線によって区切られ、双耳の飾耳が上端につく。内側には鈕の外縁の外区と続くように内向する鋸歯文が施され、鋸歯文内には交互方向の平行斜線がつけられている。ただ、この平行斜線も鈕の場合と

第15図　鏡鐸銅鐸（左）と内面（右）

同様、A面では最下位のものから上に4番目と5番目、8番目と9番目のものが、B面では8番目と9番目のものが同方向を向く。

身　A・B面とも、2本も突線（最下位のものは3本）によって区切られた縦帯3帯、横帯3帯によって4区に分けられ、さらにその下に下辺横帯がある。縦・横帯には斜格子文、下辺横帯には異方向の平行斜線をもつ上向きの鋸歯文がつけられている。縦・横帯の関係は、上下部分では横帯が縦帯を切っているが、中央交差部では斜格子文そのものに切り合いはなく、縦帯と横帯の交差する区画の斜格子文とそれに隣接する上下左右の区画の斜格子文の方向はそれぞれ異なっている。

型持孔は、上位の区画に2ケ所、下端に2ケ所みられる。

身には所々に鋳造時の湯廻りが悪くて生じたと思われる文様の不鮮明な部分がみられ、特に下位も1/3程度には巣が多く発生している。

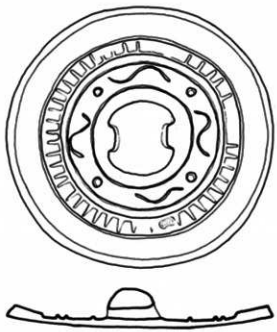
内面　下位3㎝程のところに1条の内面突帯が巡り、真土かと思われる白い細粒の砂が部分的に固着していた。

2．小形仿製鏡（第16・17図）

面径71㎜、厚さ約2㎜の小形の仿製鏡。縁端部は部分的に欠落するも、全体に残存状況は良好である。保存環境による植物痕跡が鏡背部分に認められ、また錆で覆われているため文様の確認に支障をきたしている。そのため、鏡背の文様はX線写真により推定している部分が多い。鏡面は2㎜前後の僅かな反りを形成している。現状での色調は10YR5/3（標準土色帳　日本色彩研究所）にぶい黄褐色。

鏡背はまず、中央に高くて大きな半球形の鈕があり、1条の圏線による鈕座が存在する。鈕の径20㎜、鏡面からの高さ10㎜を測る。鈕孔は半円形（6㎜×5㎜・6㎜×4㎜）で、使用による摩耗が一方向に偏る。内区の文様帯には四方に小さな径4㎜ほどの乳がみられ、その間を細線によるS字状文が4ケ確認できる。その外には2条の圏線が巡り、さらに櫛歯文帯が配される。外区は平縁で、段を構成し徐々に厚さを増しつつ縁部に至る。上面幅8㎜、端部の厚さ3㎜を測る。重量62.6ｇ。

本鏡は大きく「四葉鏡」系の系統と考えられるものであり、「S字状文仿製鏡」の範疇でとらえることができるであろう(1)。ただし、高倉A類とするよりも、鏡背文様の構成や時期的な問題を考慮すると、別系統を想定したほうがよい。なお、面径



第16図　小形仿製鏡

および鍵・内区の配置から極めて類似する資料を捜すと、四乳が欠損し、やや圏線が増加する資料であるが、栃木県茂原愛宕塚古墳出土[2]のものが考えられよう。

ところで鏡の出土状況は、61H区の古墳時代に所属する竪穴住居ＳＢ110に近接した包含層中より出土している。さらに、出土地点がＳ字状口縁甕Ｃ類古段階の資料がみつかっているＳＢ109を代表とする古墳時代住居群に含まれることから、朝日Ⅷ期を大きく降るものではないであろう。このことは愛宕塚古墳の造営時期からも矛盾はない。[3]したがって、庄内式期新段階から布留式期古段の中に所属時期を置くことができるであろう。

（1）高倉洋彰1981「Ｓ字状文仿製鏡の成立過程」『九州歴史資料館研究論集』7

（2）久保哲三1991『下野茂原古墳群』

（3）愛宕塚古墳の造営時期は、出土した土器から濃尾平野廻間Ⅲ式前半期を中心とすると考えてよかろう。またＳＢ109出土土器は廻間Ⅲ式２段階の資料であり、ほぼ同様な時期となる。ただ鏡背文様の構成からは、朝日遺跡出土品がより古い要素を残す資料となろう。

第17図　小形仿製鏡

3．銅鏃・その他

（1）銅鏃

Ⅰ類（2～10・20）　柳葉形に近い形を呈するもので、茎部との境が明瞭である。2～6は肩部が丸く、7～9は明瞭な肩部がみられる。2は肩部に最大径があり、先端部に至るまで丸みを帯びており、直線的な他のものとは異なる。また、身部の下端が回状に丸く抉られている。8は全体に細かい凹凸があり、荒れた器面をなしている。9は身及び茎部ともに短い。ただ、茎部に関しては欠損後も再使用していた可能性がある。10は、身部欠損後も鏃形に再加工して使用している。

Ⅱ類（11～13）　身部と茎部の境界がはっきりせず、鈍角をなすもので、身部が柳葉形をなす。12・13はⅠ類に類似する身部に短い茎部が付く。11は身部の最大径が肩部にあるもので、茎部は長い。

Ⅲ類（14～16）　身部が柳葉形をなすもので、無茎である。

三稜鏃（17）　17は、断面形が正三角形をなす三稜鏃になる。

（2）その他（19～22）

18は薄手の青銅製品の端部で、左・上部が破損している。下部には水平方向に肥厚している部分があり、器面は細かい凹凸があり、やや荒れている。破面である左・上面とも、よく磨滅しており、破損後に手を加えられた可能性もある。

25は内側にゆるやかに湾曲する青銅製品で、銅環か銅鋲になるものと考えられる。器面はやや荒れている。

19も青銅製品で、やや湾曲する長い三角形の板の底辺に突起部があり、凹面には軸状の突起部がつく。

22は中央部が肥厚する楕円形の青銅製品で、両端に孔が開けられている。

23・24は刀子または刀の先端部にあたるもので、遺存状態は極めて脆くなっている。

19～21は弥生時代～古墳時代になる。

ドーム状の半円形をなす21は中世の包含層より出土した。

金属器出土遺構一覧表

図版	出　土　遺　構
1	89B　埋納土坑
2	61KL　検出
3	61KL　検出
4	61KL　検出
5	63G　検出
6	89A　検出
7	61KL　検出
8	SDXⅦ
9	60A　検出
10	61KL　検出
11	89B　検出
12	61H　検出
13	61KL　検出

図版	出　土　遺　構
14	61KL　検出
15	61KL　検出
16	61KL　検出
17	61H　検出
18	61H　検出
19	60A　検出
20	60H　SK44
21	60A　検出
22	63DE　検出
23	61E　SD02
24	SDV
25	89D　検出
第16図1	61H　検出

金属器一覧表

（単位はcm、g）

図版	登録番号	種別	A（縦）	B（横）	C（横）	D（厚さ）	E（厚さ）	重量	時期
1	89B－M－1	銅鐸	46.3	(15.0)	(26.3)	11.6	16.2		V
2	61KL－M－1	銅鉄	3.3	0.9	0.3	0.4	0.3	3.6	
3	61KL－M－2	銅鉄	3.4	0.9	0.4	0.4	0.3	3.0	
4	61KL－M－3	銅鉄	3.0	0.8	0.4	0.4	0.4	3.0	
5	63GH－M－1	銅鉄	3.2	0.8	0.3	0.4	0.4	2.5	
6	89A－M－1	銅鉄	3.3	1.0	0.3	0.4	0.3	2.9	
7	61KL－M－4	銅鉄	3.3	0.8	0.3	0.4	0.3	2.6	
8	89B－M－1	銅鉄	3.6	1.0	0.3	0.4	0.3	3.6	VI
9	60A－M－1	銅鉄	1.9	0.8	0.2	0.4	0.2	1.2	
10	61KL－M－5	銅鉄	3.2	0.9	0.4	0.2	0.3	1.5	
11	89B－M－2	銅鉄	3.7	0.8	0.3	0.3	0.2	1.8	
12	61J－M－1	銅鉄	3.2	0.9	0.3	0.2	0.2	1.6	
13	61KL－M－6	銅鉄	2.8	0.7	0.2	0.4	0.2	1.5	
14	61KL－M－7	銅鉄	2.0	0.7		0.3		1.0	
15	61KL－M－8	銅鉄	1.9	0.6		0.2		1.1	
16	61KL－M－9	銅鉄	2.1	0.7		0.3		0.9	
17	61J－M－2	銅鉄	4.4	0.7	0.5	0.6	0.4	4.7	
18	61J－M－3	不明	(3.5)	(3.1)		(0.2)		(10.5)	
19	60A－M－3	不明	8.9	1.1	2.3	0.2	0.5	9.0	
20	60H－M－1	不明	(2.4)	0.4	0.3	0.2		(0.5)	中世～近世
21	60A－M－2	不明	1.2	1.7 R		0.1		1.6	中世
22	63D－M－1	不明	3.6	1.7		1.4		21.2	
23	61E－M－1	刀子or刀	(9.3)	3.0		0.8		(22.6)	III b
24	61I－M－1	刀子	(3.8)	1.0		0.4		(2.3)	V
25	89D－M－1	銅鉄or銅環	(2.2)	(0.5)		(0.2)		(1.2)	
第16図1	61KL－M－10	小型仿製鏡	7.1	7.1		0.2		62.6	

付載　朝日遺跡遺構対照表

SD

調査区	遺構番号	遺跡番号	時期	備考
	SD1	60A　SD07 60BCD　SD07 60EFG　SD14 61AB　SD01	Ⅴ	
	SDⅡa	60BCD　SD02－B 60EFG　SD13	Ⅱ～Ⅲa	SX03より内
	SDⅡb	60BCD　SD02 61AB　SD20（19）	Ⅱ	SX03より東 上層Ⅲa 中層Ⅱ～Ⅲa
	SDⅢ	60A　SD06 60BCD　SD03（12） 61AB　SD29 61C　SD10	Ⅱ～Ⅲa	
	SDⅣa	60A　SD10 60BCD　SD06 61AB　SD21 61C　SD09	Ⅱ	60A以西 上層Ⅲa
	SDⅣb	60A　SD10	Ⅱ	60A以東 上層Ⅲa
	SDⅤ	60A　SD01，03 61D　SD02 61HI　SD01 61J　SD01	Ⅴ	
	SDⅤb	61D　SD01	Ⅴ	
	SDⅤc	61D　SD04	Ⅴ	
	SDⅥ	60A　SD01，03 61D　SD02 61HI　SD01 61J　SD01	Ⅵ	西堀削
	SDⅥb	61D　SD01	Ⅵ	
	SDⅦ	60A　SD04 61J　SD02	Ⅴ古～Ⅵ	
	SDⅧ	61AB　SD02 61C　SD07	Ⅷ	
	SDⅨ	61D　SD03	Ⅴ古～Ⅵ	
	SDX－1	61KL　SD01 89A　SD11b	Ⅱ	
	SDX－2	61KL　SD01 89A　SD11b	Ⅲ	
	SDXI	61KL　SD01 89A　SD11a	Ⅳ	
	SDXII	62L　SK73	Ⅴ	
	SDXIII	61M　SD01 61N　SD03，07 63A　SD01	Ⅱ～Ⅲ	
	SDXIV	61M　SD37 61N　SD01 63A　SD01	Ⅴ～	
	SDXV	62L　SD01 89B　SD01	Ⅴ	
	SDXVI	62L　SD01 89B　SD01	Ⅵ	
	SDXVII	62L　SD02 89B　SD02	Ⅴ	
	SDXIX	61Q　SD18 61RS　SD11	Ⅶ～	
56A	SD01	56A　SD07		
	SD02	56A		
	SD03	56A　SD08，005		
	SD04	56A　SD01		
	SD05	56A　SD02	Ⅱ以前	
	SD06	56A　SD03	Ⅱ以前	
	SD07	56A　SD04		
	SD08	56A　SD08	Ⅶ以降	
56B	SD01	56B　SD14	Ⅰ	
	SD02	56B　SD12		
	SD03	56B　SD15		
60A	SD01	60A　SD02	Ⅵ	
	SD02	60A　SD09	Ⅳ	
	SD03	60A　SD05	Ⅳ	
	SD04	60A　SD12	Ⅵ	
60B	SD01	60BCD　SD23	Ⅴ	
	SD02	60BCD	Ⅱ～Ⅲ	
	SD03	60BCD　SD11	Ⅱ～Ⅲ	
	SD04	60BCD　SD10	Ⅱ～Ⅲ	
	SD05	60BCD　SD09	Ⅱ～Ⅲ	
60E	SD01	60EFG　SD01	Ⅱ～	西堀削出
	SD02	60EFG　SD12	Ⅱ	
	SD03	60EFG　SD11	Ⅲa	
	SD04	60EFG　SD10	Ⅱ～Ⅲ	
	SD05	60EFG	Ⅱ	
	SD06a	60EFG　SD02	Ⅱ	
	SD06b	60EFG　SD09	Ⅱ	
	SD06c	60EFG　SD04	Ⅱor Ⅴ	
	SD07	60EFG　SD04	Ⅲ	上層Ⅵ～
	SD08	60EFG　SD03	～Ⅴ	
	SD09	60EFG　SD05		
60H	SD01	IAW－60D　SD14		

調査区	遺構番号	出土遺物番号	時期	備考
60H	S D02	I A W～60D S D15		
60 I	S D01	60A S D08	II	
61A	S D01	61A B S D40		
	S D02	61A B S D06	II 末～III a	
61C	S D01	61C S D12	II	
	S D02	61C S D06	III b	
61E	S D01	61E F S D30	II～III a (III b～IV)	上層III b～IV
	S D02	61E F S D01	III b	
	S D03	61E F S D02	III b	
	S D04	61E F S D05, 18 61G S D04	III b	
	S D05	61E F S D18		
	S D06	61E F S D18		
	S D07	61E F S D17	III a	
	S D08	61E F S D09	III a	
	S D09	61E F S D10	III a	
	S D10	61E F S D37		
	S D11	61G S D11	III	
	S D12	61G S D08	II	
	S D13	61G S D09		
	S D14	61G S D05	II～III a	
	S D15	61G S D10	II～III a	
	S D16	61G S D19	III b	
	S D17	61G S D23 61 I S D13	II～III b	
	S D18	61G S D24 61 I S D08	II～III a	
	S D19	61 I S D04	IV	
	S D20	61 I S D06	II	上層III a～IV
	S D21	61E F S D01	V	上層VI～
	S D22	61E F S D02	V	上層VI～
	S D23	61E F S D03, 10 61G S D01	V	内側削VI～
61H	S D01	61H S D05	III a	
	S D02	61 J S D03	V	
61T	S D01	61U S D07	III a 以前	
62A	S D01	62A S D17	VI	
	S D02	62A S D13		
62B	S D01	62B S D03	VI～	
62C	S D01	61C S D01	VI	
62D	S D01	62D S D04	VI	
62E	S D01	62E S D01	VI	
62H	S D01	62H S D01		
62 J	S D01	62 J S D02	VI	
63B	S D01	63B S D01	II～III a	
	S D02	63B S D03		
	S D03	63B S D02	IV	
	S D04	63B S D20	IV	63B 攪乱
63D	S D01	63D E S D01	V	
	S D02	63D E S D02	V 末～VI	
	S D03	63D E S D04	V	
	S D04	63D E S D07	IV	
	S D05	63D E S D06	III b～IV	
	S D06	63D E S D08	II	
	S D07	63D E S D03	III b～IV	
63 J	S D01	63 J S B13	V	
63N	S D01	63N		
	S D02	63N S D10	II	
	S D03	63N S D13	II	

S X

調査区	遺構番号	出土遺物番号	時期	備考
	S X 1	60A 60B 60E 61A B A (礼野)	III b 末	
56A	S X01	56A S K006 (土器棺)	IV	
60A	S X01	60A S D11	III a 最古	上層IV
	S X02	60A (S D10北側溝)		
60B	S X01	60B C D S D24	IV	
	S X02	60B C D (S D07北部)	V 出下	
	S X03	60B C D (S D02と S D02－B の特構部)		
60E	S X01	60E F G (土器棺)	III a	
	S X02	60E F G (土器棺No 2)	II	
	S X03	60E F G S D09	II・III a 最古～	
	S X04	60E F G B A (礼野)	V～	
61A	S X01	61A B S D05	III b 末	
	S X02	61A B S D04	III b 末	
	S X03	61A B S X01	IV	
	S X04	61A B A (礼石)	III 以外	
61E	S X01	61E F S K57	III b	
	S X02	61G S D02	III b	
	S X03	61G S D03	III b～IV	上層IV～V
61H	S X01 a	61 I (S D01部分)		
	S X01 b	61 I (S D01部分)		
	S X02	61 J	III 以前	上層IV～V
	S X03	61H B A	八功	
	S X04	61H B A	八功	
61M	S X01	61M (土器棺)	III b	

断 調 査 区	断 遺 構 番 号	出 遺 物 番 号	時 期	備 考
	S X02 a	61M (北群)	弥生後期後半 ～ 5 c 代	
	S X02 b	61M (北群)	弥生後期後半 ～ 5 c 代	
61T	S X01	61U S K03 (土器棺)	III a ?	
62A	S X01	62A		
	S X02	62A		
	S X03	62A S B01		
63A	S X01	63A S X01	縄文	
63B	S X01	63B S D203 S K215	II ～III a	
63D	S X01	63D E S K05	V	
63G	S X01	63G H [D E G H] S D101	IV ～ V	

S E

断 調 査 区	断 遺 構 番 号	出 遺 物 番 号	時 期	備 考
61H	S E01	61 I S E02	IV	
	S E02	61 I S E03	IV	
	S E03	61 I S E01	IV	
	S E04	61 I J [5] S E01	IV	
62C	S E01	62C S E01		
62H	S E01	62H S E01		
62 I	S E01	62 I S K01	VI	I 層焼土
62 J	S E01	62 J S K01	VI ?	

S A

断 調 査 区	断 遺 構 番 号	出 遺 物 番 号	時 期	備 考
60B	S A01	60B C D S K54 P226 233 227 221	III a 最古	
	S A02			
	S A03		II ?	
	S A04		II ?	
61A	S A01	61A B P27	II or III a	
61C	S A01	61C P36 46 37	II	
61D	S A01	61D P95 99 236	II or III	
	S A02	61D S K136 P378 383 384 385 388 389 603	II or III	
61E	S A01	61G P68 71 75 76 66 50 49 46 74 62 61	II or III b	
	S A02	61 I P238 241 212 196 201	II or III b	
	S A03	61 I P189 190 191 221 224 181 179 177 172 185 170	II or III b	
	S A04	61 I P146 144 134 124 123 126 127	II or III b	
61H	S A01	61K L [1] S K17 11 21 02 P27 21 20 6 4 1	V	
61N	S A01	61R S	II	
62A	S A01	62A P61 62 63 64 77 40 39 66	IV ?	
62E	S A01	62E P 6 7 8 9 10 11 12	VI	
63A	S A01	63A P 5 6 7 10 3 1	II	
63G	S A01	63G [A] S K108 117 106 124 [D] S K101 111	IV	

S H

断 調 査 区	断 遺 構 番 号	出 遺 物 番 号	時 期	備 考
60B	S H01	60B C D S A01	II or III a	
61C	S H01	61C P296 36 34 33 32 24 26 23 17 3	II	
61D	S H01	61D P319 324	II	
	S H02	61D P492 488	II	
	S H03	61D P501 502 503 504 505	II	
61T	S H01	61T U	VI	
	S H02	61T U		
62H	S H01	62H P 6 7 8 9 10	VI	
	S H02	62H P 1 2 3 4 5	VI	
	S H03	62H P 5 17	VI	

図版

図版

第Ⅳ部　木製品

1……1～4　2……5・6　3……7～11
4……11～16　5……17～26　6……27～29
7……30～33　8……34～36　9……37～39
10……40～43　11……44～47　12……48～52
13……53～56　14……57～59　15……60～62
16……63～68　17……69～74　18……75～80
19……81～88　20……89～94　21……95～98
22……99～104　23……105～108　24……109・110
25……111～115　26……116～118　27……119～123
28……124～131　29……132～138　30……139～142
31……143～151　32……152～159　33……160～169
34……167～179　35……180～186　36……187～190
37……191～194　38……195～197　39……198～202
40……203～205　41……206～208　42……209～213
43……214～220　44……221～229　45……230～235
46……236～240　47……241～247　48……248～256
49……257～263　50……264～272　51……273～281
52……282～287　53……288～299　54……300～305
55……306～308　56……309～314　57……315～317
58……318～320　59……321　60……322～326
61……327・328　62……329～333　63……334～337
64……338～342　65……343～346　66……347～356
67……357～372　68……373～382　69……383～392
70……393～402　71……403～408　72……409～413
73……414～418　74……419～423

第Ⅴ部　骨角製品

75……1～12　76……13～26　77……27～44
78……45～59　79……60～68　80……69～81
81……82～95　82……96～110　83……111～120
84……121～143　85……144～166　86……167～170
87……171

第Ⅵ部　金属製品

88・89・90……1　91……2～17　92……18～25

写真図版

第Ⅳ部　木製品

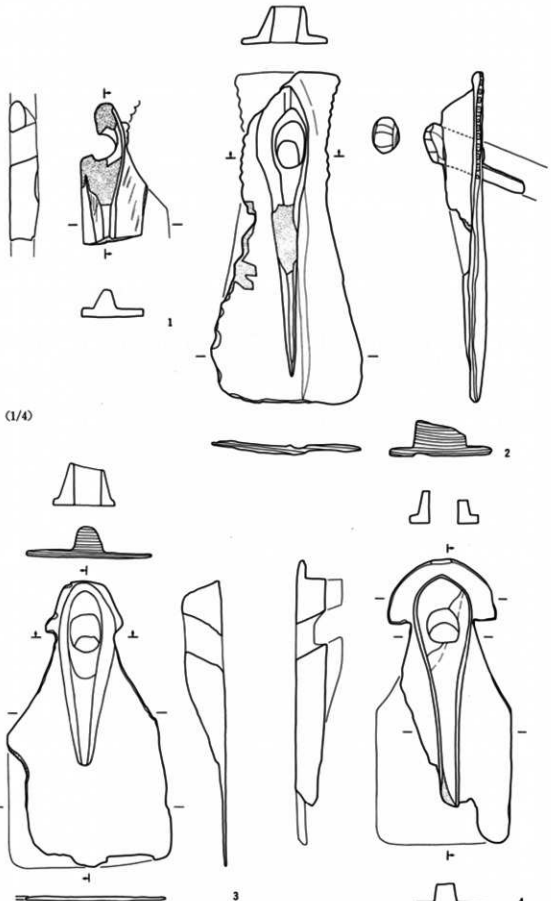
4……2～7・10・12・18・24
5……5・6・10・24・30～33・37
6……44～46・53・54・56～59
7……60・62・63・65・71・74・76・79・80
8……81・82・84・85・89・91・96・97・100～102・105
9……124・125・127・130・131・139・141・142・145
169・175
10……156・158・169・175・187・196・197・201～204
206・208
11……217・222・226・229・232・234・243・247・244
296・297・300・301・304・305
12……303・307・308・316～318・324
13……322・323・325～328

第Ⅴ部　骨角製品

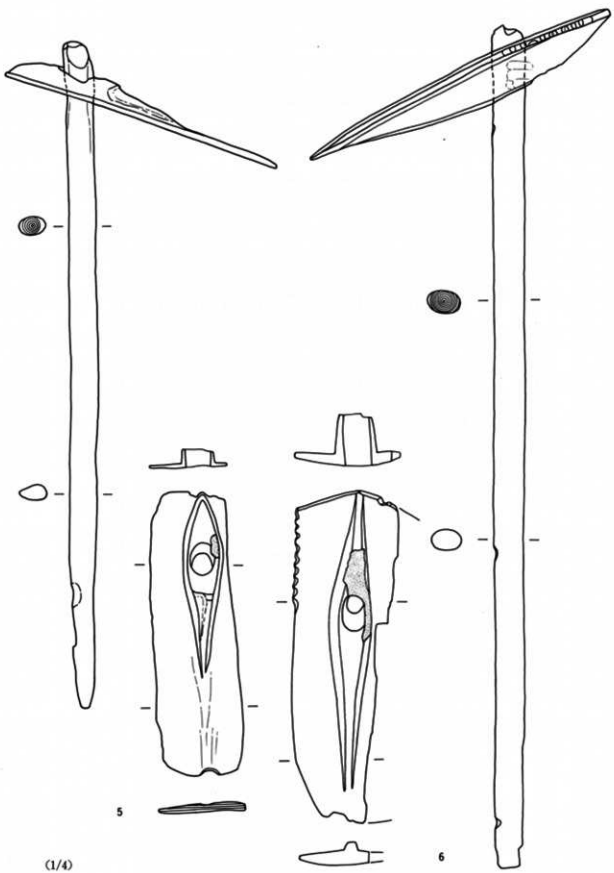
14……1～20
15……22～31
16……32～51・53～59
17……60～63・65・67・70～73・76～78・80・81・92・95
18……82～91・96～106・108・110
19……111～120
20……121～137・139・140・142・144～152
21……167～171
22……第14図1～3

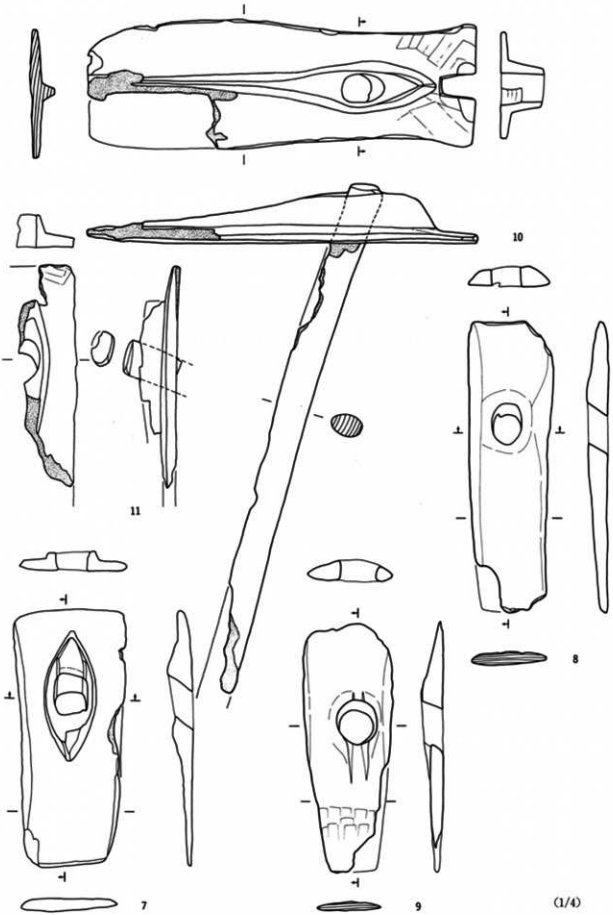
第Ⅵ部　金属製品

1～3……1
22……2～18・23・25
23・24・25・26……出土状態写真

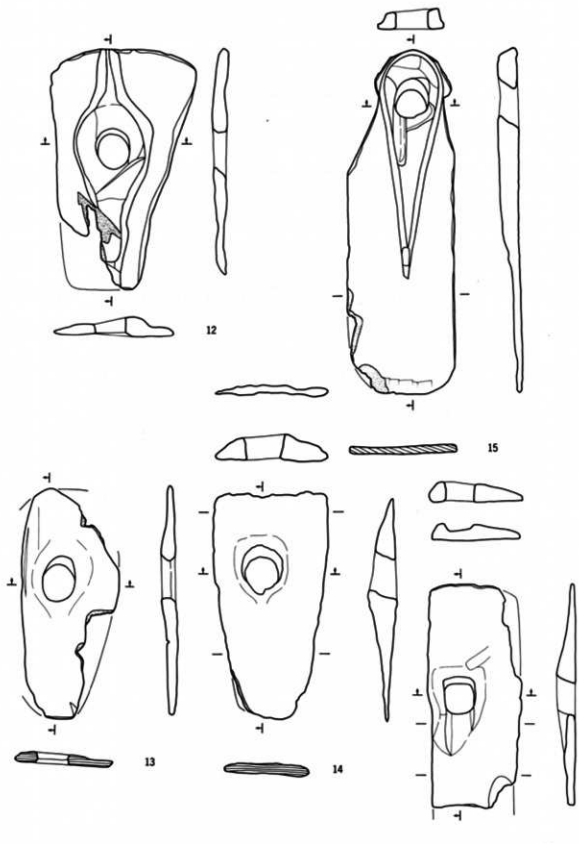

(1/4)
1
2
3
4

図版 2

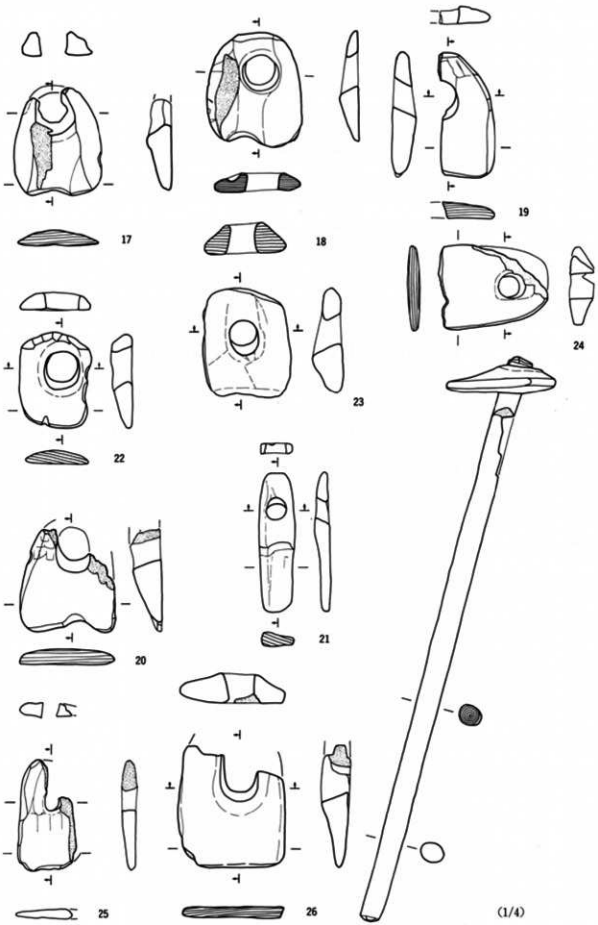


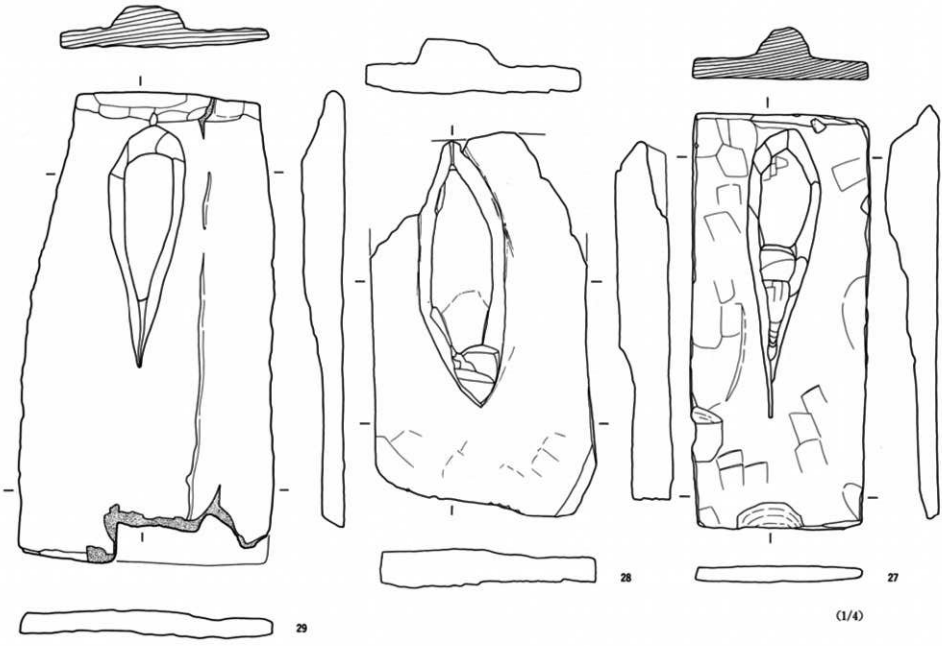

10
11
8
7
9
(1/4)

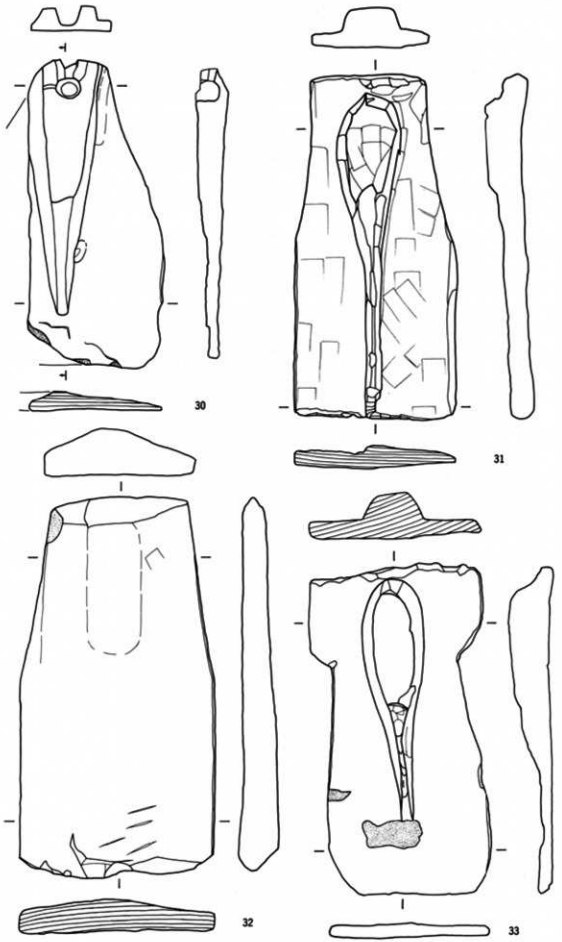
図版 4



(1/4)

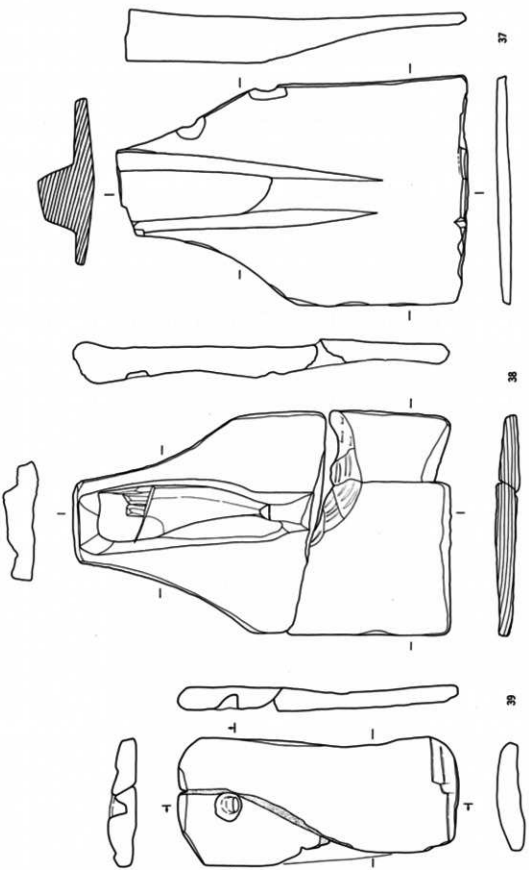

17
18
19
22
23
24
20
21
25
26
(1/4)


29
28
27
(1/4)

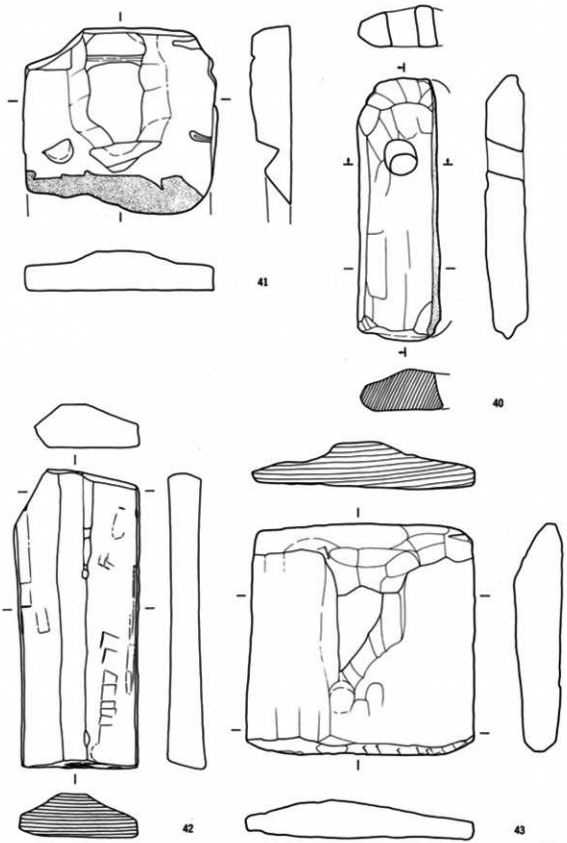


(1/4)

図版 8


37
38
39
(1/4)

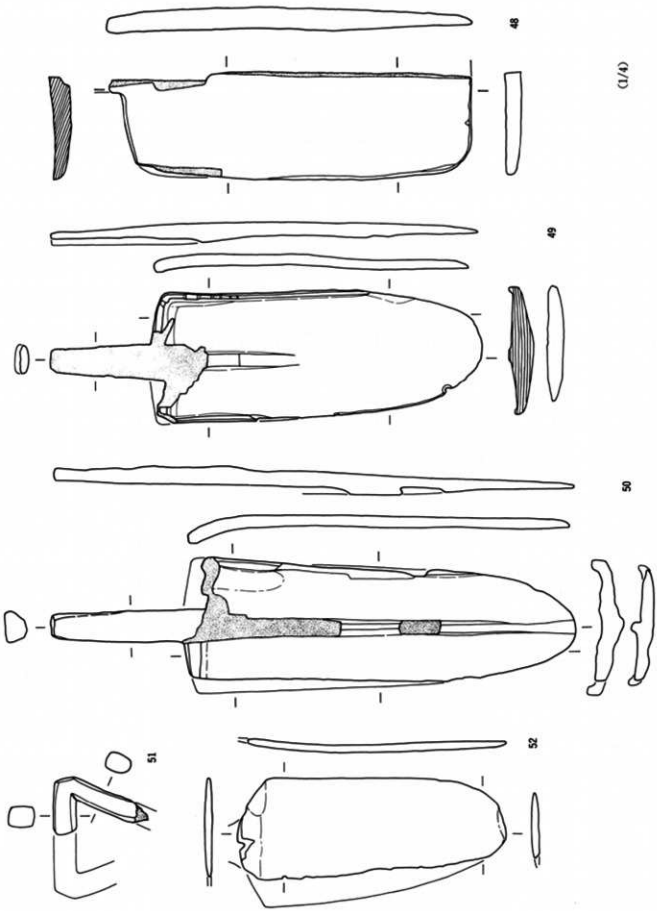
図版 10

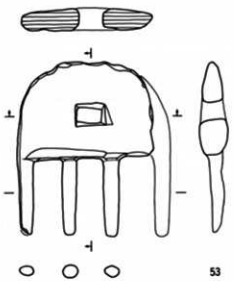


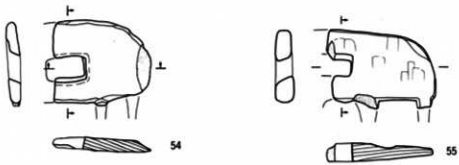
(1/4)

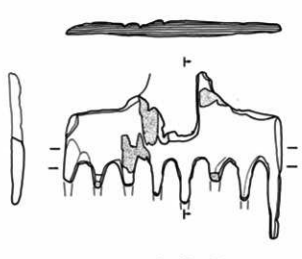
44
45
46
47
(1/8)

図版 12



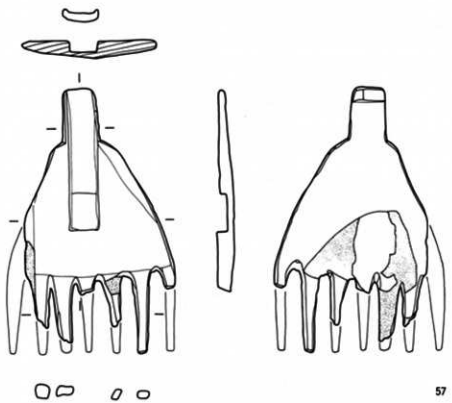


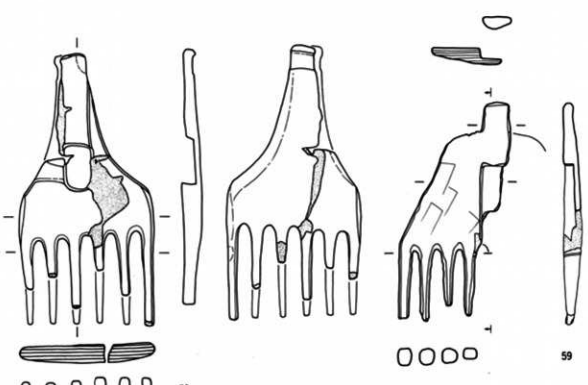




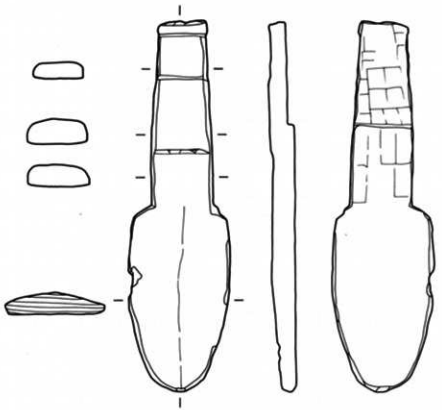
(1/4)

図版 14

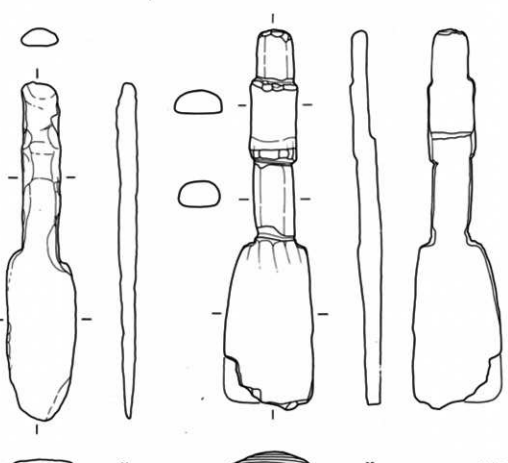




(1/4)

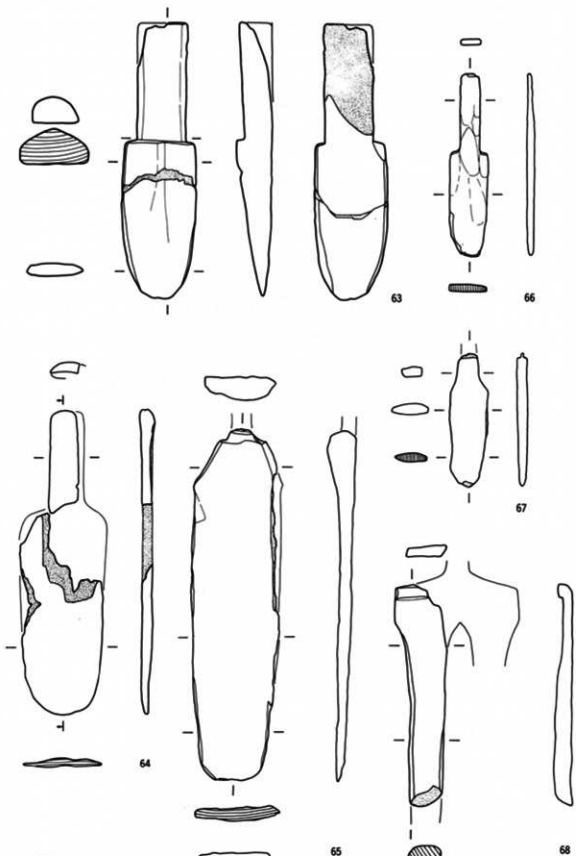


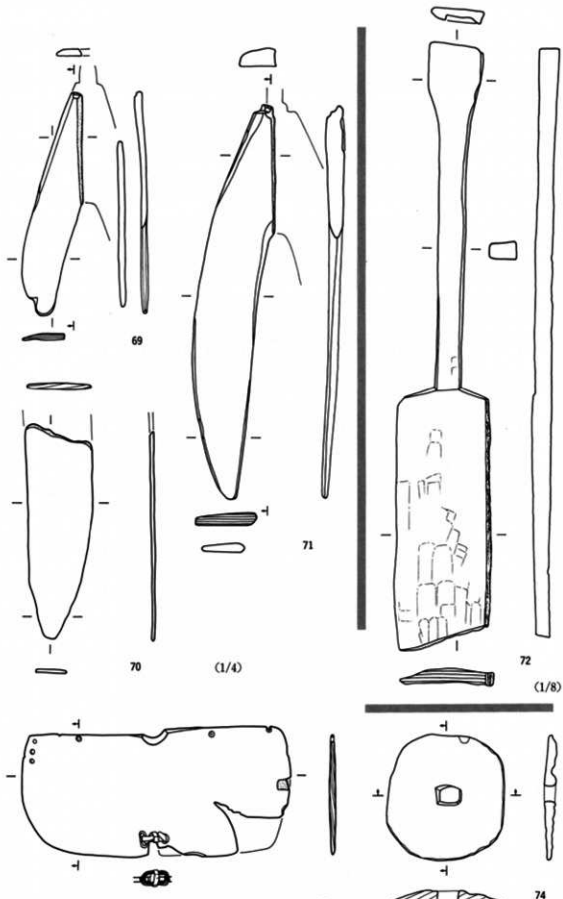
60



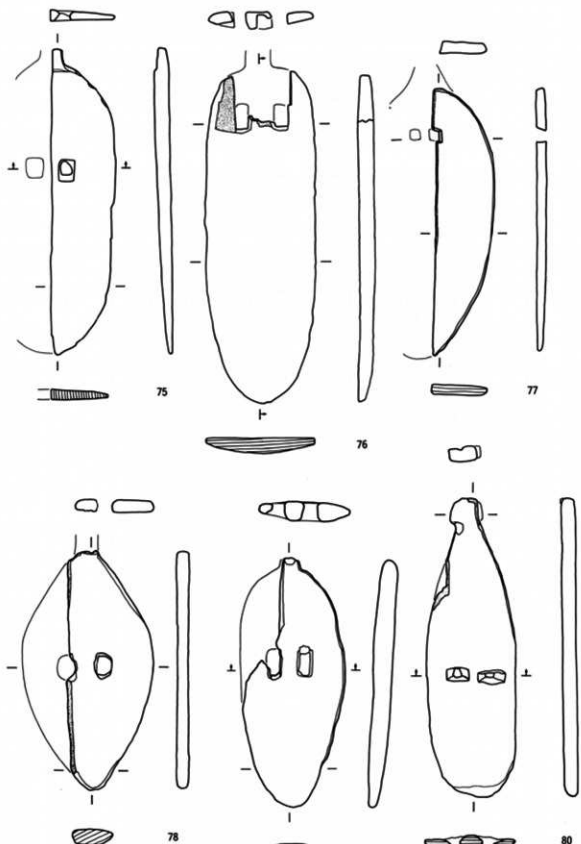
61 62 (1/4)

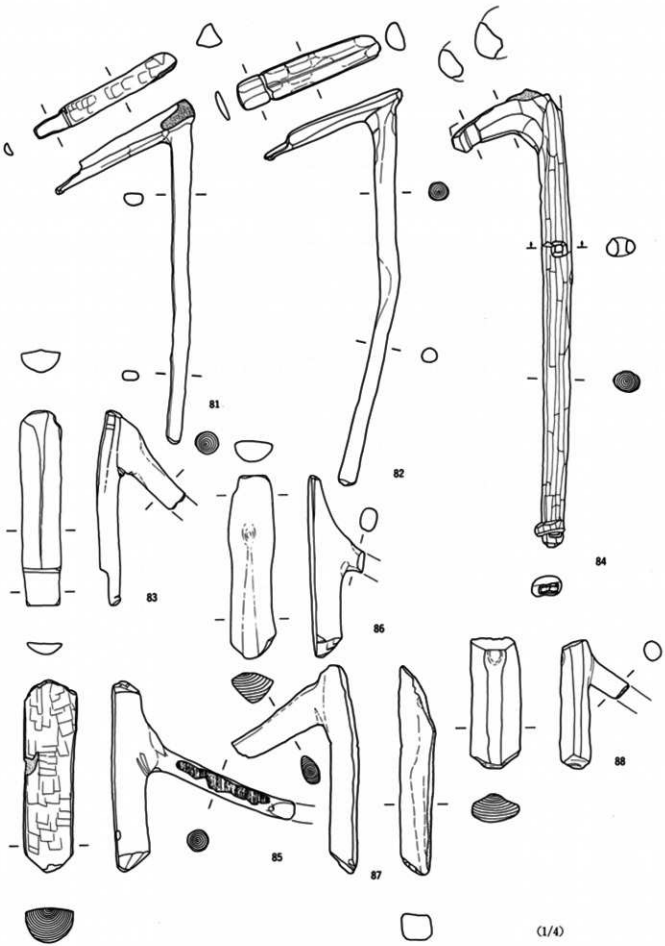
図版 16



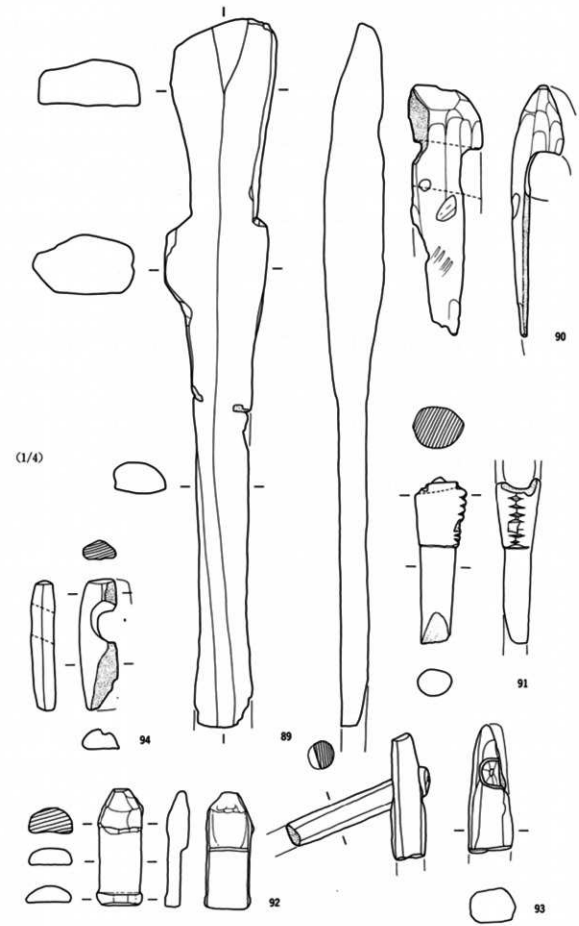

69
70
(1/4)
71
72
(1/8)
73
74

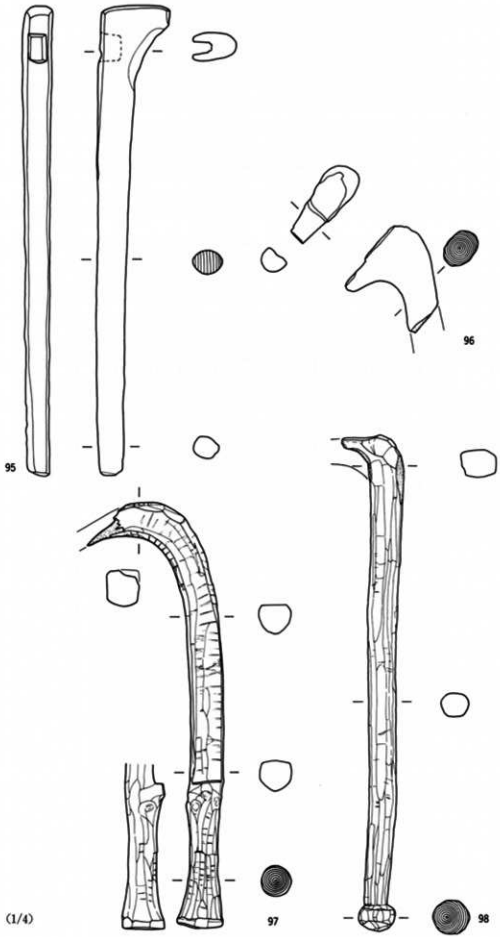
図版 18



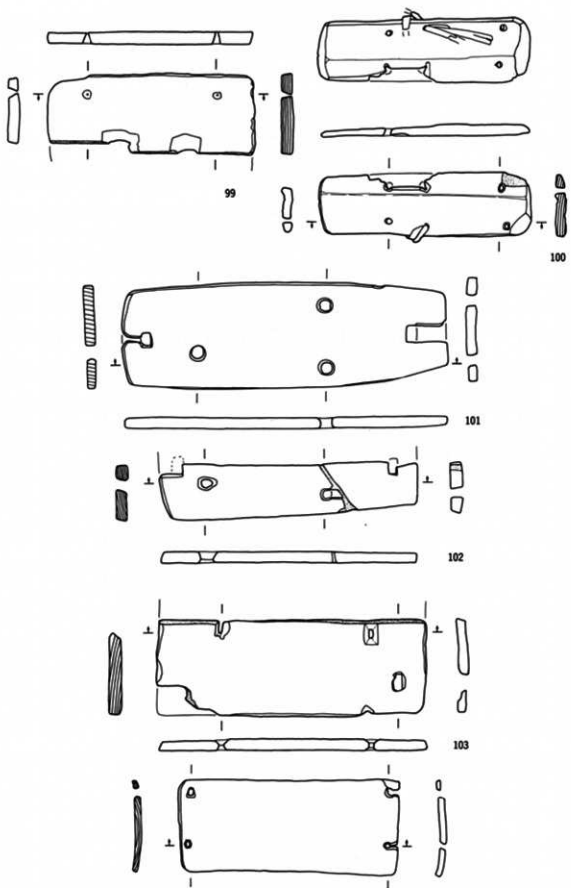

81
82
84
83
86
88
85
87
(1/4)

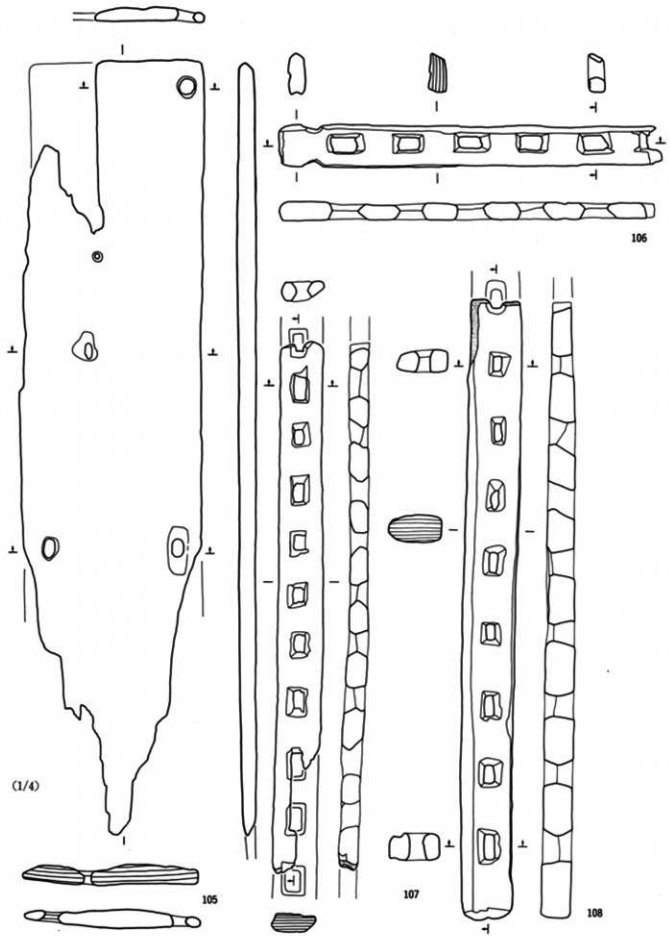
図版 20



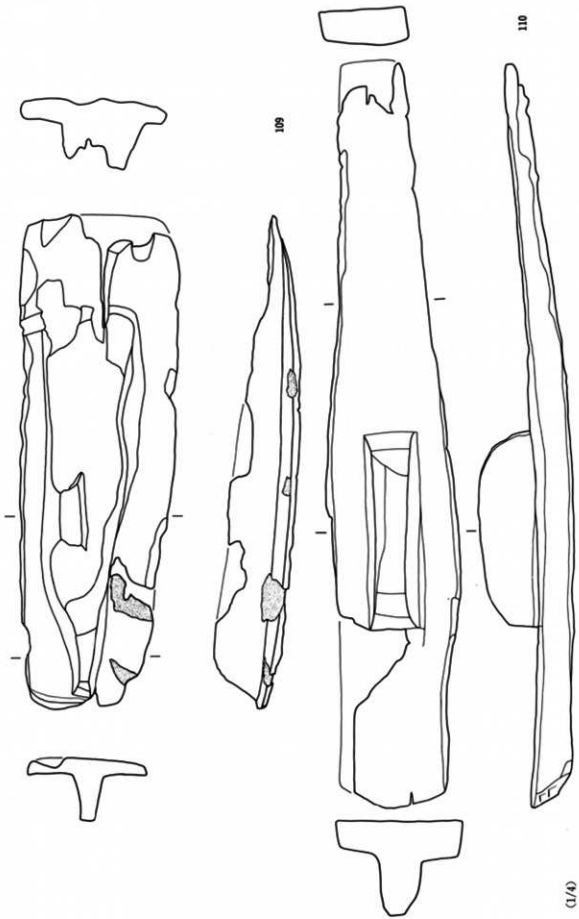

95
96
97
98
(1/4)

図版 22



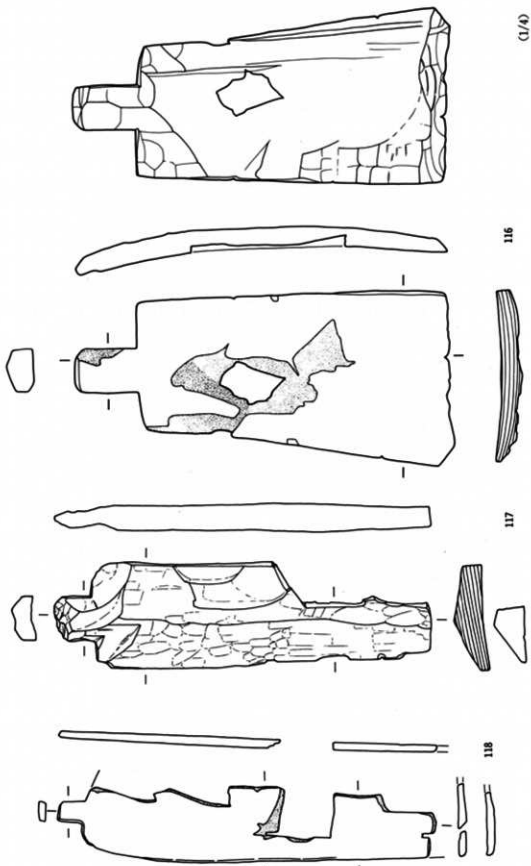

(1/4)
105
106
107
108

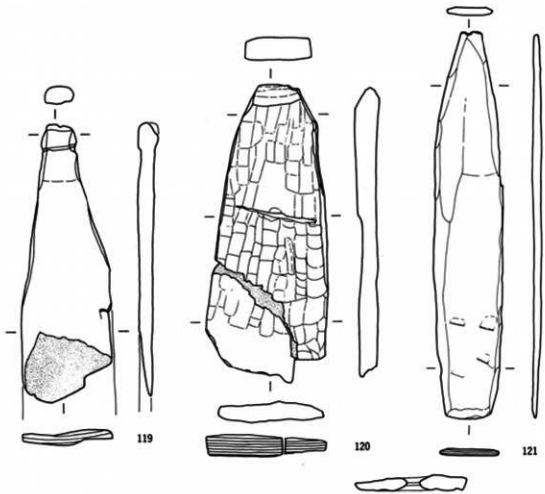
図版 24

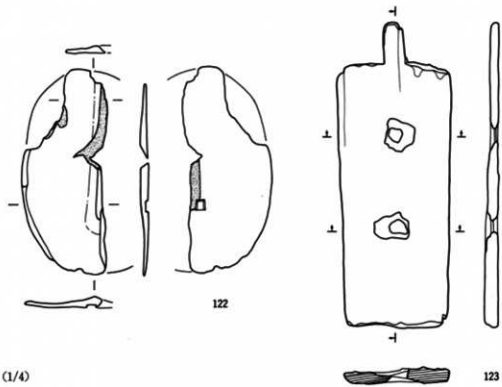


111
112
113
114
115
(1/4)

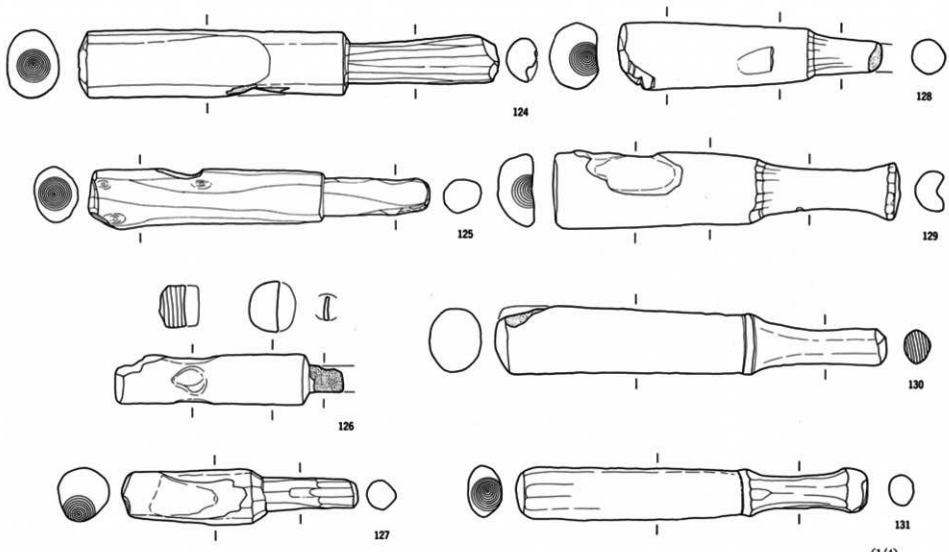
図版 26







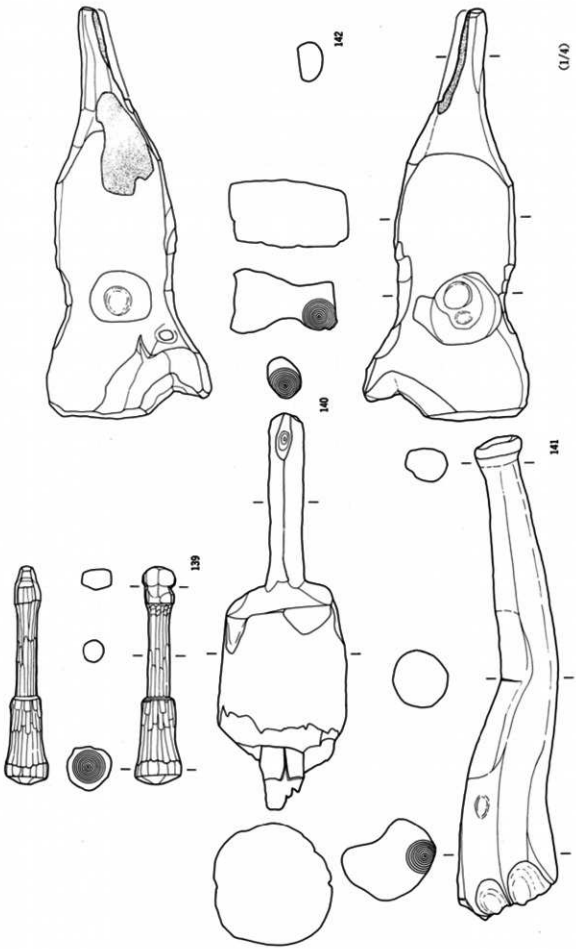
(1/4)

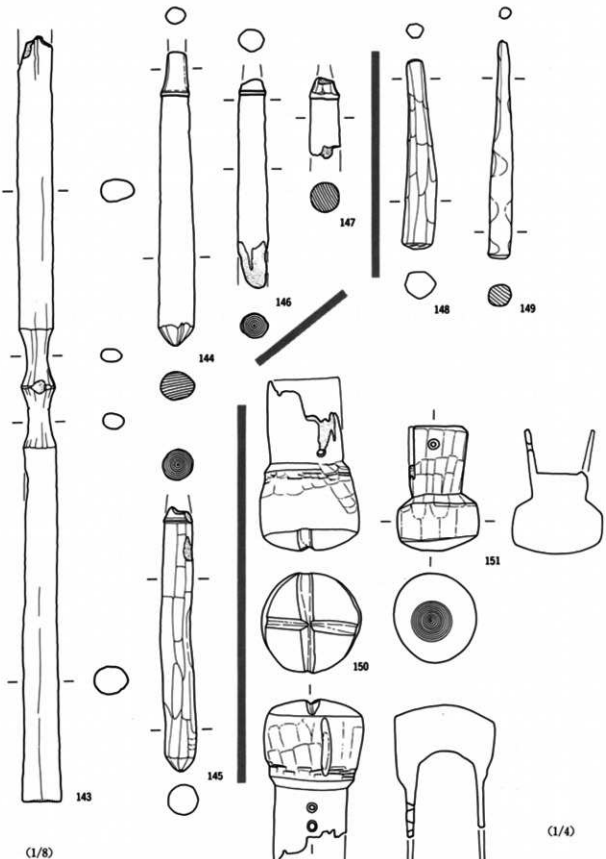


(1/4)

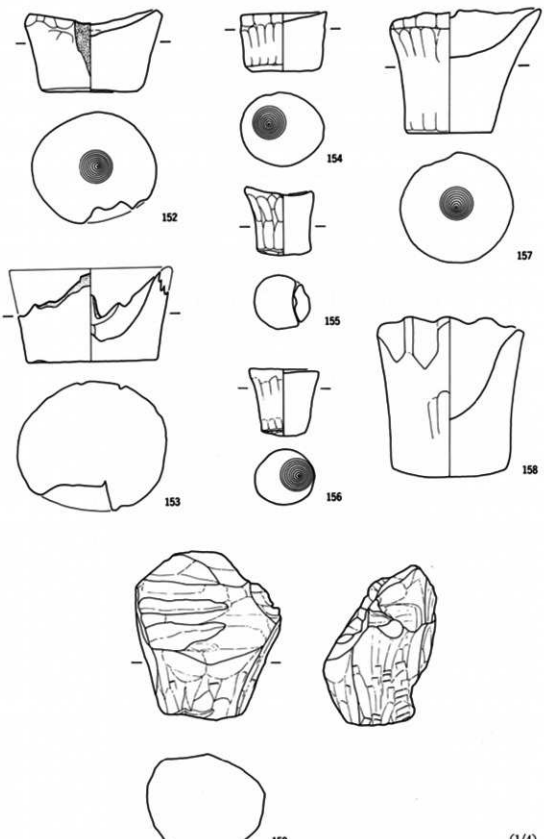
(1/4)
132
133
134
135
136
137
138

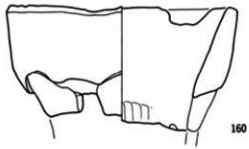
図版 30

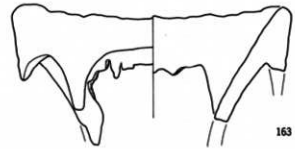



143
144
145
146
147
148
149
150
151
(1/8)
(1/4)

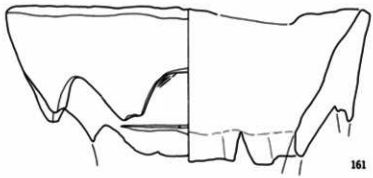
図版 32

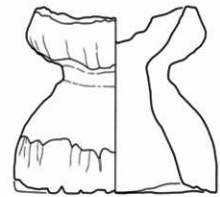


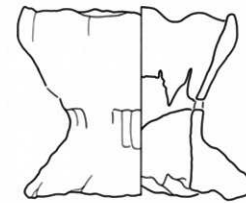

160

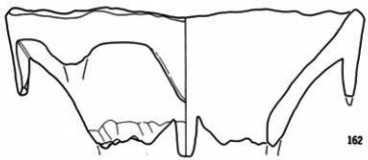

163

165


161


164

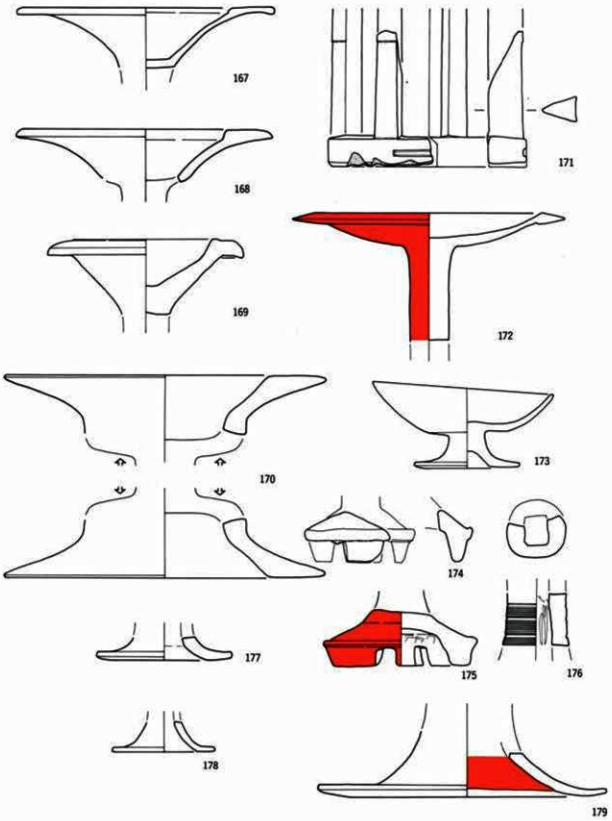

166


162

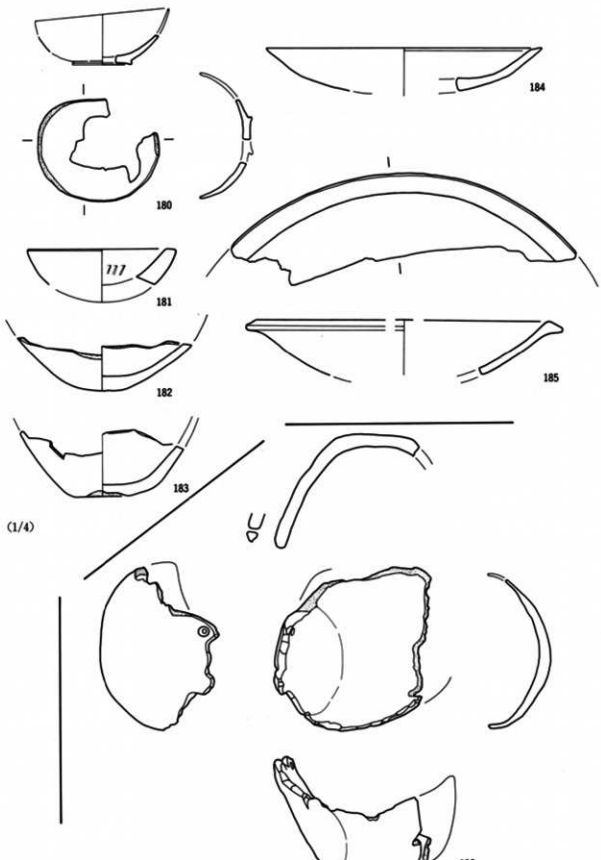
(1/8)

図版 33

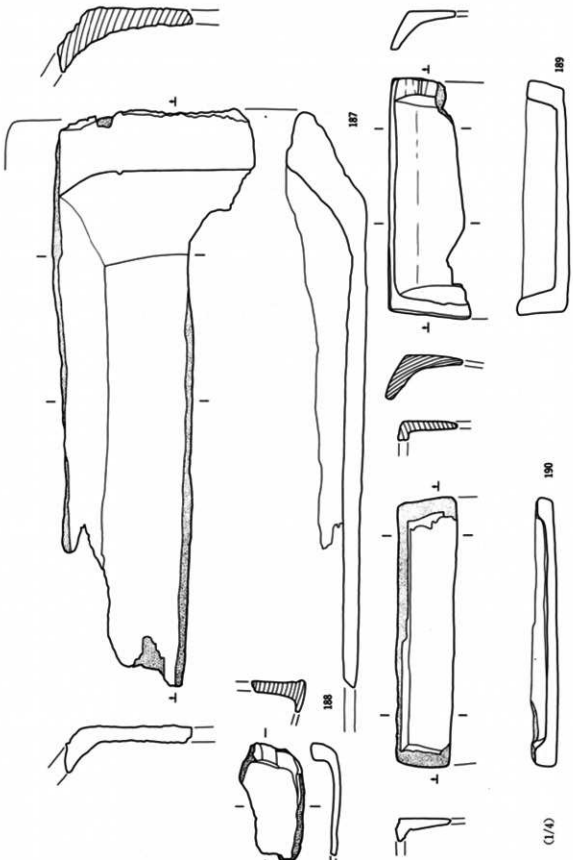
図版 34



(1/4)

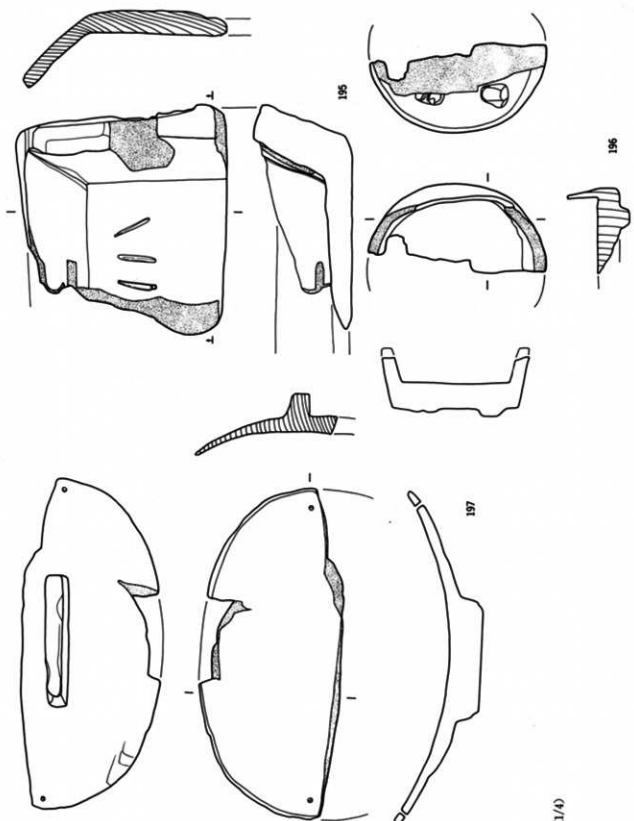

180
181
182
183
184
185
186
(1/4)
(1/4)

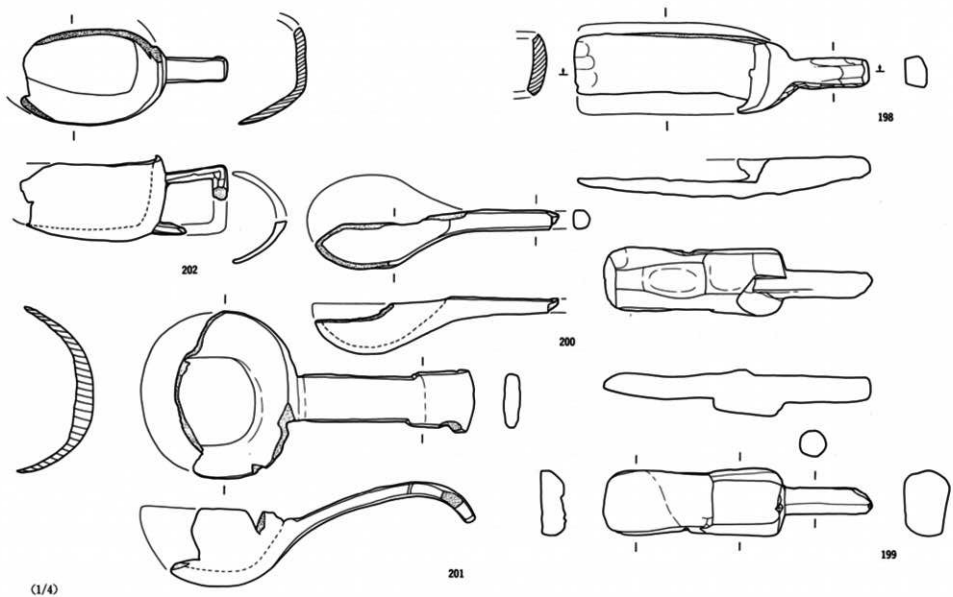
図版 36



191
192
193
194
(1/4)

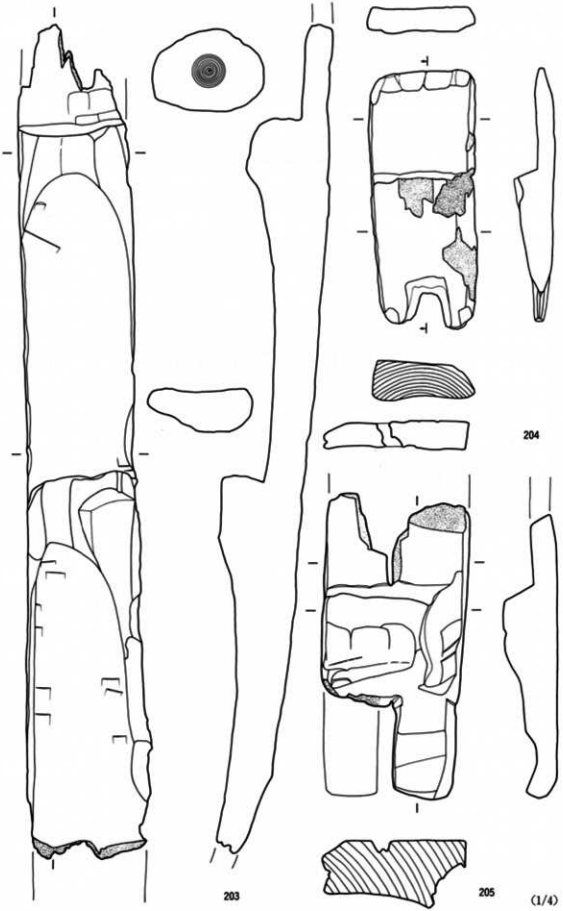
図版 38

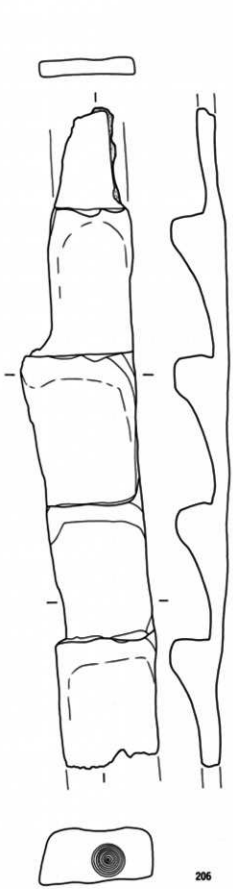




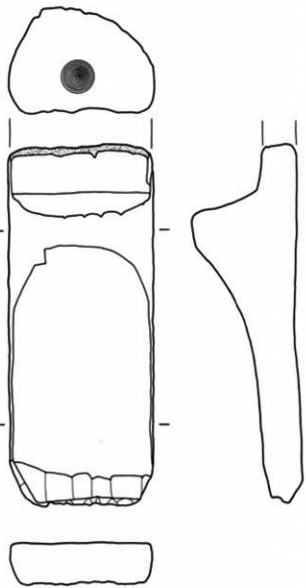
図版 39

図版 40

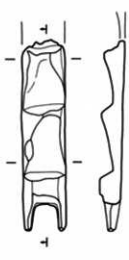




206



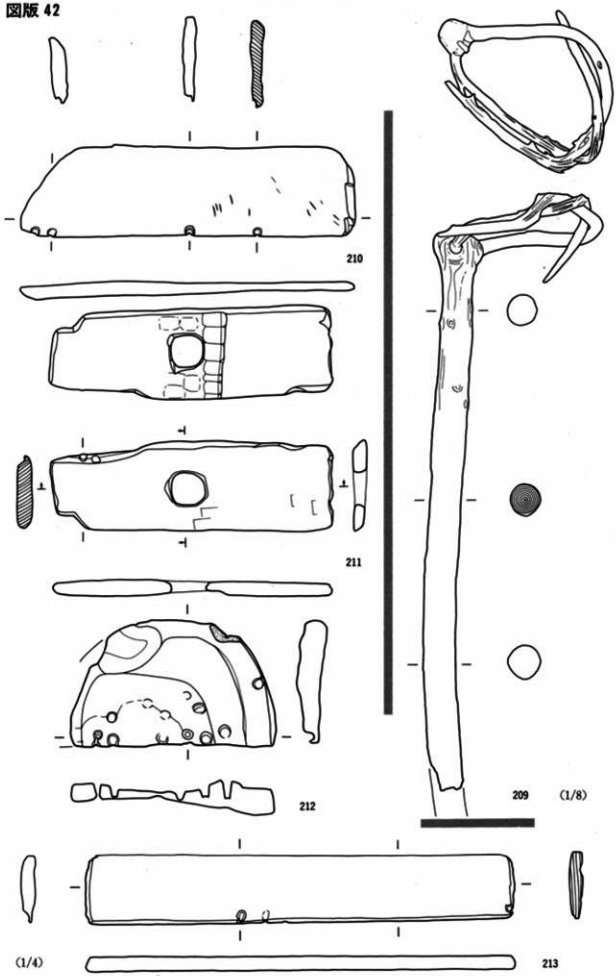
207

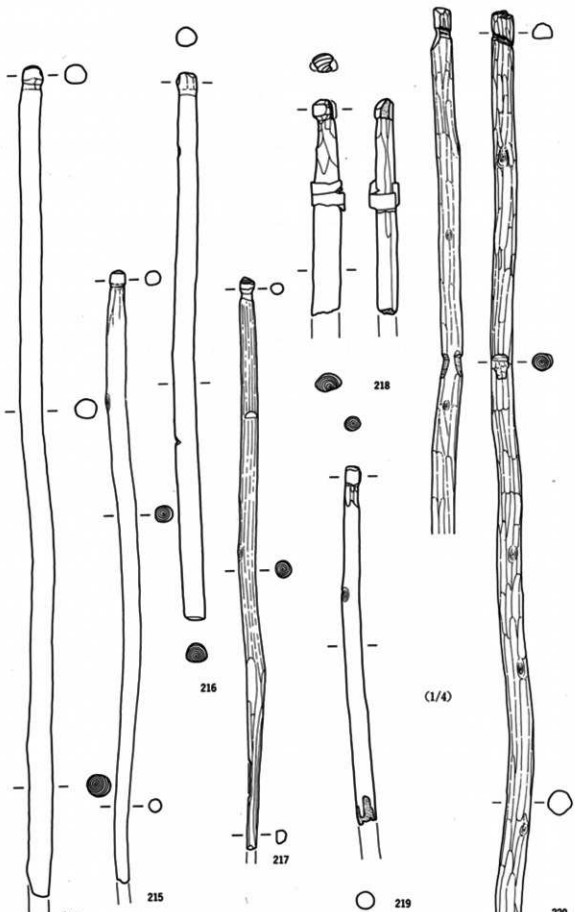


208

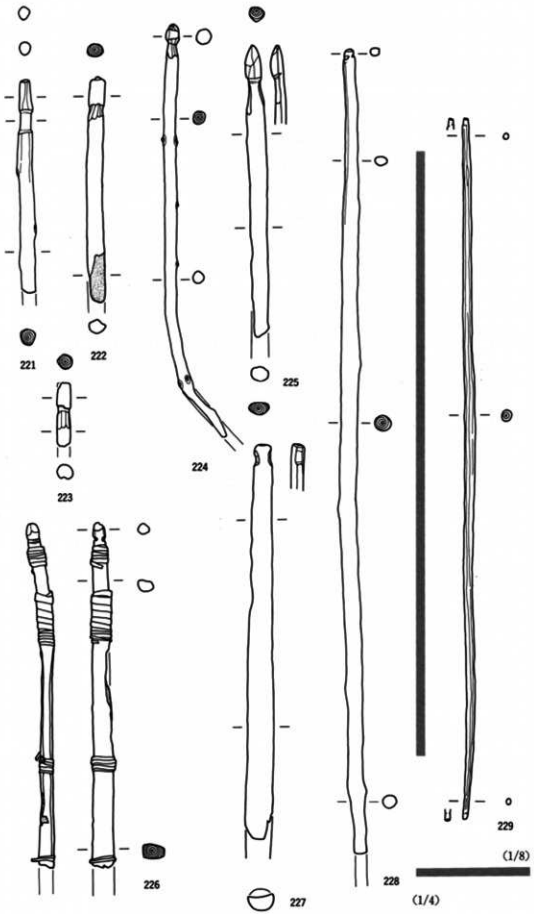
(1/4)

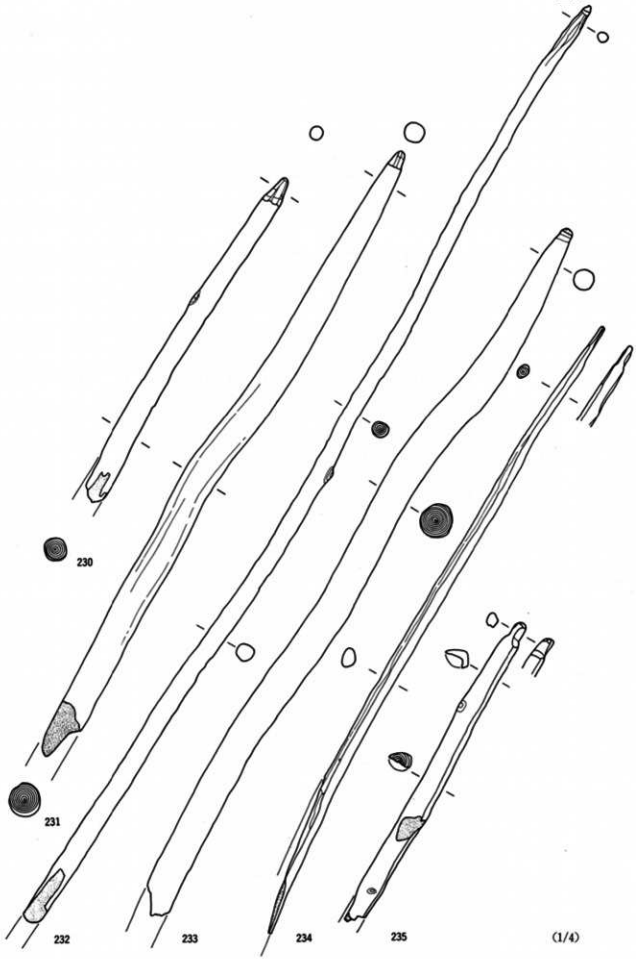
図版 42



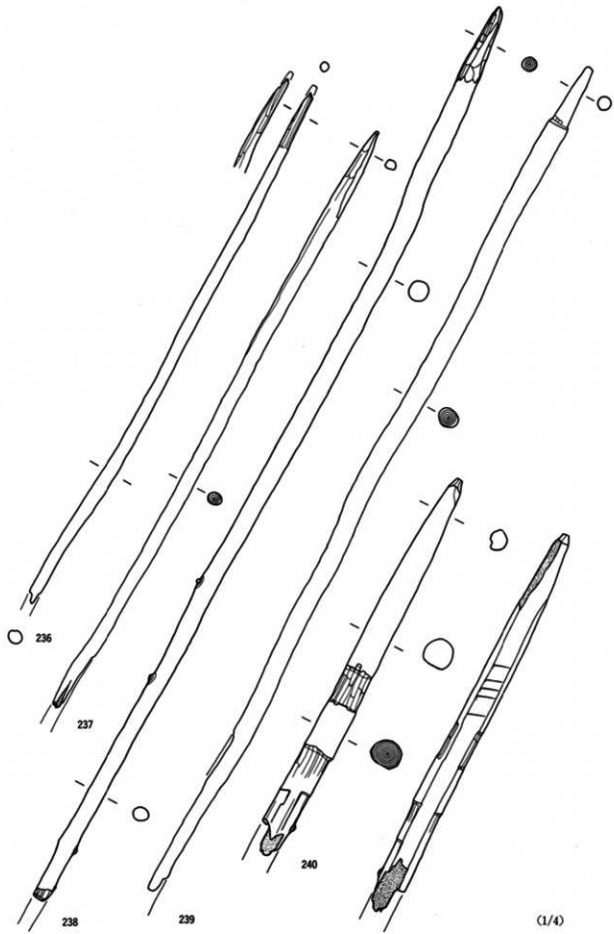

214
215
216
217
218
219
220
(1/4)

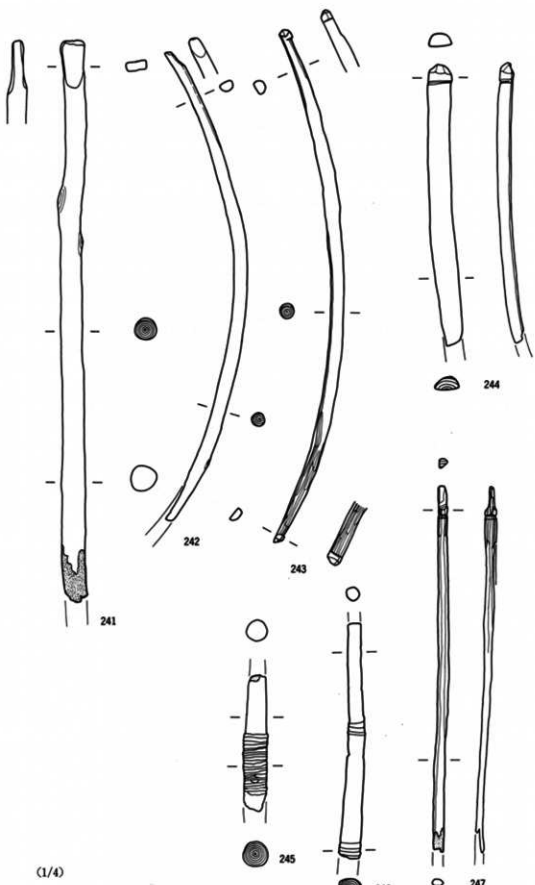
図版 44



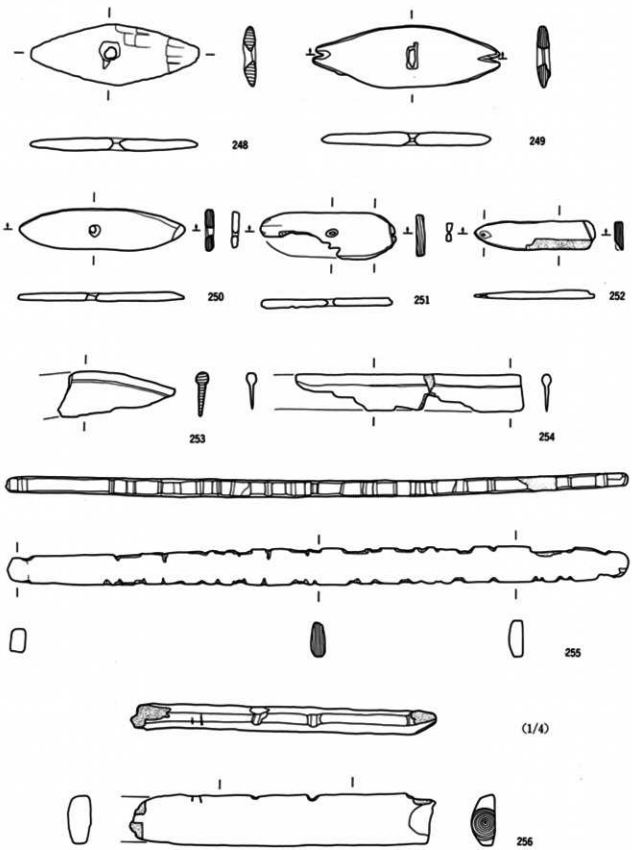

230
231
232
233
234
235
(1/4)

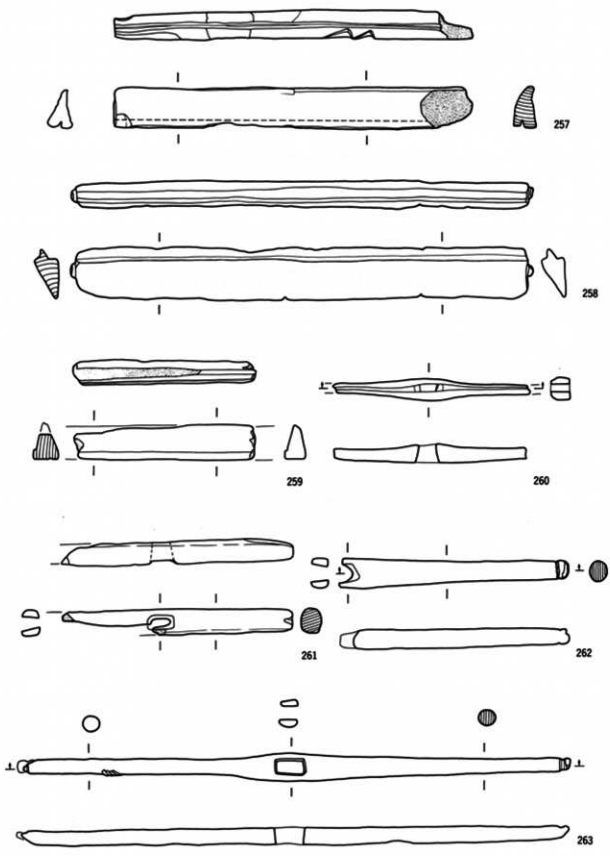
図版 46




241
242
243
244
245
246
247
(1/4)

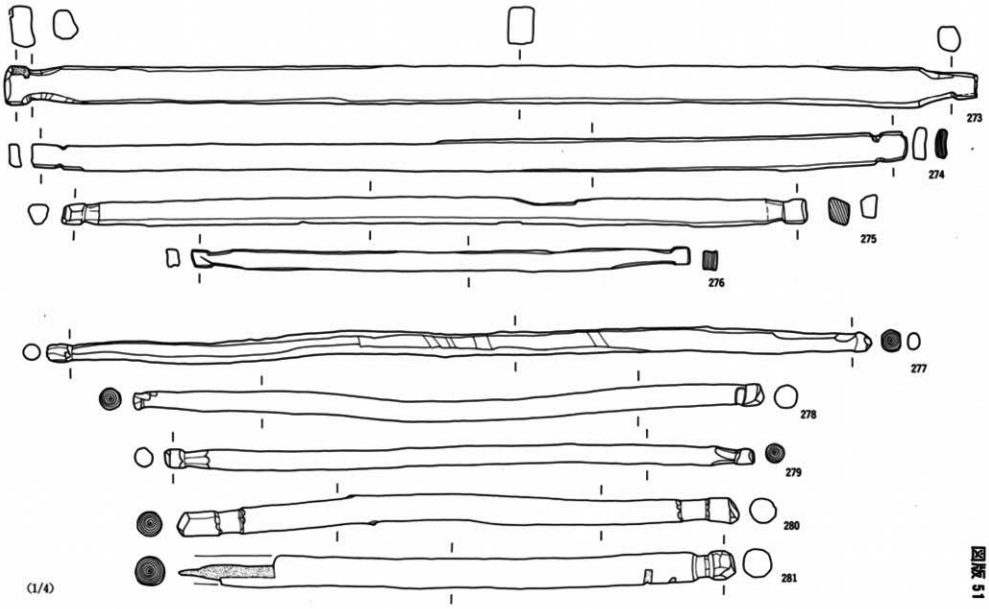
図版 48





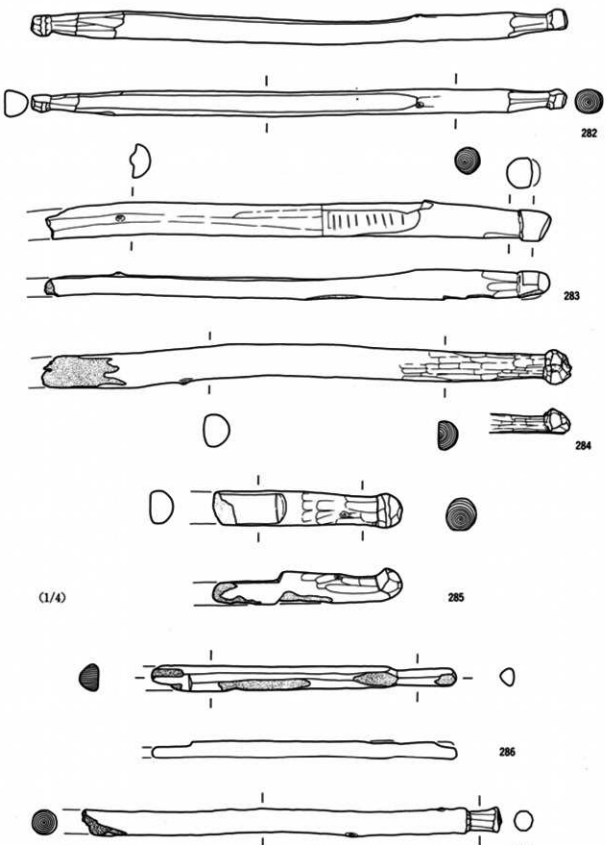
(1/4)

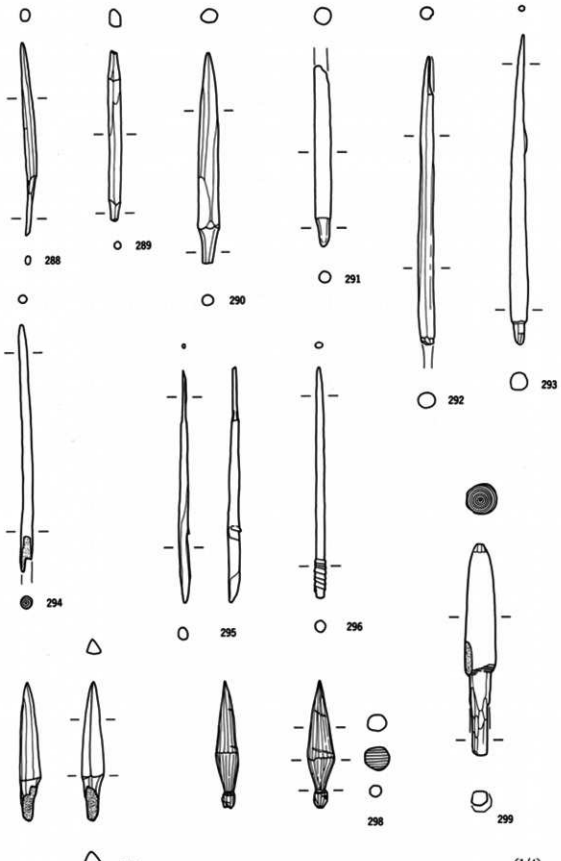
図版 50



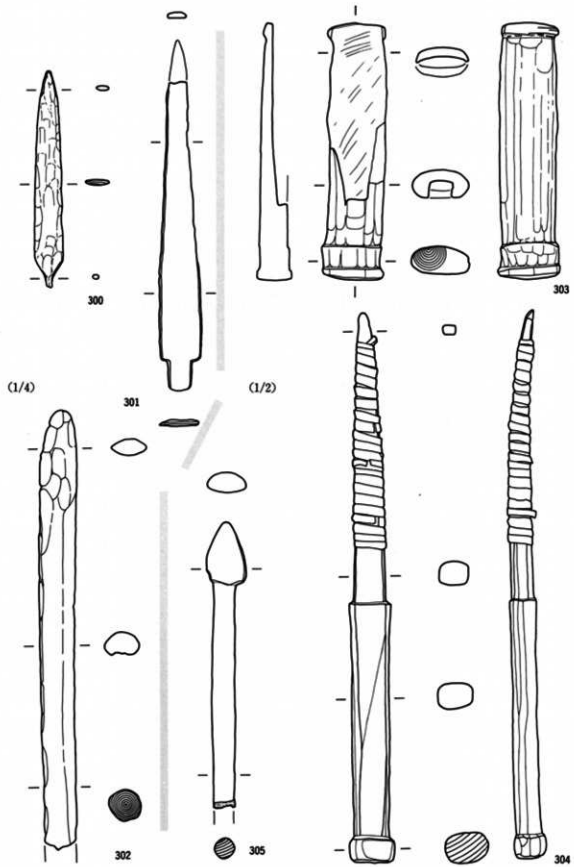
図版 51

図版 52



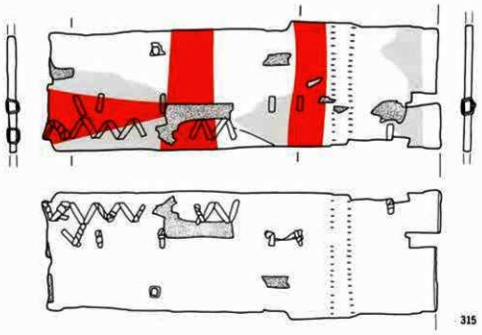


(1/4)


300
(1/4)
301
(1/2)
303
302
305
304

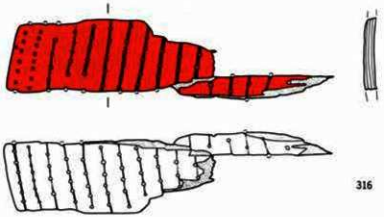
306
307
308
(1/4)

図版 56

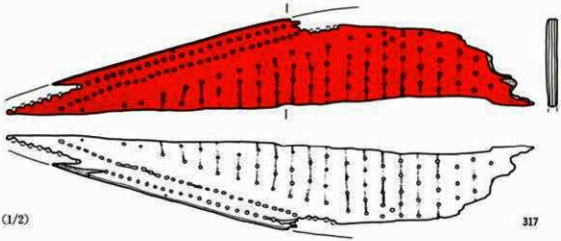


315

(1/4)

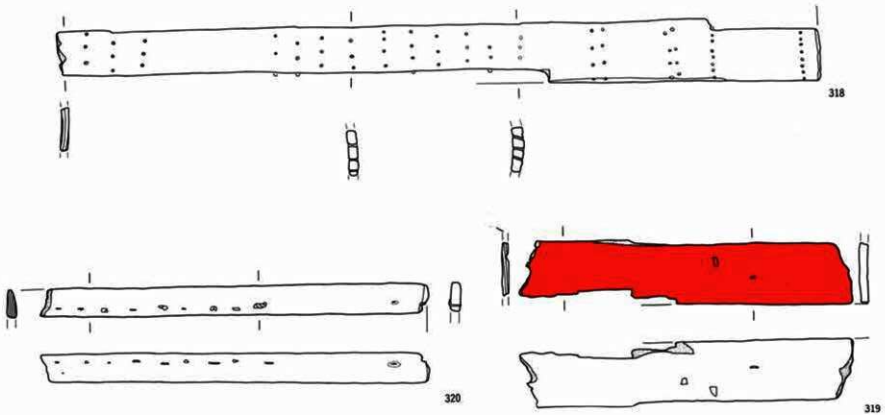


316

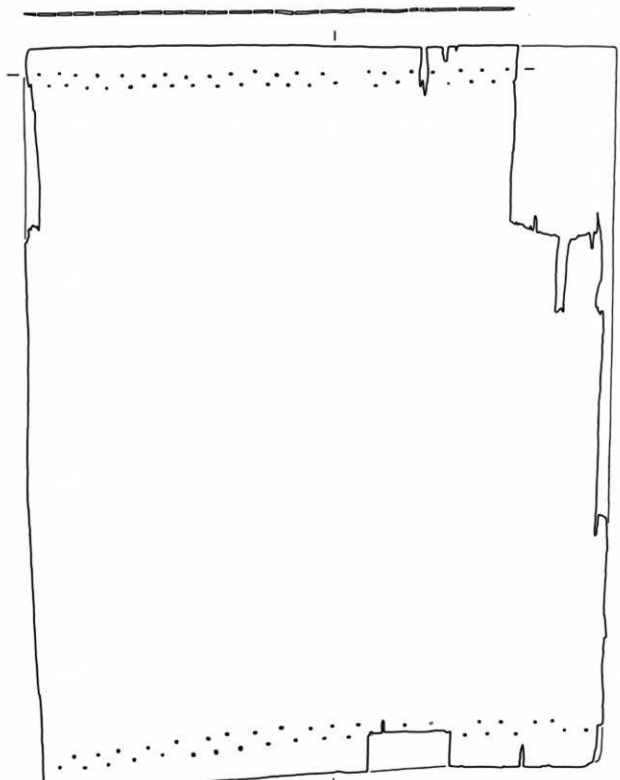


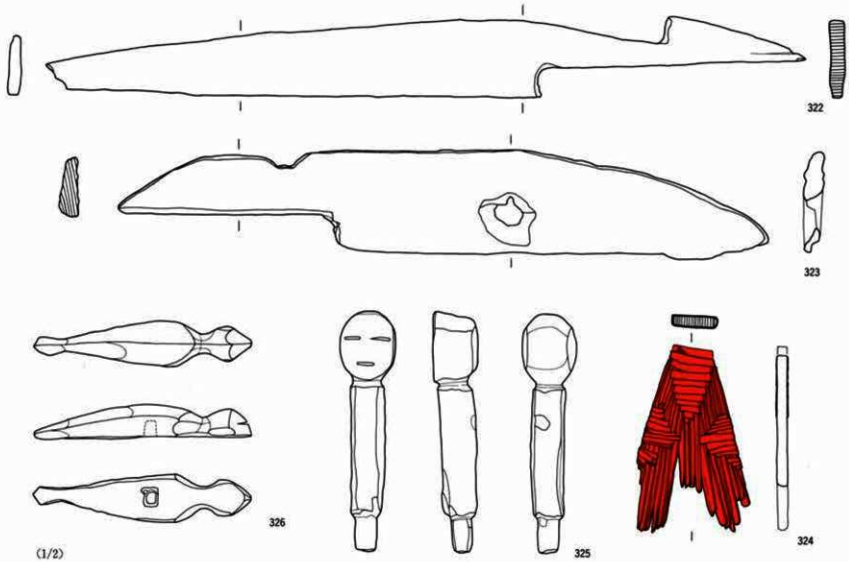
(1/2)

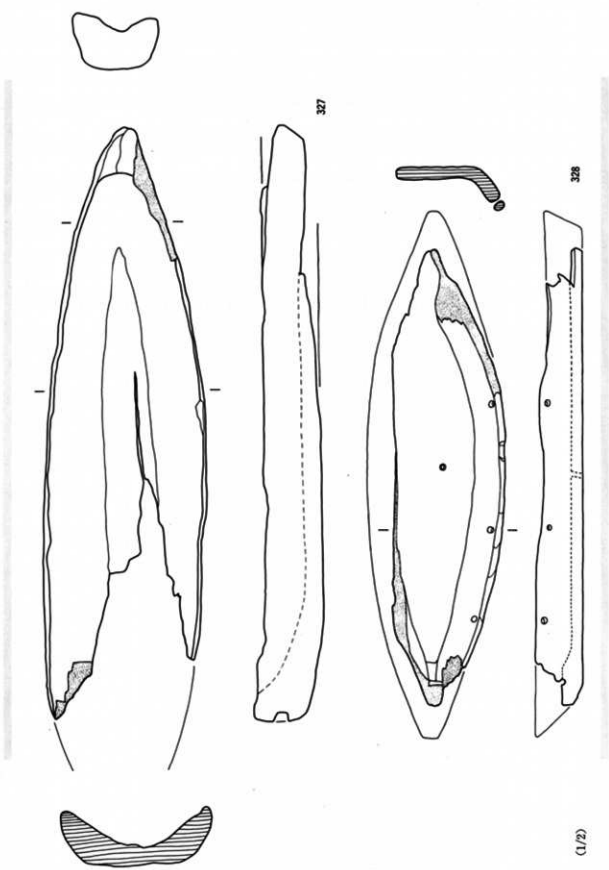
317



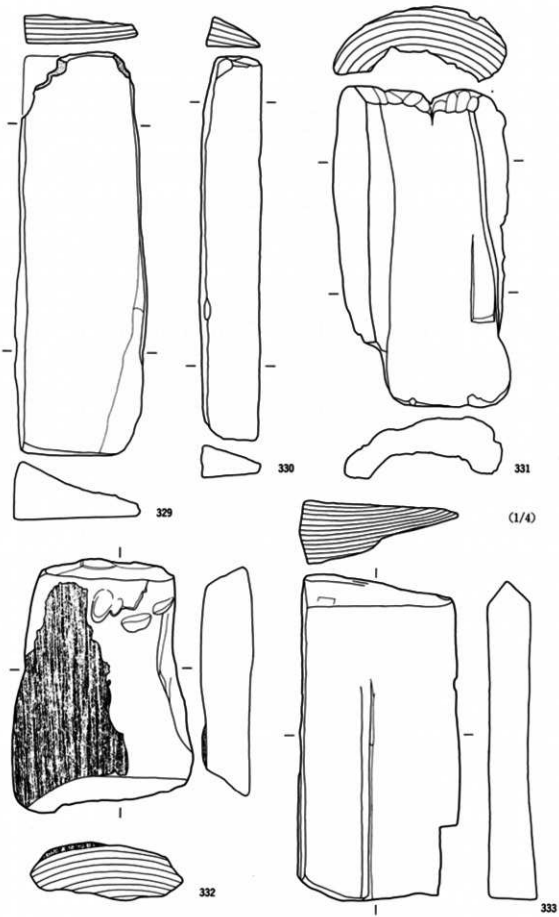
(1/4)

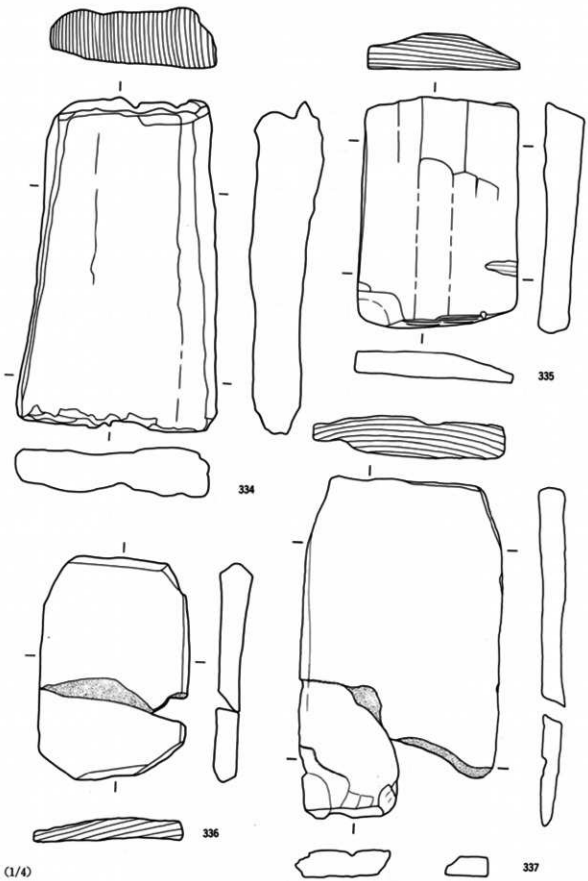

321
(1/4)


322
323
326
325
324
(1/2)

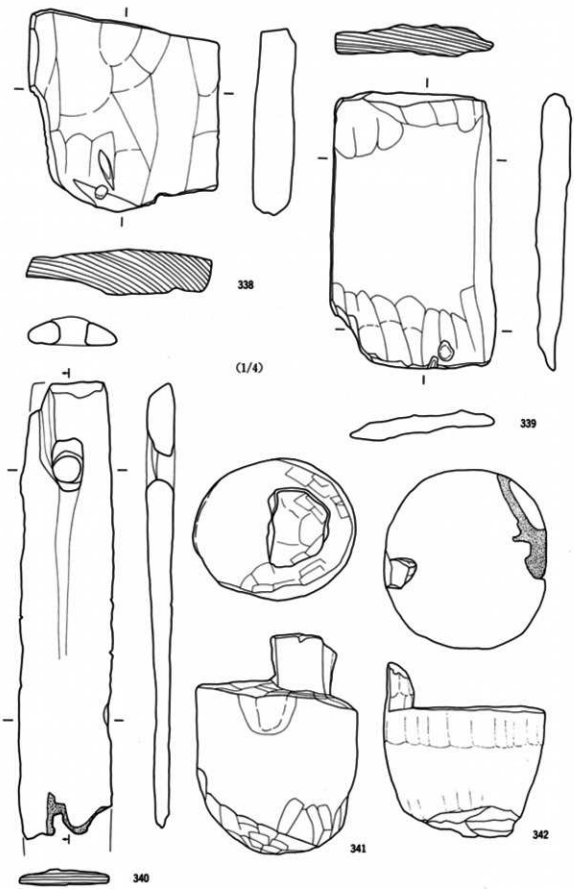

327
328
(1/2)

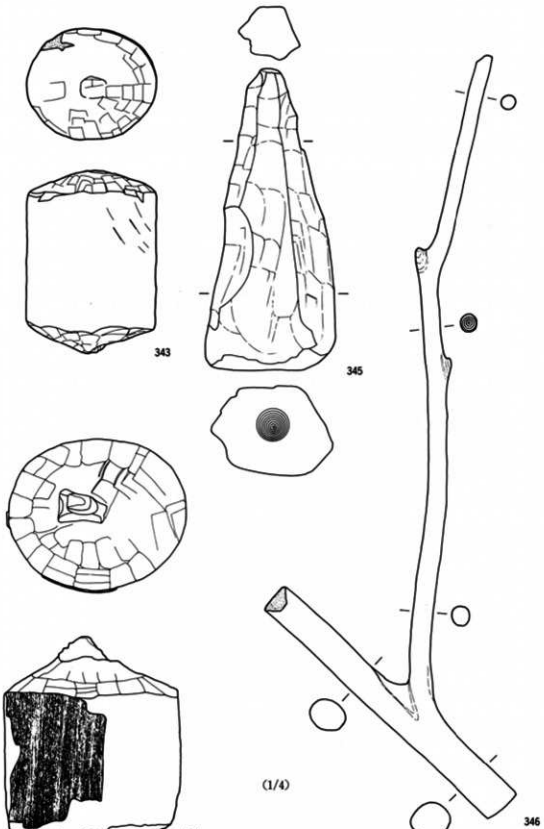
図版 62



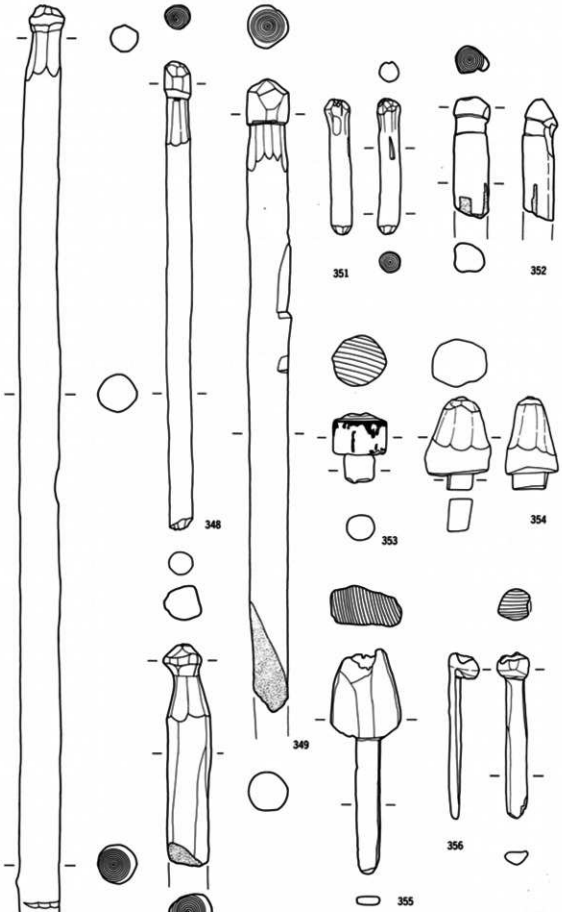


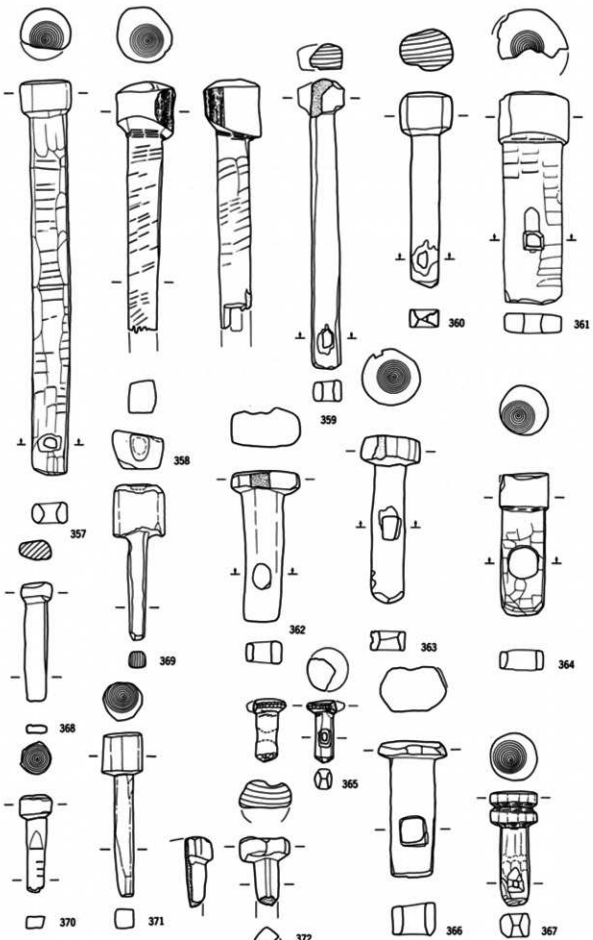
(1/4)


338
339
(1/4)
340
341
342


343
345
344
346
(1/4)

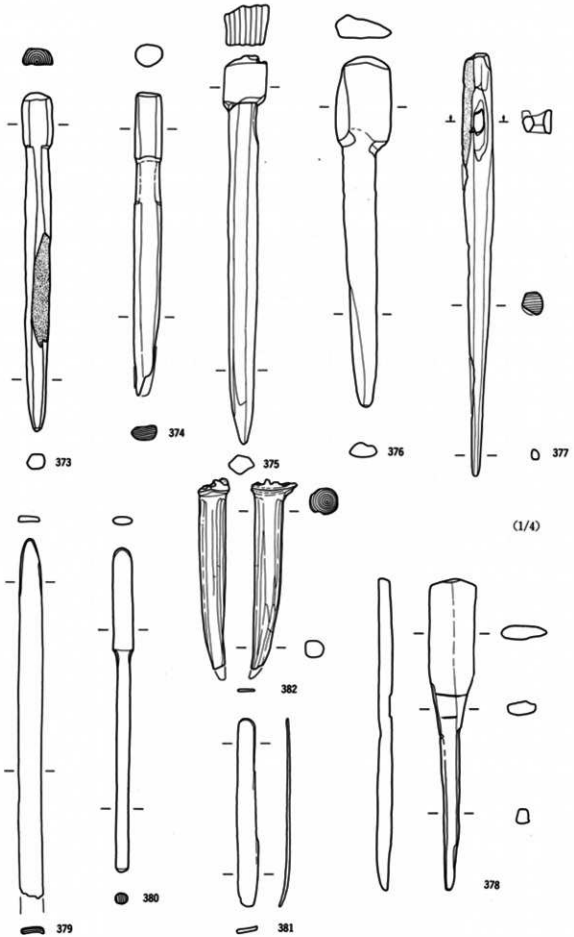
図版 66

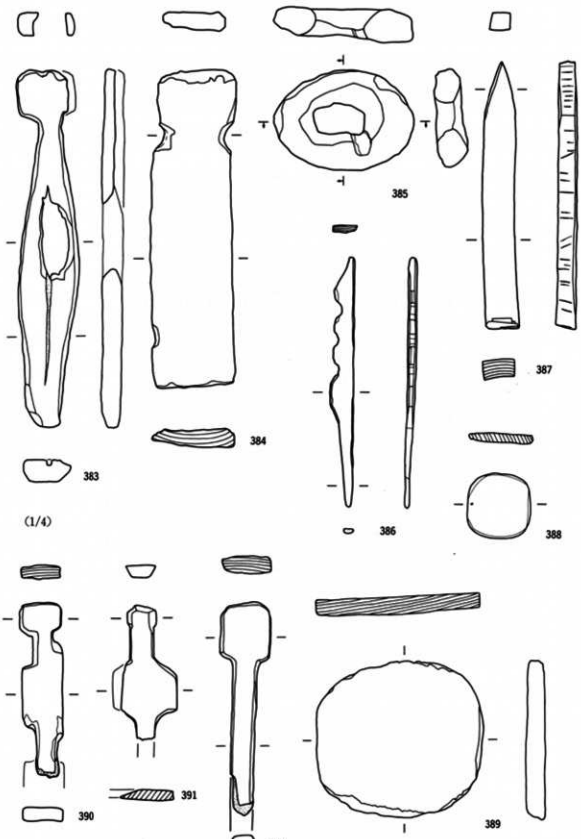




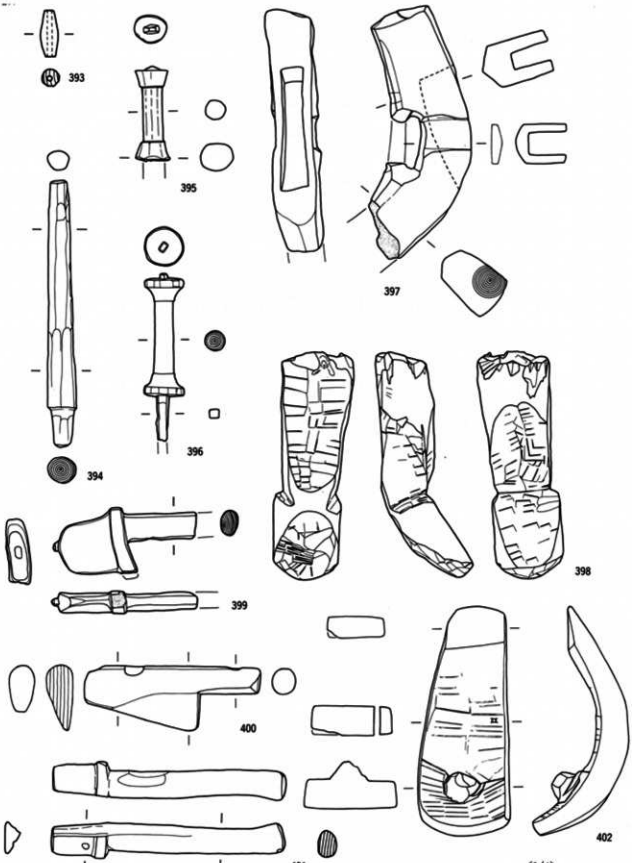
(1/4)

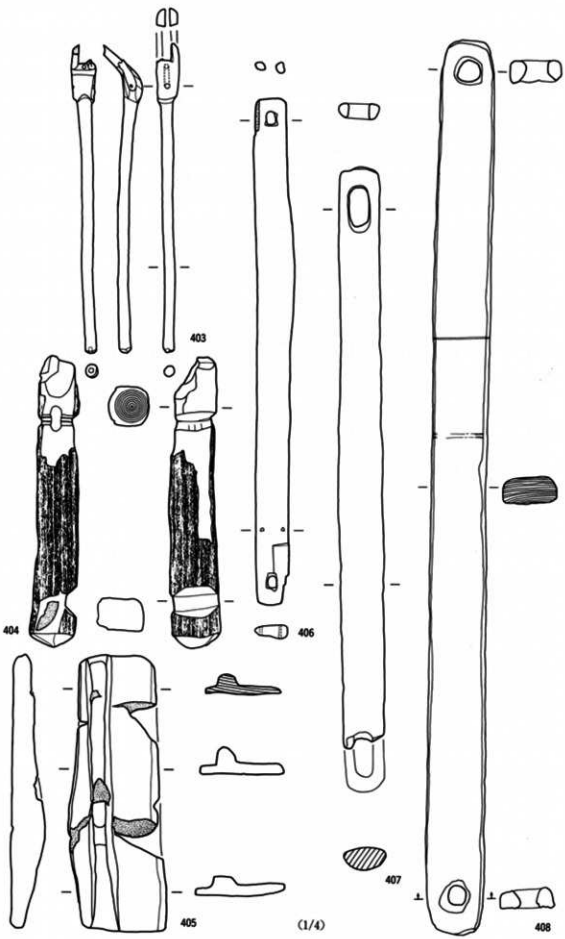
図版 68



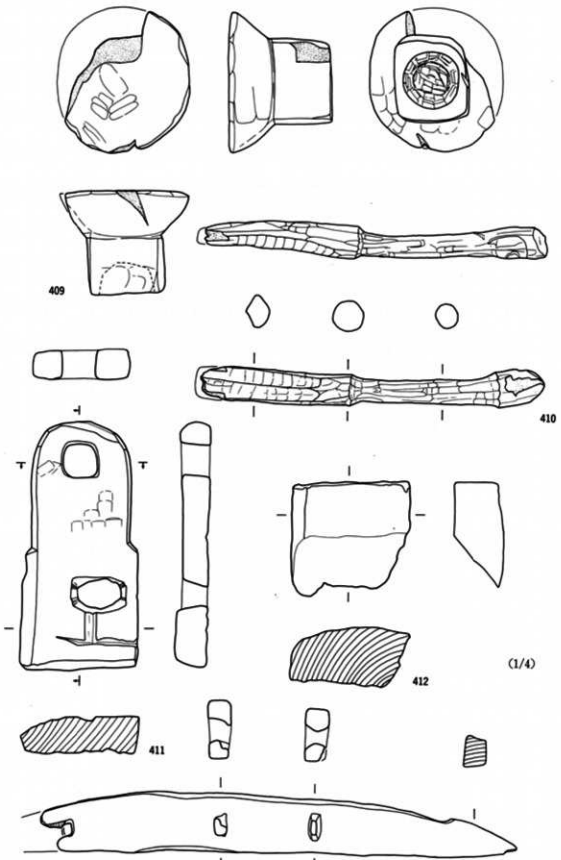

383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
(1/4)

図版 70



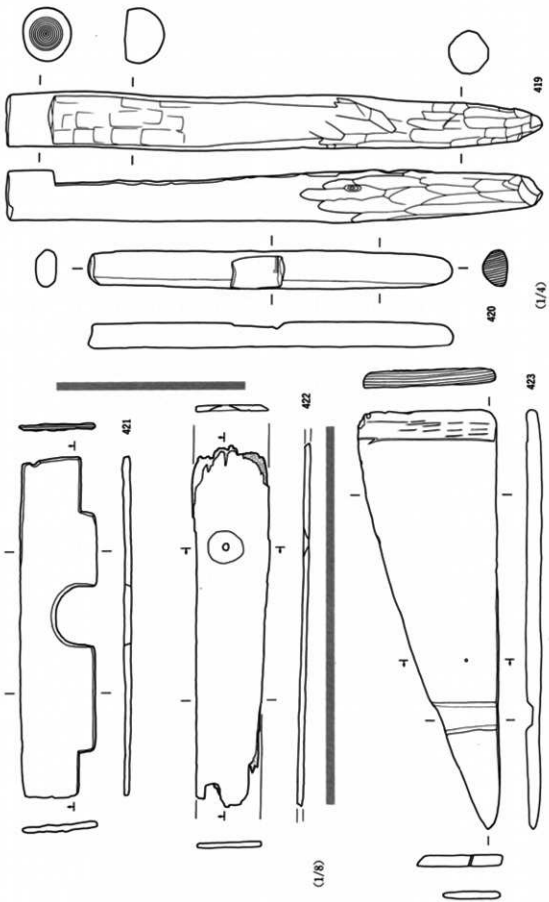

403
404
405
406
407
408
(1/4)

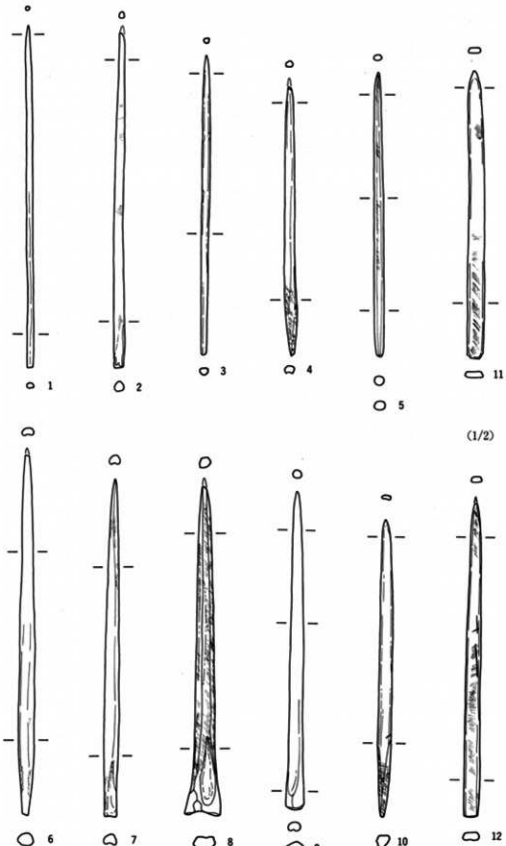
図版 72



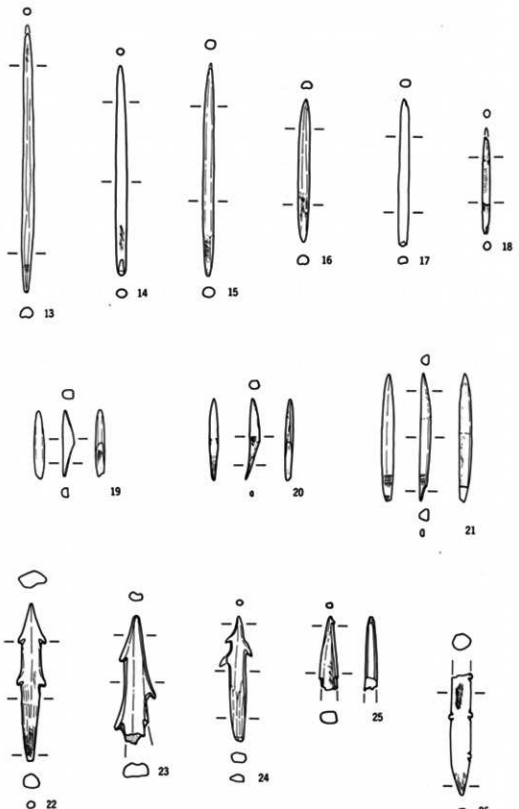
414
415
416
417
418
(1/4)
(1/8)

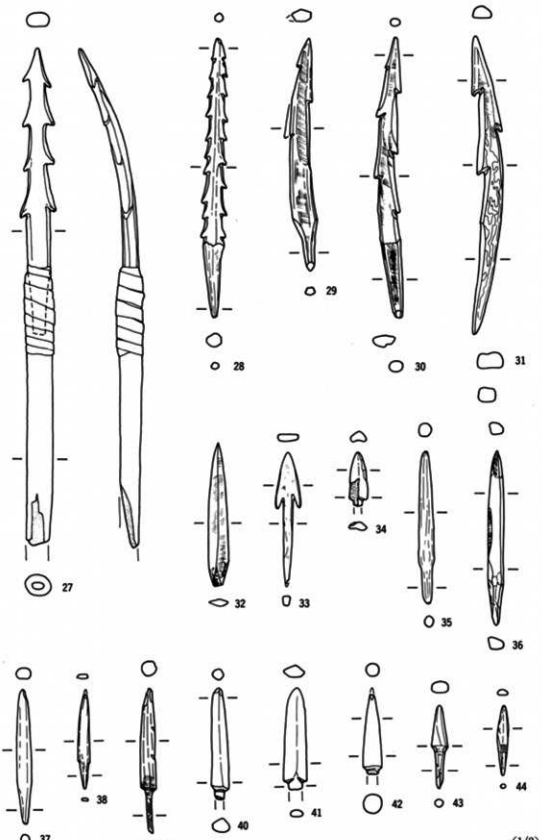
図版 74




1
2
3
4
5
11
(1/2)
6
7
8
9
10
12

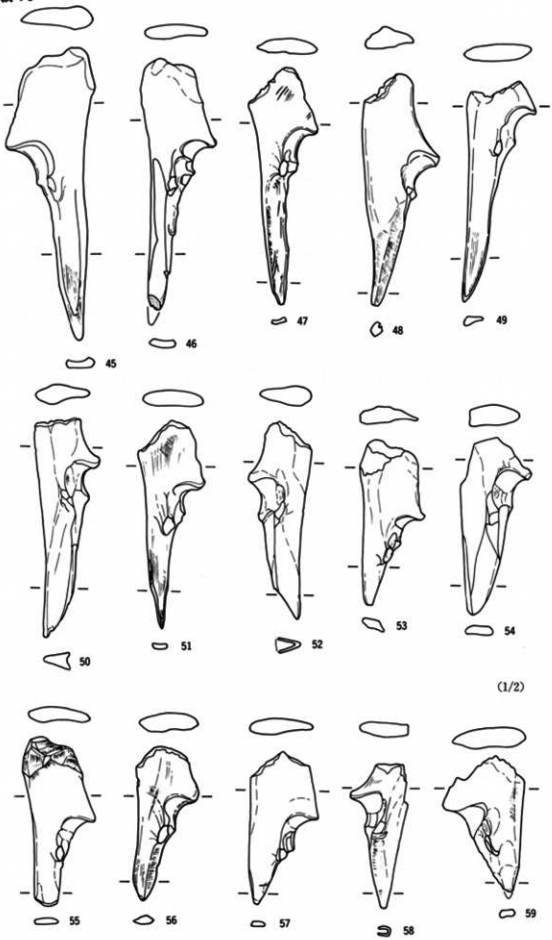
図版 76

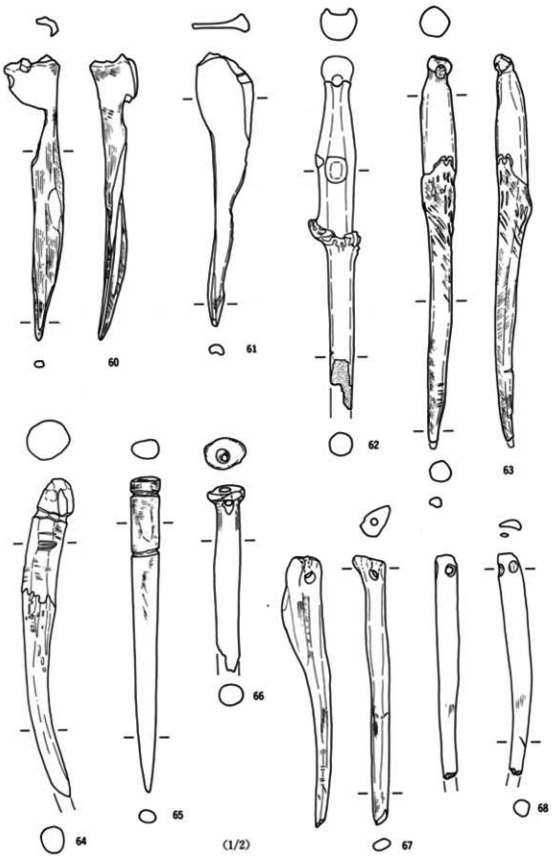




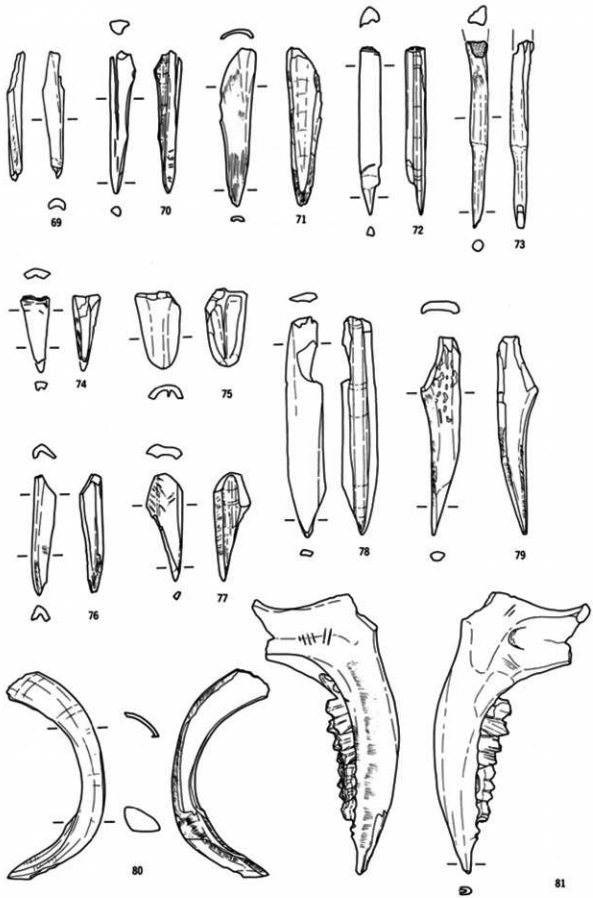
(1/2)

図版 78

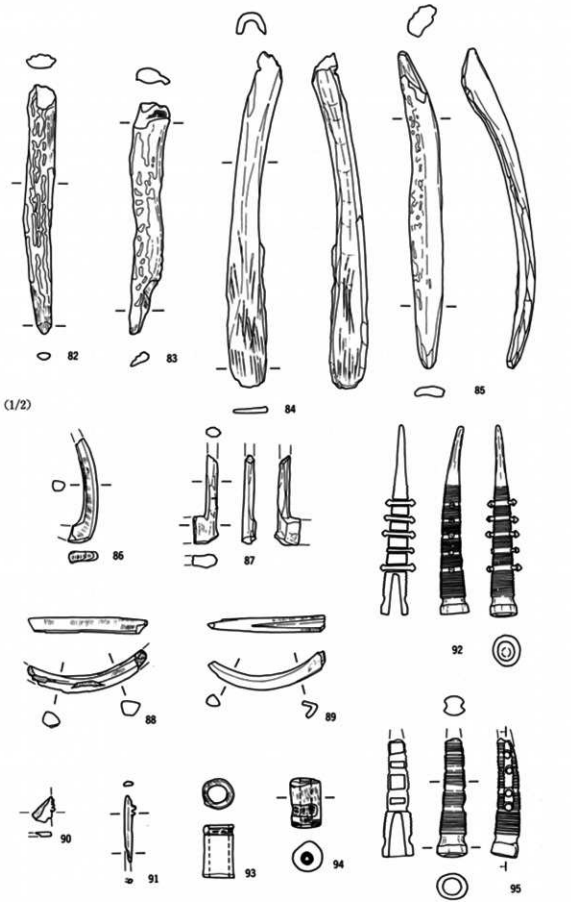



60
61
62
63
64
65
66
67
68
(1/2)

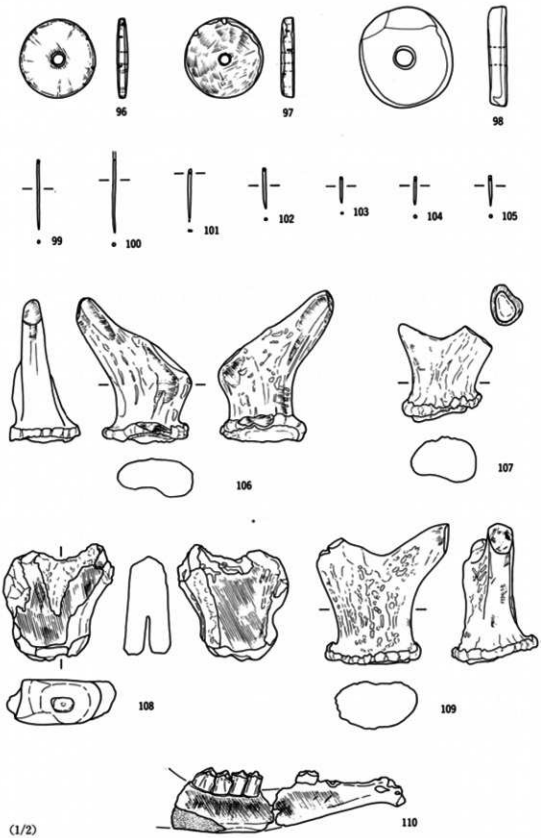
図版 80



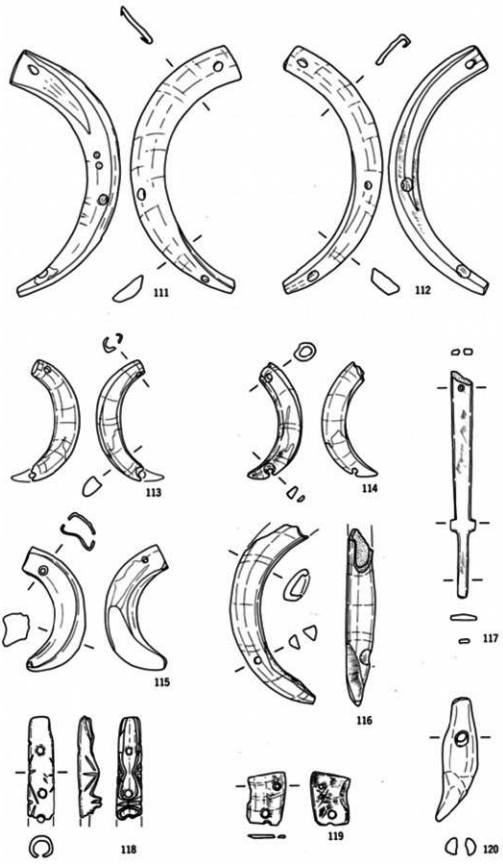
(1/2)


(1/2)
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95

図版 82

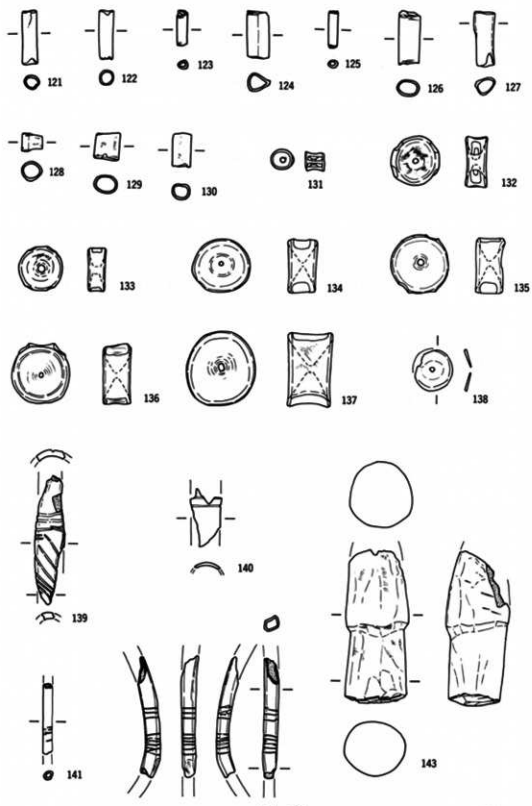


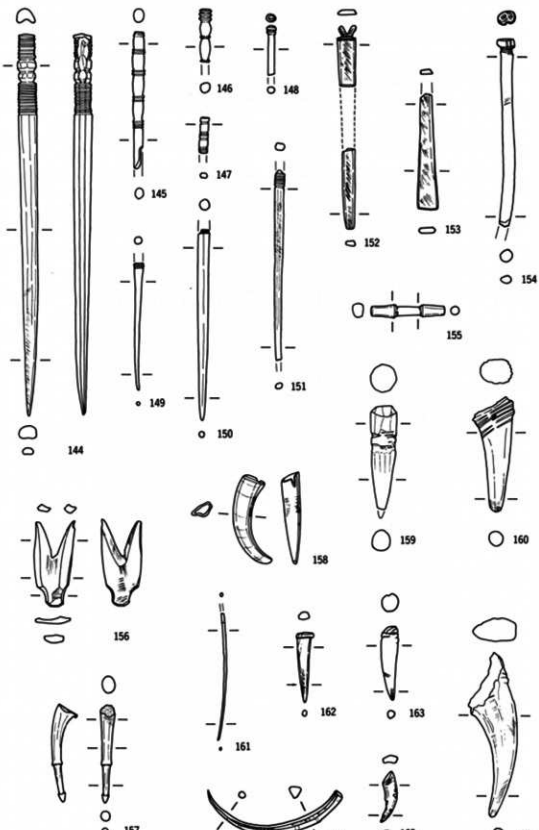
(1/2)



(1/2)

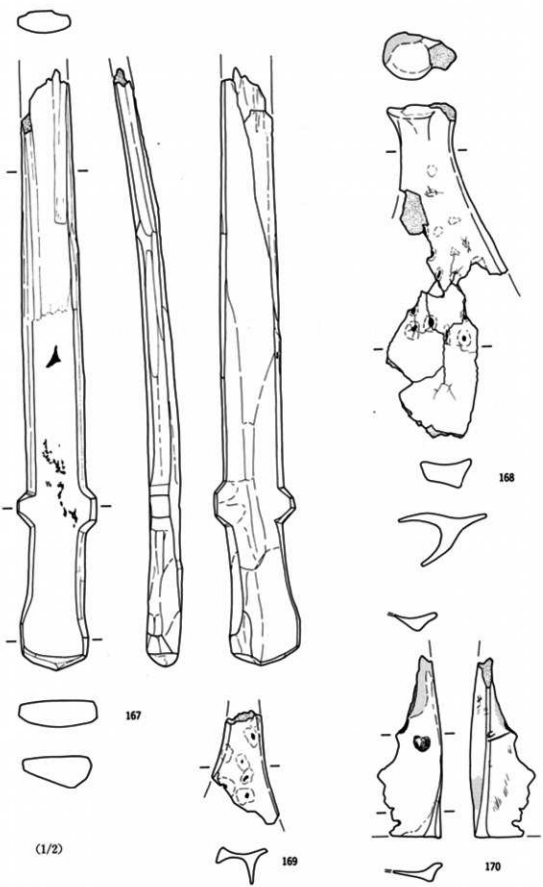
図版 84

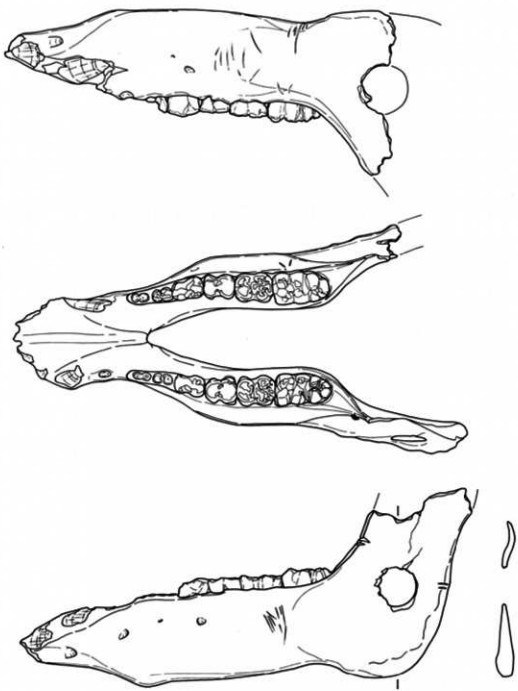

121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
(1/2)


144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166

(1/2)

図版 86

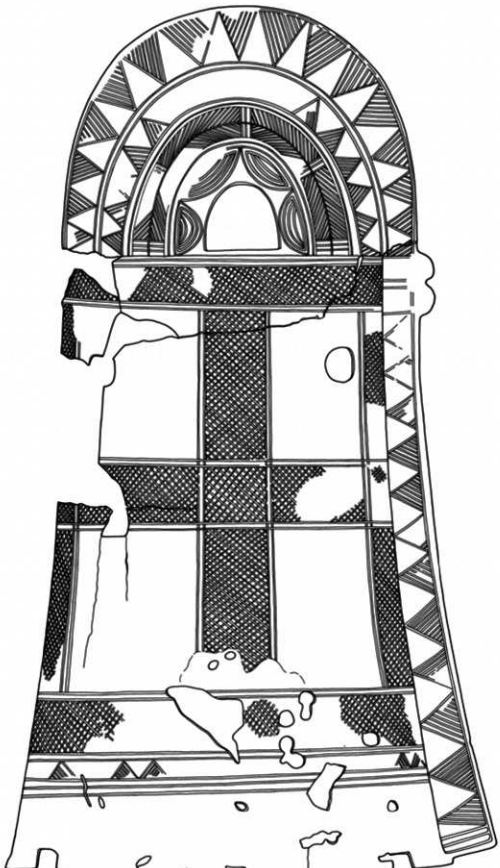




(1/2)

171

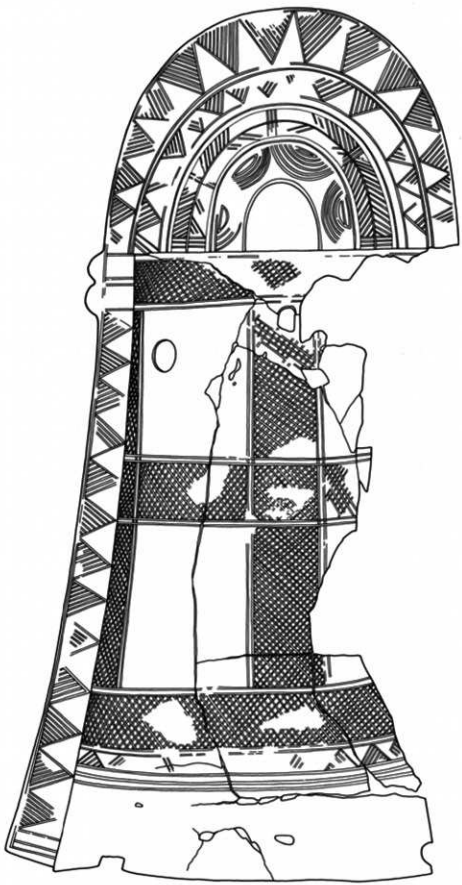
図版 88



1

(1/2)

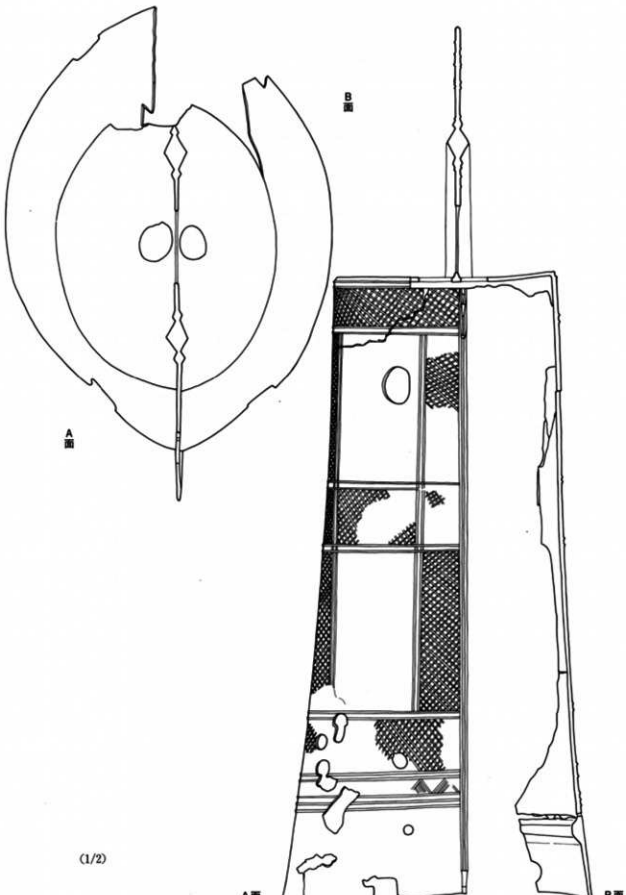
A面

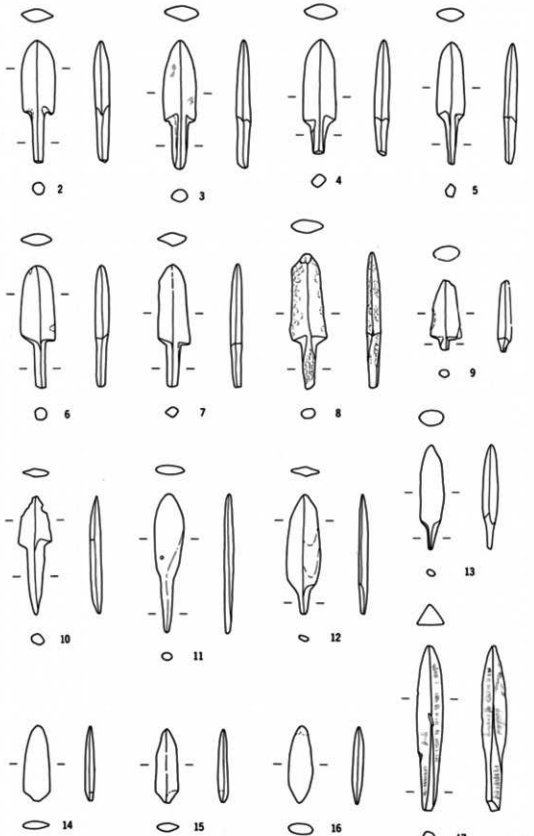


(1/2)

B面

図版 90





(1/1)

図版 92

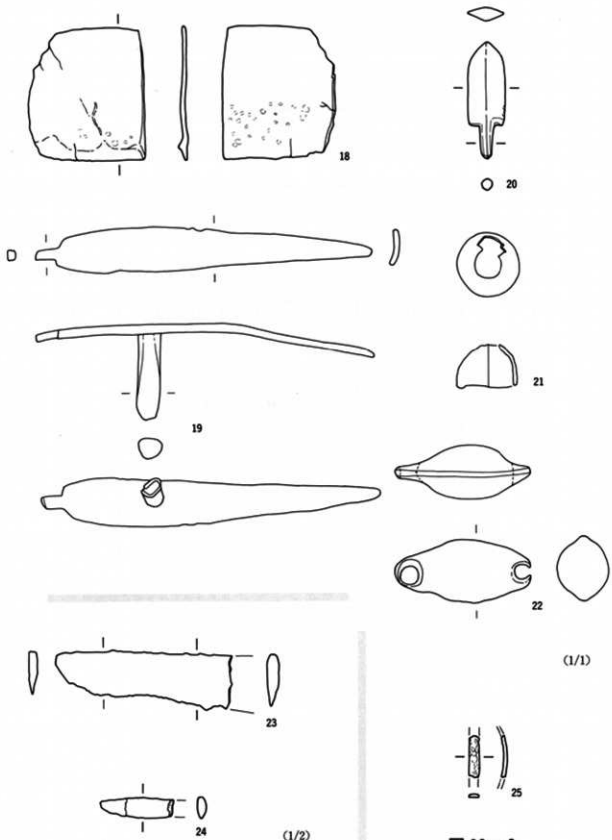


図 92－2

A面

89 B区出土銅鐸

B面

写真図版 2

A面

B面

写真図版 4

12

4

18

7

3

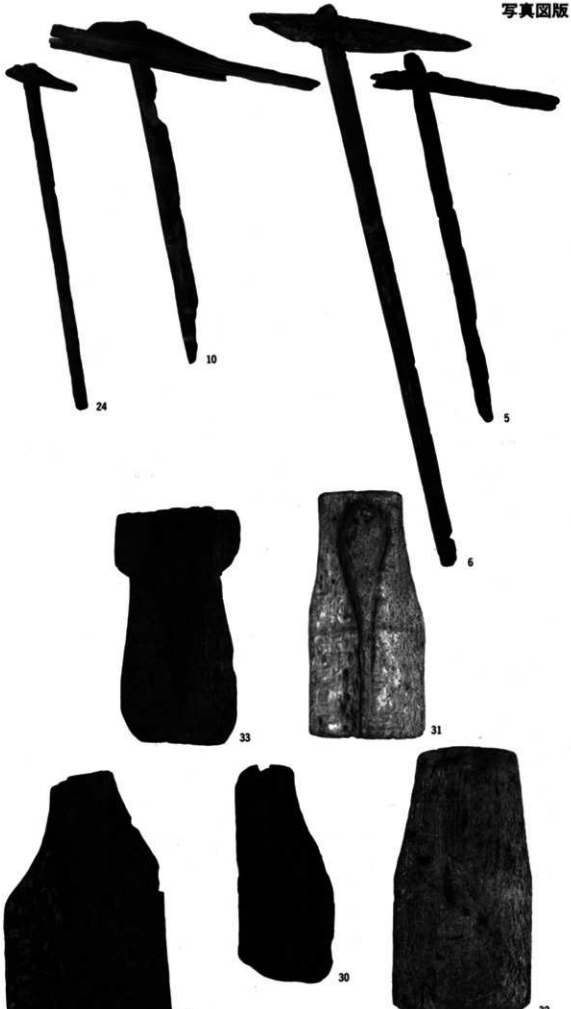
2

5

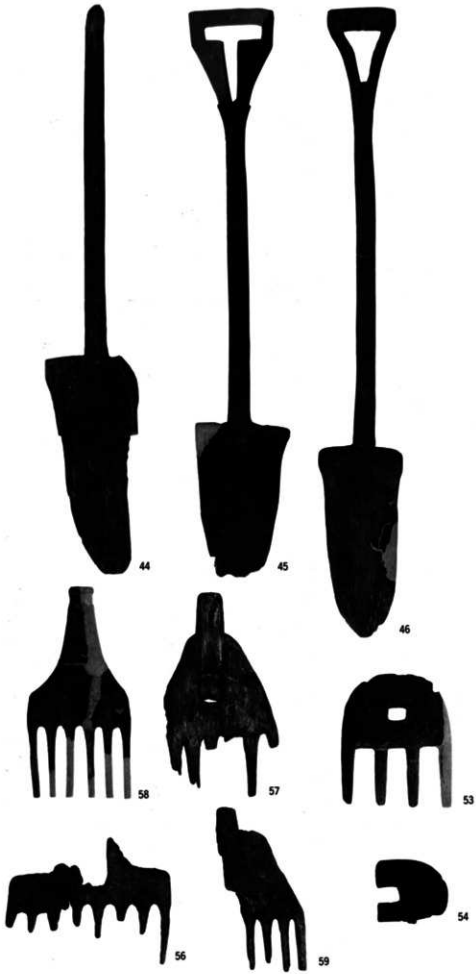
6

10

24


24
10
5
6
33
31
37
30
32

写真図版 6



62

60

62

60

63

65

80

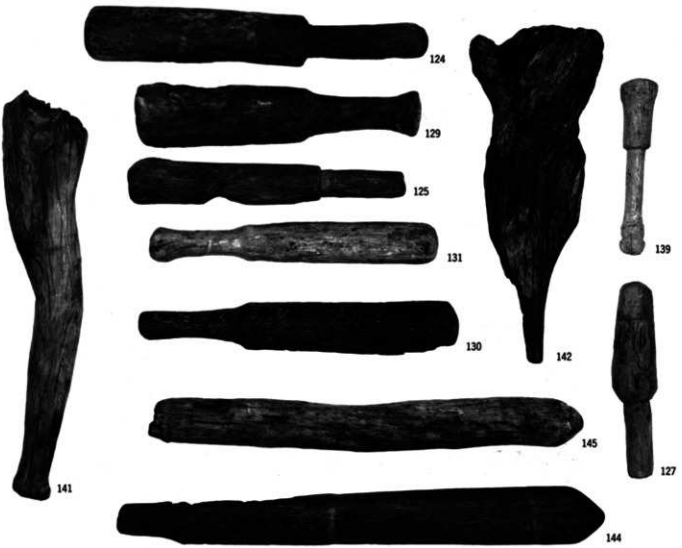
74

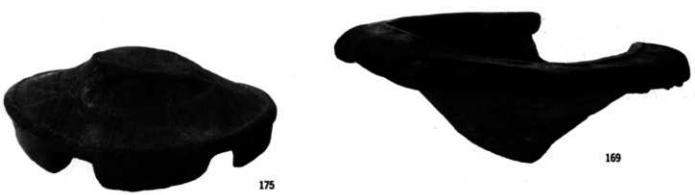
76

71

79

写真図版 8


124
129
125
131
130
145
144
142
139
127
141


175
169

写真図版 10

188

175

169

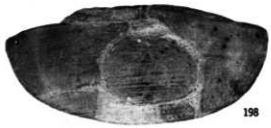
190

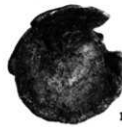
203

202

197

156


198

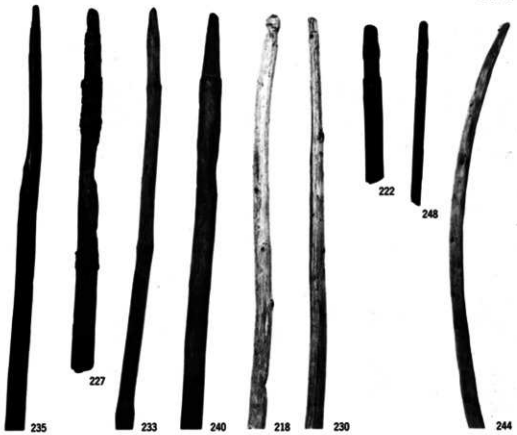

158

207

204

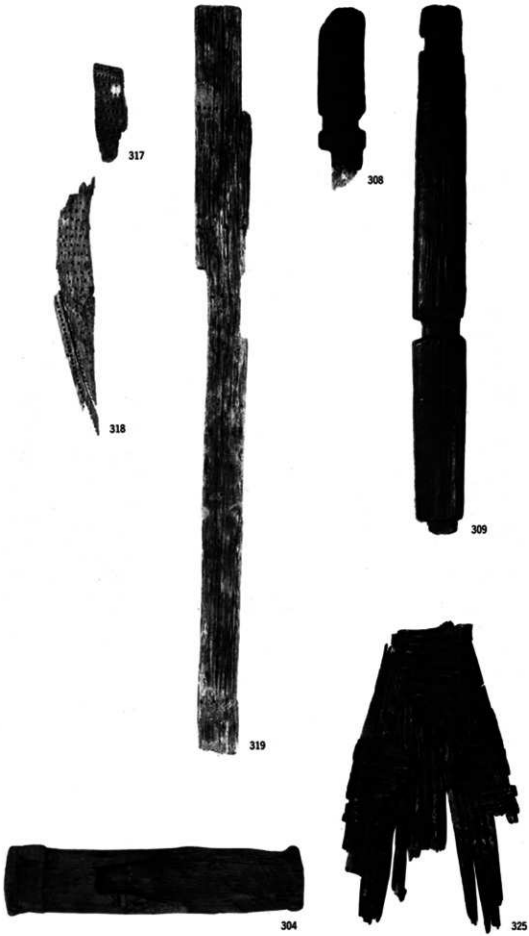
209

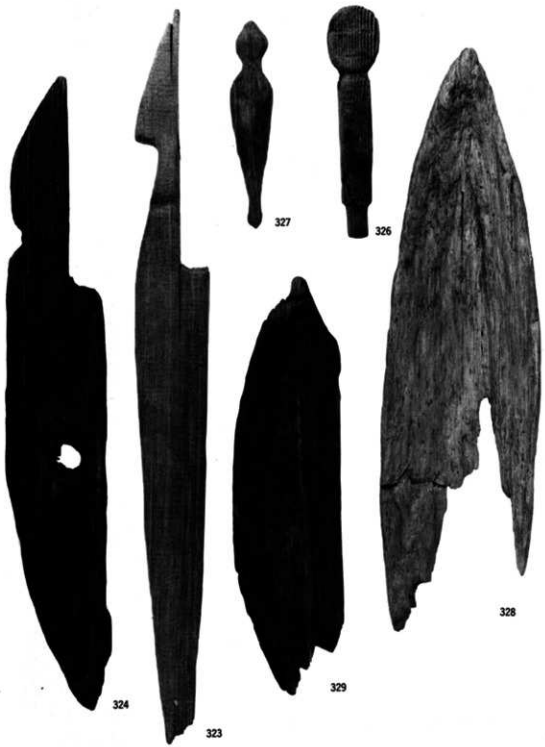
205


235
227
233
240
218
230
222
248
244

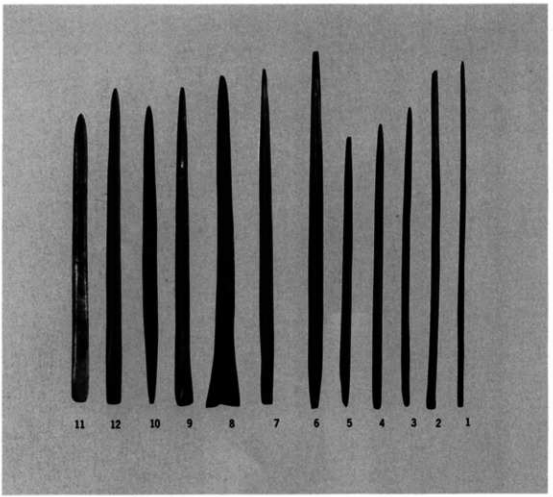
297
298
294
305
306
302
301

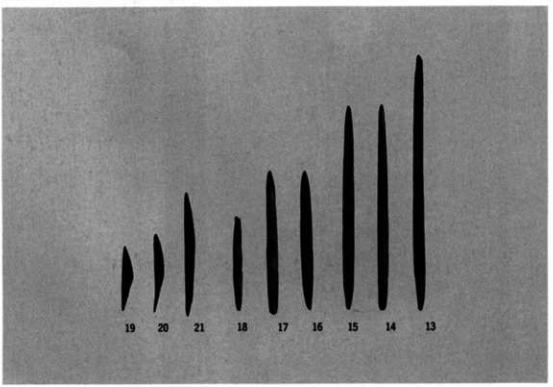
写真図版 12

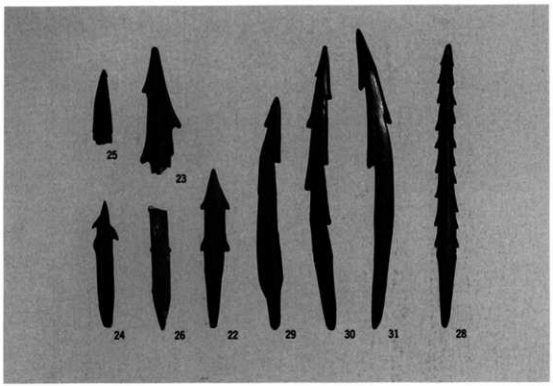


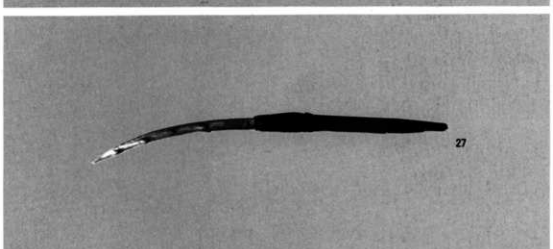

327
326
328
324
323
329

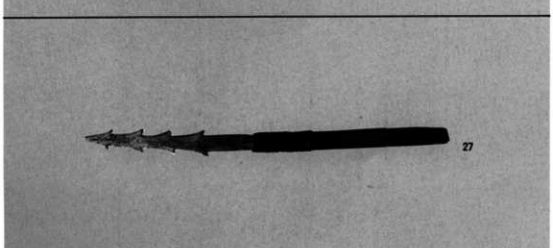
写真図版 14



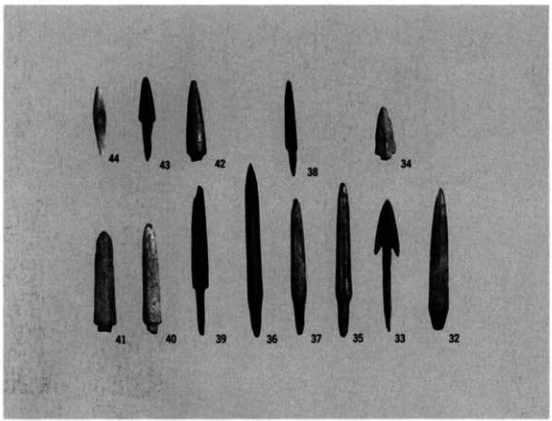


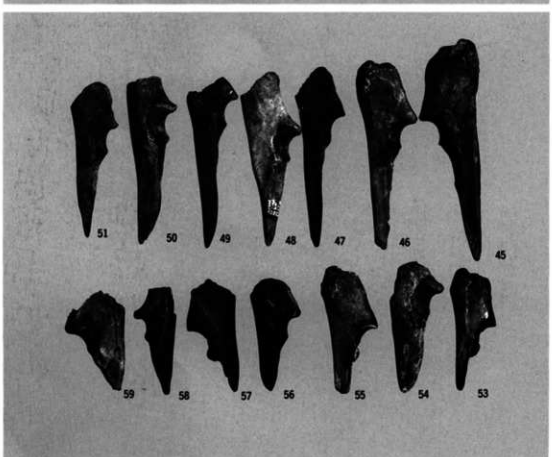

25
23
24
26
22
29
30
31
28

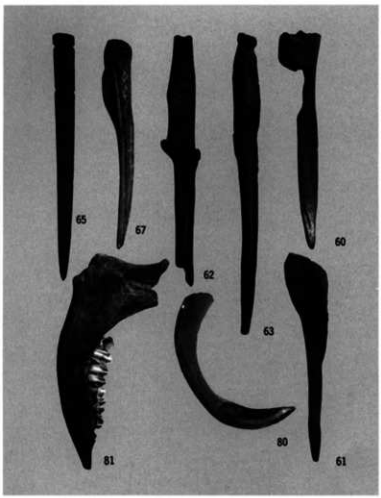

27

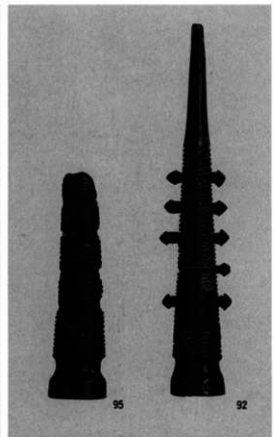

27

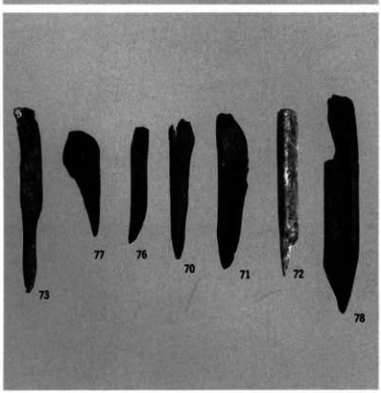
写真図版 16

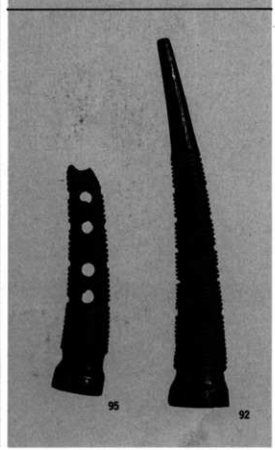

44
43
42
38
34
41
40
39
36
37
35
33
32

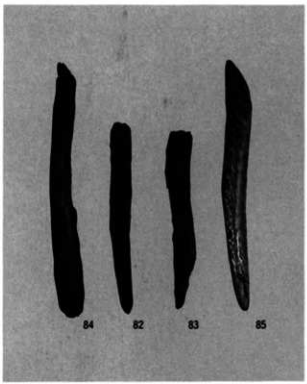

51
50
49
48
47
46
45
59
58
57
56
55
54
53

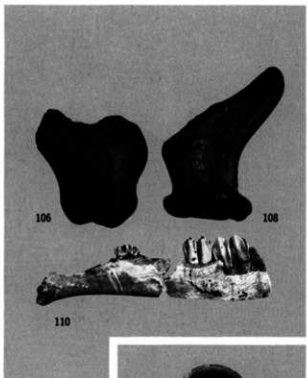

65
67
62
63
60
81
80
61

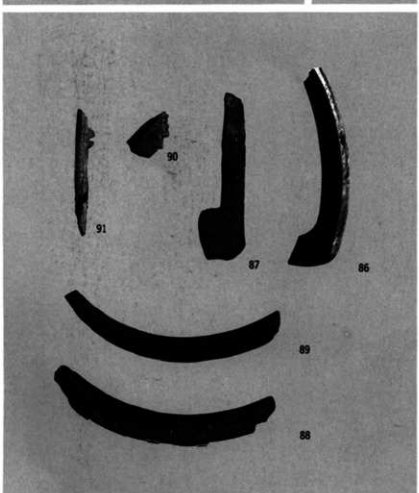

95
92

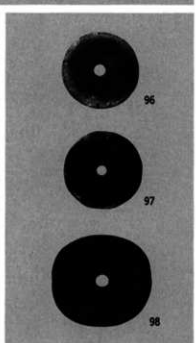

73
77
76
70
71
72
78

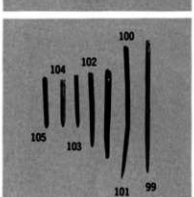

95
92

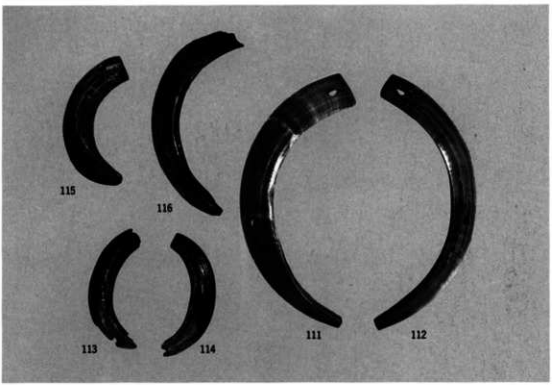

84
82
83
85

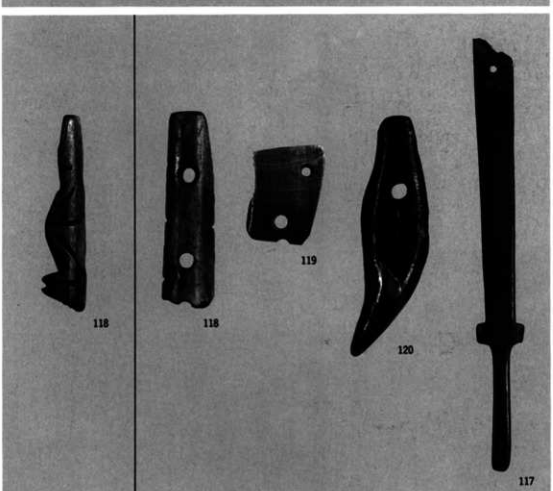

106
108
110

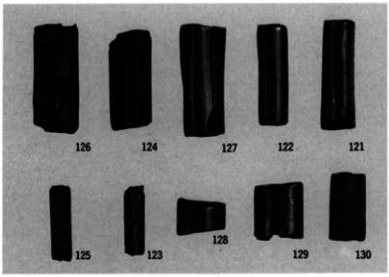

90
91
87
86
89
88

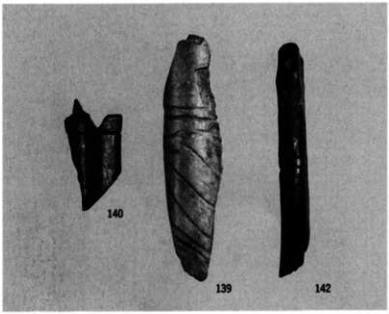

96
97
98

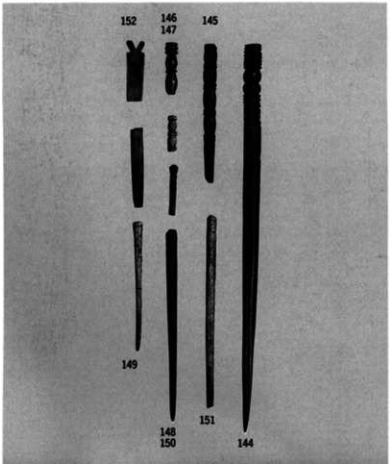

100
104
102
105
103
101
99

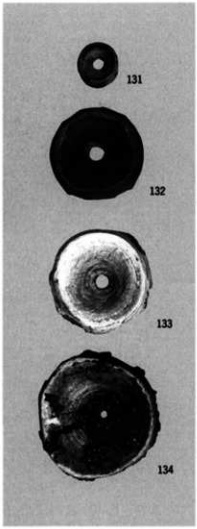

115
116
113
114
111
112

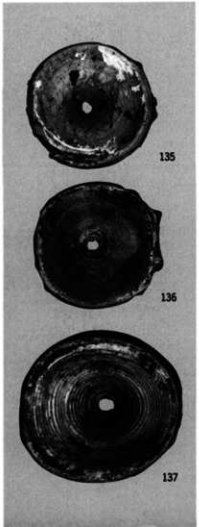

118
118
119
120
117

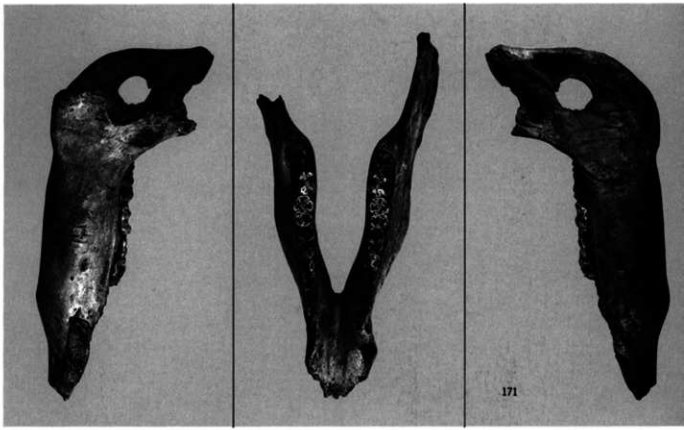

126
124
127
122
121
125
123
128
129
130

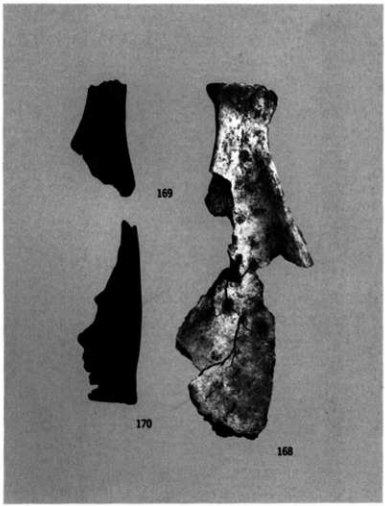

140
139
142

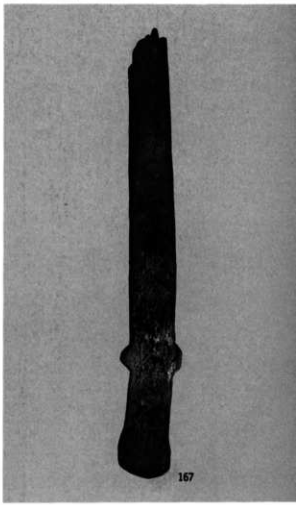

152
146
147
145
149
148
150
151
144

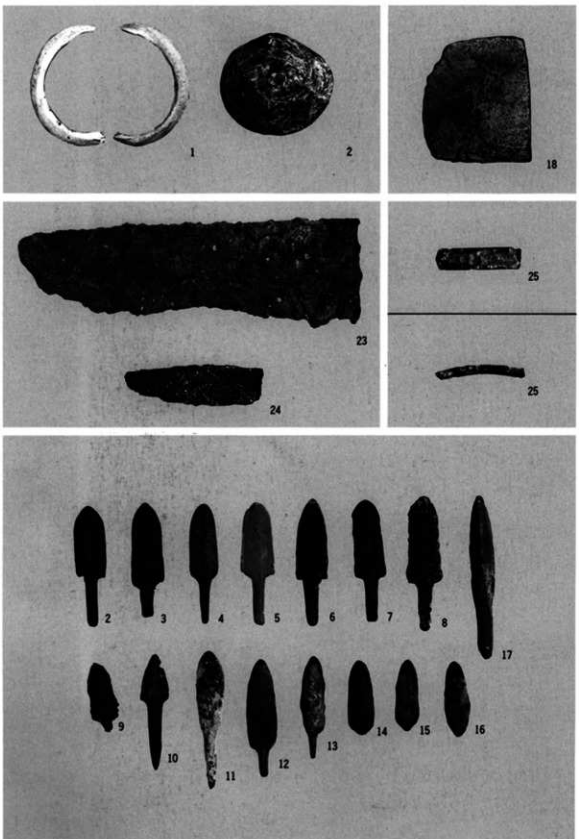

131
132
133
134


135
136
137


171


169
170
168


167


1
2
18
23
24
25
25
2
3
4
5
6
7
8
17
9
10
11
12
13
14
15
16

上：61 N SZ 208 西周溝出土－ 6 －
下：61 T SZ 301 北周溝出土—44・45・46—

上：61 A 谷 A 出土—24—
下：61 A 谷 A 出土—24—

上：61 T SZ 301 北周溝出土—35・36—
下：61 T SZ 303 西周溝出土—10・11—

上：63 D SD 01 出土—104—
下：63 D SD 05 出土—100—

上：61 H 谷 A 出土—360—
下：61 H 谷 A 出土—323—

上：60 E 谷 A 出土—321—
下：61 A 谷 A 出土—186—

上：61 A SX 02 出土－74－
下：61 A SX 02 出土－2－

上：61 A SX 02 出土－53－
下：61 A SX 02 出土－79－

上：63 D SD 06 出土－143－
下：63 D SD 06 出土－169－

上：61 H 検出一第 16 図 1
下：61 H 検出－7－

上：61 A SX 02 出土－111・112－
下：60 E 検出－27－

上：61 E SD 20 出土－197－
下：61 H 谷 A 出土－327－

朝日遺跡の風景
―木・骨角・金属―

●銅 鐸

▶A面

◀B面

●木製品の出土状態

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第32集

朝 日 遺 跡 III

1992年3月31日

編 集　財団法人
発 行　愛知県埋蔵文化財センター

印 刷　株式会社 クイックス